

第Ⅱ部 2014-2015年度における各研究室等の活動

01 言語学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2015年度末現在の教員数は、教授2名、准教授1名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室、中国語中国文学研究室の教員をはじめ、本学の日本語教育センター、および情報理工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では10名前後で、大学院修士課程へは、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。博士課程大学院生の間では博士論文を書く態勢が定着してきている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。また、2012年度からは、方法基礎にも出講している。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学レポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会のいずれかの委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年1人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。

当研究室では、1998年以來、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。そのURLは次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>

(4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、アメリカ、インドネシア、韓国、中国、ポーランド、ウズベキスタンなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011年5月22日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012年に大学院生1名が1学期間香港中文大学に留学した。2013年にも、夏期講座に大学院生1名が参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

林 徹 (教授)	: チュルク語学	1997年4月～現在
西村 義樹 (教授)	: 認知言語学	2004年4月～現在
小林 正人 (准教授)	: 歴史言語学	2010年4月～現在

(2) 外国人研究員・内地研究員

	2014年度	2015年度
内地研究員	0名	2名
外国人研究員	1名	1名
大学院人文社会系研究科研究員	0名	2名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「PFC コーパスに基づくフランス語リエゾンの地域変種間の差異について」
- 「動詞「刺す」の意味記述～三つの格パターンの使い分け～」
- 「ベトナム語母語話者における漢語由来語彙に対する意識の特徴」
- 「言語使用における知識のモデル化—情報ネットワークの提案と構築」
- 「日本語の談話における「アレ」の用法に関する考察」

2015年度

- 「文脈指示の「このXは」「そのXが」の談話的機能」
- 「日本語オノマトペの使用傾向」
- 「北海道方言の自発形式「サル」が相対動詞に付いたときに起こる自他の交代について」
- 「英語における不定冠詞のいわゆる「総称用法」について」
- 「北海道方言の接辞-rasarの意味分析—認知文法の視点から—」
- 「Old Irish のクレフト文における鼻音化関係活用について」
- 「ヒッタイト語の使役接辞-mu-の機能と通時的変化」
- 「ドイツ語の完了助動詞選択の基準」
- 「日本語のツイートにおけるフィルター」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- 後藤智明「現代標準アラビア語法動詞における行為者主語と動名詞・補文節主語」(指導教員) 小林正人
- 橋本摩子「duoc/bi を含むベトナム語の諸構文間の関係」(指導教員) 西村義樹
- PIJANOWSKA MARTA「ポーランド語のコピュラ文」(指導教員) 西村義樹
- 崔允正「受身と韓国語」(指導教員) 小林正人
- BOLOTAKUNOVA NURZAT「現代キルギス語における指示詞—Aldagı は指示詞か—」(指導教員) 林徹

2015年度

- 青山和輝「トルコ語の周辺のヴォイス現象」(指導教員) 林徹
- 松倉昂平「福井平野周辺諸方言のアクセント研究」(指導教員) 小林正人

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

- 新永悠人「A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language (北琉球奄美湯湾方言の総合的文法記述)」
(主査) 西村義樹 (副査) 小林正人・上野善道・下地理則・ホイットマン ジョン
- 山下里香「関東首都圏における在日パキスタン人バイリンガル児童の多言語使用: コードスイッチングとスタイルシフトをめぐる」
(主査) 林徹 (副査) 西村義樹・小林正人・生越直樹・木村護郎 クリストフ

(乙)

なし

2015年度

(甲)

- 早田清冷「古典満洲語属格標識-iの研究」
(主査) 林徹 (副査) 西村義樹・小林正人・田窪行則・久保智之

平田秀「三重県尾鷲市尾鷲方言のアクセント研究」

〈主査〉小林正人 〈副査〉林徹・西村義樹・上野善道・松森晶子

ROSA MARK「Native Writing Systems in the Okinawan Islands 沖縄諸島の土着書記体系の研究」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉林徹・西村義樹・小林正人・上野善道

濱田武志「粵語・桂南平話の共通祖語と系統関係」

〈主査〉小林正人 〈副査〉西村義樹・林徹・大西克也・木村英樹

(乙)

なし

02 考古学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

東大考古学研究室は、伝統的に東アジアの中の日本という視点を重視してきた。同時に、研究科内の常呂実習施設や韓国朝鮮文化研究室、あるいは学内の総合研究博物館、新領域創成科学研究科、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、朝鮮半島、北アジア、西アジア等の考古学分野ないし生態系史や年代測定学等の関連分野の教員と協力して、幅広く教育研究活動を展開している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

50年以上にも及ぶ北海道における調査では、常呂実習施設との共同調査として大島2遺跡の調査を09年よりおこなっている。

大貫を代表として07年度より開始した科研費課題である東京大学とロシア・ハバロフスク郷土博物館との国際共同調査では、15年度にハルピチャン遺跡の調査をした。また、同じ研究課題でのサハリン国立大学との国際共同調査では14年度にアド・ティモボ遺跡群、15年度にゴルノザボーツク2遺跡の調査をした。

佐藤を代表として09年度より開始した更新世黒曜石の流通と消費を課題とする科研費研究では、黒曜石の産地分析法の確立と分析の実施、および集成等を行い、15年度末に最終報告書を2冊刊行した。

設楽を代表として13年度より開始したレプリカ法による土器圧痕調査を踏まえた先史時代の植物利用の研究では、長野県内の遺跡をはじめとする国内数遺跡の調査をおこない、今年度終了した。また、11年度より開始した総合研究博物館所蔵の大洞貝塚出土遺物の整理作業を14・15年度と行った。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

『東京大学考古学研究室紀要』は、14年度に29号、15年度は30号と順調に刊行された。すべて下記の研究室HP上にて公開している。

研究室のホームページのURLは<http://www.lu-tokyo.ac.jp/archaeology/>

(4) 国際交流の状況

本考古学研究室とロシア・ハバロフスク郷土博物館、同国立極東大学博物館、同サハリン総合大学博物館との間に結んでいる研究交流協定に基づき、科研費課題を遂行した。13年度に引き続き14年度も学振二国間共同研究課題にもとづき、ロシア・サハリン国立大学との共同研究を実施した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

大貫静夫 東北アジア考古学 (現在に至る)

佐藤宏之 旧石器考古学・民族考古学 (現在に至る)

設楽博己 縄文・弥生時代考古学 (現在に至る)

(2) 外国人研究員・内地研究員

2014年度

外国人研究員 ナタリア・ツェデノヴァ (ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所研究員)

2015年度

外国人研究員 ナタリア・ツェデノヴァ (同上)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「鉛同位体比産地推定法の問題について」

「東洋陶磁の流通から見る沈船資料の意義」

「北メソポタミア土器新石器時代の繊維利用—テル・サラサート、セクル・アル・アヘイマルを中心に—」

「アンデス形成期神殿における儀礼行為の実践」

「定形勾玉成立からみる弥生時代の北部九州」
「出土遺物から見た喫煙行為と道具の変遷—加賀藩邸を中心に—」
「五島列島における先史時代遺跡の変遷」
「茨城県中妻貝塚の再検討」

2015年度

「虎口及び堀から考察する中世末期の北部九州の城郭」
「印西市西根遺跡における縄文土器の集中出土について」
「北島遺跡における集落構成の変遷」
「縄文時代中期末～後期の東京湾周辺における土杭内貝層の研究」
「甕棺の穿孔について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

久我谷溪太「弥生時代九州北部地域における海村成立史の研究」〈指導教員〉大貫静夫
弦本美菜子「近世初期日本における輸入陶磁器の流通」〈指導教員〉堀内秀樹

2015年度

山下優介「近江地域における弥生時代後期の集団関係」〈指導教員〉設楽博己
湯澤丈「江戸藩邸における儀礼道具の考古学的研究」〈指導教員〉堀内秀樹

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

石川岳彦「春秋戦国時代の燕国と遼寧地域に関する考古学的研究」
〈主査〉設楽博己 〈副査〉大貫静夫・早乙女雅博・宮本一夫・小林青樹
富樫孝志「後期旧石器時代における石器群の構造変動と居住行動に関する研究」
〈主査〉佐藤宏之 〈副査〉大貫静夫・設楽博己・西秋良宏・長崎潤一
夏木大吾「北海道北見市吉井沢遺跡の形成過程と空間的組織に関する考古学的研究」
〈主査〉佐藤宏之 〈副査〉大貫静夫・設楽博己・西秋良宏・長崎潤一

(乙)

なし

2015年度

(甲)

鈴木舞「殷代青銅器の生産体制」
〈主査〉大貫静夫 〈副査〉設楽博己・早乙女雅博・西江清高・飯島武次
古澤義久「東北アジア先史文化動態研究」
〈主査〉大貫静夫 〈副査〉設楽博己・早乙女雅博・宮本一夫・中村大介

(乙)

なし

03 美術史学

1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

現在の教員は、教授2名、准教授1名である（2008年3月までは助教1名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言ひ難い。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員3名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センター先端構想部門（2005年3月まで文化交流研究施設基礎理論部門）の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も教授2名、准教授1名が美術史学会の常任委員を務め、学会活動を主導した。2015年3月、2016年3月には美術史学会東支部例会を担当した。このほか1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に32号（2016年）に至っている。教育活動として毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流も盛んである。2016年3月の時点で、外国人留学生の博士課程在籍者1名、修士課程在籍者2名、外国人大学院研究生1名がいた。2014年9月22日には台北市台湾大学文学員において「宮廷と美術」に関する研究集会（東大教授與台灣藝術史相關領域學者座談會）を開催し、研究室からは協力教員を含めて4名が参加した。また、ラリア・アンドレオーリ博士（ヴィツァ・イ・タッティ研究所、ルネサンスの版本挿絵）、フランソワ・ドゥピュイグルネ・デルシーユ教授（フロリダ州立大学、書物史・書誌学）、ミヤ・モチヅキ博士（ニューヨーク大学アブダビ校、オランダ美術史、日欧交流美術史）、ジュリアン・ガードナー教授（英国ウォーウィック大学、イタリア中近世美術史）、ズザンナ・ファン・ロイヴェン博士（オランダ、カレル・ファン・マンデル賞受賞者、ステンドグラス研究）等によるセミナーを研究室で開催し、研究交流を深めるとともに、学生諸君に欧米語で議論しつつ学ぶとともに、将来の研究ネットワークを形成する場を提供した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤康宏教授（日本美術史）
秋山聰教授（西洋美術史）
高岸輝准教授（日本美術史）

(2) 助教の活動

当該期間は助教不在のため特記事項なし。

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「ニコラ・プッサンの風景画における自然」
「雪舟の作品について」

「黒田清輝の構想画と近代日本美術—「昔語り」と「智・感・情」を中心に」
「海北友松の画風について「人物花鳥押絵貼屏風」を中心に」
「(伝) 徽宗「溪山秋色図」(台北国立故宫博物院)の史的位罫」
「中村宏《円環列車・A—望遠鏡列車》,《円環列車・B—飛行する蒸気機関車》についての考察」
「ハンガリー刺繍におけるオスマン文化の影響」
「尾形乾山作「鏤絵染付金彩芒文蓋物」について—器形と芒文の展開—」
「ディエゴ・ベラスケス作《パブロ・デ・バリャドリード Pablo de Valladolid》における一考察」

2015年度

「岩佐又兵衛と「豊国祭礼図屏風」について」
「フェリックス・ゴンザレス・トレスの様式の再解釈」
「松岡映丘についての再考察」
「ゴッホの自殺に関する考察—ゴッホの絵画にみる精神性を手がかりにして—」
「ヒエロニムス・ボス諸作品におけるフクロウの解釈について」
「『画図百鬼夜行』を中心として見る妖怪画の変容—ぬらりひょんを中心に—」
「應舉山水画に描かれた景とその模写に関する一考察—圓山應舉筆大乘寺障壁画「山水図」を手がかりにして—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

請田義人「エドゥアール＝ジョセフ・ダンタン作《ライフキャスティング》について—「芸術家のアトリエ」における型取りのメチエと創造性」(指導教員) 秋山聰
菊地かの子「狩野山楽山水画考—正伝寺方丈障壁画を中心に—」(指導教員) 佐藤康宏
朴晟希「18世紀後半～19世紀前半における日韓絵画関係の変化に関する研究—1811年朝鮮通信使の絵画活動を中心に」(指導教員) 佐藤康宏

2015年度

神津有希「エドガー・ドガのモノタイプ研究—制作と役割に関する考察—」(指導教員) 秋山聰
湯浅茉衣「ドラクロワ初期作品研究—1824年作《キオス島の虐殺》を中心に」(指導教員) 秋山聰
塩田积雄「前田青邨筆「御輿振」考—明治後期から大正期における絵巻復興について—」(指導教員) 佐藤康宏
近藤萌絵「エドゥアール・ヴューヤール作《再洗礼派たち》について」(指導教員) 秋山聰

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

佐藤有希子「毘沙門天像の成立と展開—唐・宋から平安へ—」
(主査) 高岸輝 (副査) 佐藤康宏・板倉聖哲・浅井和春・肥田路美

(乙)

なし

2015年度

(甲)

邱函妮 Chiu Han Ni「「故郷」の表象—日本統治期における台湾美術の研究—」
(主査) 佐藤康宏 (副査) 高岸輝・板倉聖哲・三浦篤・後小路雅弘

(乙)

なし

04 哲学

1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木巖翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年からは、思想文化学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的な研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2016年3月現在の所属教員は、教授2名、准教授1名、外国人専任講師1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理哲学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリアマウント・コレッジの Roger Robins 教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から毎年進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心をもたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにおいて重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披露と研さんの場として機能している。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書もすでに刊行している。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2016年3月末までに、計10回の BESETO 哲学会議が開催された。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

一ノ瀬正樹	(教授、因果性の哲学・人格概念の研究)
榑原哲也	(教授、現象学・ドイツ現代哲学)
鈴木泉	(准教授、近世形而上学・現代フランス哲学)
Richard Dietz	(専任講師、現代英米哲学・言語哲学)

(2) 助教の活動

松浦 和也

在職期間 2012年度～2014年度

研究領域 古代ギリシア哲学研究

主要業績

(他機関での講義等) 特別講演、(株)シーワン、「快樂主義と禁欲主義をめぐる哲学」、2014.4

(学会) 国内、哲学会、委員、2014.4～

野村 智清

在職期間 2015年度～

研究領域 アイルランド哲学とパークリ

主要業績

(学会発表) 「大陸合理論とイギリス経験論—アノマリーとしてのアイルランド哲学」、「哲学史のドクサを問う—〈合理論と経験論〉の再検討—」連続研究会第5回、2015.12.12

(3) 外国人教員の活動

ディーツ リチャード Richard Dietz (専任講師)

在職期間 2011年度10月から

研究領域 Philosophy of Language, Epistemology, Philosophical Logic

主要業績

(学会発表) 「The myth of radical higher-order vagueness」、嶺南大学、2015.1.20

「Vagueness as tolerance reconsidered」、香港大学、2015.1.22

「Disagreement and aboutness」、Pluralisms Global Research Network Workshop 5、延世大学校、2015.3.22

「Evidential support and aboutness」、Joint Session of the Aristotelian Society and Mind Association, University of Warwick、イギリス、2015.6.14

「Vagueness'—two decades after」、Williamson, Logic and Philosophy conference、北京大学、2015.10.17

(他機関での講義等) Phileth seminar、北海道大学、「The possibility of vagueness」、2014.5.26

Philosophical Summer Academy、ミュンヘン大学、「Vagueness」、2014.8.25-29

Tuesday Research Seminar、ワルシャワ大学、「Menu-dependent distinctions, vagueness, and tolerance, part I,II」2014.12.12

集中講義、北海道大学、「The philosophy of rationality」2015.9.14-18

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「ハンナ・アーレントにおける「悪の陳腐さ」に係る考察」

「『哲学探究』における「意味の使用説」と哲学の方法」

「デカルトの方法的懐疑に関する研究」

「所有と他性」

「レヴィナス『全体性と無限』における言語の問題」

「ラッセルにおける「論理的原子」について」

「ピーター・シンガーの動物解放論」

「言語行為論と慣習について」

「ルチアーノ・フロリディの情報倫理」

「正戦論—「会話としての正義」の視点から—」

「中期J・S・ミルの幸福概念の変化に関する考察」

「カント『純粹理性批判』における超越論的演繹論について」

「プラトン『パイドン』における死について」

「傾向性の定言的基底への還元可能性について」

「R.M.ヘアの二層理論」

「J.S.ミル『自由論』について」

「固有機能の概念に基づく言語の意味理解について」
「ハイデガーの技術論について—立てること (stellen)と立ち方 (stand)の存在論—」
「ピーター・シンガーのパーソン論」
「ドゥッンス・スコトゥスにおける個体化の原理について」
「ベルクソン『試論』における空間概念について」
「ハイデガーの技術論」

2015年度

「『いま』の構造」に関する考察—現代日本における「いま」に関して—」
「『自由論』の思想的背景と寛容性について」
「初期思想から見たニーチェの遠近法思想について」
「ミルトン・フリードマンから導出される企業倫理」
「Thomas Nagel の心の一般概念と主観性・客観性の問題」
「ヒュームの正義論におけるコンベンションについて」
「カント『純粹理性批判』における超越論的演繹の研究」
「『資本論』価値形態論の研究」
「デカルト〈コギト〉研究」
「信念の対立と克服について」
「レーヴィットの共同相互存在論について」
「フレーゲ哲学における文脈原理について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

阿部皓介「ライブニッツにおける幾何学的記号法の研究」〈指導教員〉鈴木泉
池田仁「フッサール現象学における故郷世界と異郷世界に関する研究」〈指導教員〉榊原哲也
熊谷聡「概念相対主義を擁護する」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
青崎美穂子「フッサール現象学を用いた「語り」の分析」〈指導教員〉榊原哲也
笠松和也「スピノザ『エチカ』における感情論の研究」〈指導教員〉鈴木泉
菊池翔士「ミル主義の擁護と語の形而上学」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
高崎将平「他行為可能性と決定論の両立性—能力概念の分析に定位して—」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
深貝菜緒子「レヴィナス『全体性と無限』における「享受」論の研究」〈指導教員〉鈴木泉

2015年度

谷田雄毅「ことばの顔つきとしての意味—『哲学探究』第Ⅱ部の諸ゲームが投げかけるもの—」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
野上志学「様相の唯名論的理論」〈指導教員〉一ノ瀬正樹
吉田佑介「様相の Truthmaker と可能的対象について」〈指導教員〉一ノ瀬正樹

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

長田怜「初期カルナップの实在論と反实在論」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・飯田隆・加地大介
瀧将之「ハイデガー哲学における真理と秘匿性」
〈主査〉榊原哲也 〈副査〉一ノ瀬正樹・鈴木泉・古荘真敬・高山守
宮園健吾「Delusions as Malfunctioning Beliefs A Biological Defense of Doxasticism about Delusion (信念の機能不全としての妄想 生物学的な観点から妄想の信念主義を擁護する)」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・オデイ ジョン ウィリアム・ディーツ リチャード

(乙)

なし

2015年度

(甲)

松浦和也「アリストテレスの時空論—『自然学』第3巻第4巻の構造と存在論的前提—」
〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・納富信留・渡邊邦夫

富山豊「フッサール初期・中期志向性理論における意味と対象」

〈主査〉 榊原哲也 〈副査〉 一ノ瀬正樹・鈴木泉・古荘真敬・田口茂

(乙)

なし

05 倫理学

1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道徳意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授3名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度3名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2014年度9名、2015年度7名）。学科全体としてみれば、学生、院生あわせて30名ほどの学科だが、学生、院生の研究テーマも、古代ギリシア哲学や古代ユダヤ教からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学や倫理学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年一回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、在籍中の大学院生やオーバドクターの研究成果を発表する場ともなっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 関根 清三

専門分野 西洋倫理思想史・旧約聖書学

在職期間 1994年6月－2016年3月

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

教授 頼住 光子

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

助教 岡田 大助

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

(2) 助教の活動

岡田 大助

在職期間 2013年4月－現在

研究領域 日本仏教倫理思想史

主要業績

(論文)

岡田大助、「親鸞の思想における阿闍世の煩惱、苦悩とそこからの救済（一）」、『倫理学紀要』、第22輯、192～214頁、2015.3

岡田大助、「親鸞の思想における阿闍世の煩惱、苦悩とそこからの救済（二）」、『倫理学紀要』、第23輯、134～156頁、2016.3

(他機関での講義等)

非常勤講師、東京理科大学、「倫理、世界の宗教」、2014.4～2016.3

非常勤講師（集中講義）、弘前大学、「日本仏教倫理思想史」、2014.8

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「V・フランクルにおける極限状況での生きる意味の解明」
- 「萩生徂徠『政談』における政治理念と聖人信仰の在処」
- 「J・S・ミルの功利主義についての一試論—功利と対立する諸観念に注目して—」
- 「伊藤仁斎における「実」について」
- 「鴨長明『方丈記』に見られる現世の「すみか」観」
- 「『聖教要録』『山鹿語類』における土道論」
- 「玉くしげにおける道についての考察—神の道と人の道とは—」
- 「源信の往生要集における無相業について」
- 「『道徳と宗教の二源泉』における自己」
- 「ベルクソン『試論』における自由について」
- 「道元と時間論」
- 「『日本靈異記』における仏像について」
- 「『往生要集』における廻向について」
- 「『往生要集』に見る源信の臨終観」

2015年度

- 「柳田國男の風景・旅の思想」
- 「ヤスパーズ哲学における実存と超越者」
- 「親鸞における「信」の問題について」
- 「日蓮『開目抄』における正しさへの態度」
- 「荷田在満『国家八論』について」
- 「『教行信証』に見る親鸞の易行思想とその背景」
- 「長阿含經の基本構造の解明」
- 「心戒と長明に注目して『発心集』を読み解く—第七卷一二話を手掛かりに—」
- 「鴨長明『発心集』における和歌について」
- 「『兵法家伝書』における「平常心」の内容とその普遍性」
- 「『心中天の網島』における治兵衛にとってのおさんと小春について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- 藤井智「プラトンの想起説—知の獲得と哲学的生のすすめ—」(指導教員) 関根清三
- 大澤真生「人間存在の二重の他者性—和辻の思考にそくして—」(指導教員) 熊野純彦
- 真田乃輔「エルンスト・カッシーラーの超越論的論理学—その歴史的手法と体系的動機—」(指導教員) 熊野純彦
- 高井寛「ハイデガー『存在と時間』における問いの経験」(指導教員) 熊野純彦

2015年度

- 長野邦彦「『古事記』における「清明」について——スサノヲ神話をめぐって——」(指導教員) 頼住光子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲) (乙)

なし

2015年度

(甲)

- 木澤景「総合の行としての念仏—『往生要集』の思想」
(主査) 頼住光子 (副査) 熊野純彦・下田正弘・箕輪頭量・菅野覚明

(乙)

なし

06 宗教学宗教学史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程（宗教学研究室）における研究は宗教の経験科学的研究である。2014～15年度の研究活動は、教授3、准教授2、計5名の教員を中心として行われた。研究分野は、宗教理論（宗教概念批判、宗教学史）、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史（中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエン特、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）、発掘調査（イスラエル）、などをカバーしている。方法論は、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学、比較宗教学などである（詳しくは、教授・准教授については本書Ⅲ部を参照のこと）。宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学・応用倫理センター（死生学グローバルCOE拠点の継承）との活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・書評・サーヴェイ論文・研究ノートが掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会（本専修課程創設時の主任教授、姉崎正治教授の雅号により嘲風会と称する）誌的な性格をもち、同窓生や留学生の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。2015年度には、他大学で非常勤講師を務める院生・ポスドクを対象に、独自に宗教学のFD会を開催したり、研究助成への申請ワークショップを実施したりするなど、研究指導のみならず教育指導や研究環境のサポートも行っている。

本専修課程の最近の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（2014年度14名＋学士入学者1名、2015年度14名）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事は、増加する学部生や、他大学からの大学院新入生が研究室に馴染むための、かつ教員が各学生の人柄や興味関心を把握するための場として、一層意義を増している。また、この旅行では東京近隣の宗教施設を複数見学するが、その企画は博士課程1年次の院生全員が担当する。このため文献研究を専門とする院生にもフィールドワークの現地経験のよい機会となっている。

国際交流としては、2015年9月にドイツ・エアフルト市で開催された国際宗教学会（International Association for the History of Religions）世界大会において、本研究室からは4名の教授・准教授、3名の博士課程在籍中の院生が発表した。教授・准教授の発表は、自らオーガナイズした、外国人研究者を加えたパネルや、外国人研究者によってオーガナイズされたパネルにおいて行われた。

2016年2月には、韓国・済州大学校で開催された東アジア宗教研究フォーラムに、運営委員を務める西村他数名が参加・発表した。

研究室として招聘し、講演を実施した主な外国人研究者は以下の通りである。

- 2014年4月 クリプト・ユダヤ教研究 Dr. Seth Kunin（アバーディーン大学、イギリス）
- 2014年10月 近代ユダヤ思想研究 Dr. Jonathan Meir（ベングリオン大学、イスラエル）
- 2015年3月 イスラム法学・比較憲法研究 Dr. Clark Lombardi（ワシントン大学、アメリカ）
- 2015年3月 中世カトリック教会法研究 Dr. Greta Austin（ピュージェットサウンド大学、アメリカ）
- 2015年6月 アフリカ宗教学史研究 Dr. Jacob Olupona（ハーヴァード大学、アメリカ）
- 2015年9月 近代ユダヤ思想研究 Dr. Jonathan Meir（ベングリオン大学、イスラエル）
- 2016年1月 カイロ・ゲニザ文書研究 Dr. Amir Ashur（テルアヴィヴ大学、イスラエル）
- 2016年1月 キリスト教カバラ研究 Dr. Peter Forshaw（アムステルダム大学、オランダ）

付け加えれば、学生の短期留学や夏季休暇を利用しての発掘調査への参加も毎年行われており、2014年度には英語で卒論を提出する学生も現れるなど、学部レベルの学生の国際化も目立ってきている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 鶴岡 賀雄 : 西洋神秘思想、近現代宗教思想 (1998年4月～)
市川 裕 : 一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語 (1991年4月～)
池澤 優 : 中国宗教研究、祖先崇拜、生命倫理 (1995年4月～)
藤原 聖子 : 宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教 (2011年4月～)
西村 明 : 宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化 (2013年4月～)

(2) 外国人研究員・内地研究員

- Meir, Jonathan
Guiseppe, Marino
Montrose, Victoria
Berman, Michael
Macaraan, Willard
鈴木 卓

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「再演される戯曲の宗教性—ソーントン・ワイルダー『わが町』を例に—」
「宗教学的模倣論の可能性」
「CORPUS DIONYSIACUM—「輝く闇」の存在論的及び認識論的構造—」
「Architecture and Space Making in Global New Religious Movements / グローバル新宗教における建築と空間創造」
「日本人の山岳観の歴史の変容と今後の展望」
「日本人の死生観とその宗教性—岸本英夫『死を見つめる心』を例に—」
「ネオペイガニズムの大衆文化におけるあらわれ」
「『正法眼蔵』の近代化についての—視座—「教典」を分析概念として—」
「欧米と日本の「無宗教」の比較」
「人形供養の現代的意義」
「セクシュアルマイノリティのメンタルヘルスにおける問題—キリスト教と世俗化という観点から—」
「中世神国思想における日本的国土観」
「20世紀半ばから現代までの米国におけるユダヤ人の異宗婚をめぐる世論の変化とその要因」
「「国家神道」は如何なるものだったのか」
「H.P.ラヴクラフトにおける「神話」概念と構造」

2015年度

- 「石井十次の「茶臼原農村」とそのコミュニケーション性」
「ショーペンハウアーとメスマリズム」
「聖地巡礼ツーリズム—動機的側面からの考察—」
「20世紀の東方正教会神学における新教父学の展開—フロロフスキー、ロースキー、メイエンドルフの神学理論比較—」
「立正佼成会の政治活動」
「東日本大震災での宗教者によるボランティアの美談」
「『生き方』における稲森和夫の仏教観」
「米国におけるイスラーム護教論の課題と展望」
「『ゴズミックウォー』の再検討—ジョン・ブラウンの事例を元に—」
「戦後日本の「仏教消費」について」
「近現代日本における女性の性役割観・家族観の変容と天理教の対応—『みちのとも』を手掛かりとして—」
「日本の新宗教団体の存続状況と解散した教団にみられる特徴」
「神隠しに見られる信仰・思想」
「神道マンガにみる神々とその特徴」

「ブログ上で死別を語る遺族たち—電子メディアにおける死別悲嘆の「語り」とその検討—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

田川裕貴「若者の宗教意識調査研究の諸問題」〈指導教員〉藤原聖子

小藤朋保「ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ研究—『ヘプタプルス』と『存在と一について』—」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

金大榮「自死（自殺）問題に対する宗教の活動—自死・自殺に向き合う僧侶の会を中心に—」〈指導教員〉池澤優

長迫智子「ドイツ民族主義宗教運動における神秘主義的諸要素に関する一考察」〈指導教員〉鶴岡賀雄

馬場真理子「古代日本における「天」の思想」〈指導教員〉池澤優

2015年度

寺田光之「近代日本のリアリティー—井上哲次郎の「実在」の思想から見る—」〈指導教員〉池澤優

飯田陽子「アメリカ禁酒運動における女性参加と宗教性の問題—研究状況と展望—」〈指導教員〉藤原聖子

中村芳雅「ロマン主義の展開と宗教概念の変容—浪漫主義文学が構築する価値体系の変容—」〈指導教員〉西村明

李美奈「近代初期イタリアのヴェネツィア・ゲットーを取り巻くキリスト教社会とユダヤ社会の関係についての

研究—市民に求められた2つの徳性とユダヤ社会の民—」〈指導教員〉市川裕

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

中山勉「ロジャー・ウィリアムズ研究—政教分離論の虚実と代表的著作に見られる神学思想—」

〈主査〉藤原聖子 〈副査〉鶴岡賀雄・市川裕・森本あんり・久保田浩

渡辺優「ジャン＝ジョゼフ・スュラン研究—17世紀フランス神秘主義における体験と信仰—」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉市川裕・宮本久雄・島藺進・杉村靖彦

榎本香織「電子メディアを巡る宗教的想像力とその実践—《聖性》の拡張による社会参画の観点から—」

〈主査〉西村明 〈副査〉藤原聖子・島藺進・石井研士・黒崎浩行

宮田義矢「教義の中の近代—道院・世界紅卍字会の教義形成の研究—」

〈主査〉池澤優 〈副査〉西村明・横手裕・武内房司・山田賢

MUSULIN ILJA「近年の北米心理学理論における死と宗教—宗教学・死生学の立場から—」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉池澤優・藤原聖子・堀江宗正・井上順孝

(乙)

なし

2015年度

(甲)

丸山空大「生と啓示—フランツ・ローゼンツヴァイクの前期思想の展開—」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉市川裕・村岡晋一・深澤英隆・久保田浩

(乙)

なし

07 美学芸術学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方での日本の学会における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、外国人研究生をコンスタントに受け入れている。

本研究室では現在 JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要 (1976 年創刊) と『美学芸術学研究』(1982 年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995 年改題) と題された和文の紀要の 2 つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、美学会東部会等との共催で、パウル・ツイッヒェ (ユトレヒト大学教授)、ジェラルド・チップリアーニ (アイルランド国立大学教授)、オウ・チョンウァン (ソウル大学教授)、ニック・ザングウィル (ダラム大学教授)、ジェフリ・バラシュ (カルディー・ジュール・ベルヌ大学教授) といった著名研究者を迎え講演会を開催するなど、海外との学術交流に努めている。なお、本研究室では美学会の本部事務局 (2013 年 10 月～) を担当しており、名実ともに日本における芸術研究の拠点としての役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2008 年に着任した安西信一准教授 (2008 年着任。庭園美学、環境美学) が 2014 年 2 月に急逝したため、2014 年度は、残された渡辺裕教授 (在籍は 1996 年～。聴覚文化論、音楽社会史)、小田部胤久教授 (在籍は 1996 年～。近代美学、感性文化論) の 2 名で研究室のすべての運営を行うことを強いられた。幸いなことに、2015 年 4 月より、三浦俊彦教授 (分析哲学、分析美学) に加わってもらうことができるようになり、現在は 3 名の体制によって、少しでもバランスのとれた教育活動を展開できるよう心がけている。

(2) 助教の活動

橋爪 恵子

在職期間 2013 年 4 月 1 日～2016 年 3 月

研究領域 フランス美学

主要業績

論文

「ガストン・バシュラールの物質的想像力——身体経験に着目して——」、日本シェリング協会編『シェリング年報』、22 号、2014 年、14-24 頁

「ガストン・バシュラールの物質的想像力——イヴ・クライン《空虚 (le Vide)》展を手がかりに——」、東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』、33 号、2016 年 3 月

(3) 外国人研究員・内地研究員

吳丁煥（2014年9月1日～2015年8月30日）

伊東多佳子（富山大学准教授、2015年4月1日～2016年3月31日）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「『判断力批判』における判断力の構造論—悟性、理性はいかに架橋されるか—」
- 「リメイク映画論—『南極物語』の事例を通して」
- 「『ウルトラマン』の世界観における正義—原作者金城哲夫のヒーロー観を中心に—」
- 「ウェス・アンダーソン映画における虚構性について」
- 「AKB48における「ミュージッキング」について」
- 「西脇順三郎の詩論におけるボードレールの位置」
- 「フッサール現象学に基づいた芸術鑑賞論—想像力論を中心に—」
- 「舞台作品としてのコントの可能性—ラーメンズを中心に—」
- 「川の都市景観と文化の醸成との関連—隅田川と向島を中心に—」
- 「〈睡蓮〉大装飾画の受容史と「環境」観の変容—オランジュリー美術館と地中美術館の比較を中心に—」
- 「『パルプ・フィクション』における物語の時間構造と語りの規範」
- 「休息のための機械—ル・コルビュジェの椅子における機械と身体の関係—」
- 「「一発ギャグ」についての考察—お笑い表現の歴史的文脈に即して」
- 「文芸家夏目漱石が求めた「理想」について—「文芸の哲学的基礎」を踏まえた『草枕』分析を中心に—」
- 「日本におけるアウトサイダー・アート受容の現状と今後の展開の可能性—1990年代以降の展示を巡って」
- 「柳宗悦における民藝と茶道の関係について」
- 「西ヶ原邸から旧古河庭園へ」
- 「戦後日本のゲイカルチャー創生期における男性裸体写真」

2015年度

- 「ベートーヴェンと「ベートーヴェン時代のドイツ人」—ベートーヴェンと1770年から1870年までのドイツ圏のナショナル・アイデンティティー」
- 「ロラン・バルト『明るい部屋』のプンクトゥムについて」
- 「『HANA-BI』に見るキタノ映画の視覚的文体」
- 「濱口竜介論—カメラ目線の映画—」
- 「ベンヤミンにおける「政治の審美化」—「技術的複製可能性の時代の芸術作品」におけるマリネッティ解釈」
- 「ミュージック・ビデオ演出における「映像」と「音楽」の表現」
- 「躰道における「芸術性」について」
- 「映画監督北野武の死生観—「ソナチネ」を中心に—」
- 「AKB48と恋愛禁止条例—介入しあう楽曲と現場」
- 「「聖地」としてのゲームセンター」
- 「ヴァーグナーの音楽論におけるショーペンハウアーとの「対立」—『ベートーヴェン論』を中心に—」
- 「人はなぜ機械的リズムにひきつけられるのか—情報社会に生きる聴衆のリズム論—」
- 「イマーシブ・シアターにおける観客の身体性の重視とその意義」
- 「EDM批判に対する考察—歴史的観点から—」
- 「アートと猥褻性—視覚芸術の例を中心に—」
- 「ユニクロ成長期におけるファッション観の変化について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

劉佳「王国維の思想形成におけるショーペンハウアーの影響の意義」（指導教員）小田部胤久

山口沙絵子「F・シュレーゲルにおける伝達と知性」（指導教員）小田部胤久

2015年度

鈴木亘「ジャック・ランシエールの美学—2000年代の著作における芸術の意義」（指導教員）小田部胤久

李裁仁「土方巽の暗黒舞踏における「東北」—パースの記号論に即して—」〈指導教員〉小田部胤久

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

柳沢史明「『ニグロ芸術』の形成及びその変容——二十世紀フランス文化圏を中心とした思想文化史的観点からの考察」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉渡辺裕・吉田憲司・千葉文夫・西村清和

(乙)

なし

2015年度

(甲)

森功次「前期サルトルの芸術哲学——想像力・独自性・道徳」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉渡辺裕・澤田直・西村清和・谷口佳津宏

(乙)

なし

08 心理学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授4名、准教授1名、助教1名、日本学術振興会のPD・研究員・研究生・大学院生・学部生ら約70名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・思考などの心理現象を心理物理学的手法・脳科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。また、文化認識や科学方法論などについても研究を行っている。毎年、教養学部文科3類や他の科類の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトや実験動物を被検体として実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果を取りまとめている。

大学院教育に関しては、指導体制の充実を図り、数名の課程博士（博士（心理学））が毎年誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本視覚学会・日本認知科学会・日本神経回路学会・日本認知心理学会・認知神経科学会・日本動物心理学会・日本生理学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第になくなっていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 隆夫

専門分野 知覚心理学

在職期間 1995年5月～ 大学院人文社会系研究科助教授

1996年12月～2016年3月 同 教授

高野 陽太郎

専門分野 認知心理学

在職期間 1990年4月～ 文学部助教授

2003年4月～2016年3月 大学院人文社会系研究科教授

立花 政夫

専門分野 生理心理学

在職期間 1988年10月～ 文学部助教授

1994年1月～ 同 教授

1995年4月～2015年3月 大学院人文社会系研究科教授

横澤 一彦

専門分野 統合的認知の心理学

在職期間 1998年10月～ 大学院人文社会系研究科助教授
2006年4月～現在 同 教授

今水 寛

専門分野 運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

在職期間 2015年9月～現在 大学院人文社会系研究科教授

村上 郁也

専門分野 知覚心理学、認知神経科学

在職期間 2005年4月～ 大学院総合文化研究科 助教授
2013年4月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

(2) 助教の活動

新美 亮輔

専門分野 実験心理学

在職期間 2011年4月～2016年3月

主要業績

書籍

新美亮輔、上田彩子、横澤一彦、『オブジェクト認知 統合された表象と理解』、勁草書房、2016.2

論文

Yamashita, W., Niimi, R., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Yokosawa, K., 「Three-quarter view preference for three-dimensional objects in 8-month-old infants.」、『Journal of Vision』、Vol. 14, No. 4(5)、1-10 頁
2014.4

Niimi, R., & Watanabe, K., 「Do we know others' visual liking?」、『i-Perception』、Vol. 5, No. 7、572-584 頁、2014.11

Sastyn, G., Niimi, R., & Yokosawa, K., 「Does object view influence the scene consistency effect?」、『Attention, Perception, & Psychophysics』、Vol. 77, No. 3、856-866 頁、2015.4

Nonose, K., Niimi, R., & Yokosawa, K., 「On the three-quarter view advantage of familiar object recognition」、『Psychological Research』、online first、2015.9

新美亮輔、「東京帝国大学航空研究所航空心理部に見る日本の応用心理学の成立と拡大」、『心理学史・心理学論』、Vol. 16/17、1-23 頁、2016.2

学会発表

国際、Niimi, R., 「When a Mackintosh chair looks like a young woman: A study on visual object personification.」、10th Asia-Pacific Conference on Vision, Takamatsu、2014.7.21

国内、新美亮輔、「視覚による日常物体の擬人的認知」、日本心理学会第78回大会、京都、2014.9.10

国際、Niimi, R., Ehara, R., & Yokosawa, K., 「On the top-view disadvantage in visual object recognition」、Psychonomic Society Annual Meeting, Long Beach, CA、2014.11.23

国内、新美亮輔・江原玲・横澤一彦、「上から見た物体はなぜわかりにくい?」、日本基礎心理学会第33回大会、八王子、2014.12.6

国際、Niimi, R., 「Modest effect of perspective distortion on object recognition」、11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore、2014.7.10

国際、Niimi, R., 「How do we see hands? Attentional deployment when observing hand images」、Psychonomic Society Annual Meeting, Chicago, IL、2014.11.20

国内、正田真利恵・岩根透・新美亮輔、「像面位置と輻輳位置の一致が3Dディスプレイ観察時の眼精疲労に与える影響」、日本認知科学会第32回大会、千葉、2015.9.20

国内、新美亮輔・飯泉拓郎・横澤一彦、「高速連続視覚提示における情景文脈の抽出」、日本心理学会第79回大会、名古屋、2015.9.23

国内、新美亮輔、「人は手をどう見ているか：手の自由観察時における情景文脈の抽出」、日本基礎心理学会第34回大会、東大阪、2015.11.29

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014 年度

- 「動的陰影描写における立体形状知覚—光源の競合における知覚の変化の検討—」
- 「人物の鏡映反転における二種類の反転と視点変換の不安定性の検討」
- 「逆相関法によるキンギョ網膜神経節細胞の光応答解析」
- 「RSVP 系列で呈示されたオブジェクトの認識におけるシーン整合性効果の有無の検討」
- 「静止刺激と運動刺激を同時に見た場合の時間過大視」
- 「解釈レベルと表象対象に応じた利他的行動の変化—care 行動と fair 行動に着目して」
- 「日常における対人的・空間的・時間的距離と行為の認知—経験サンプリング法を用いた心理学的検討—」
- 「視覚の手がかりが力覚の弁別感度に与える影響」
- 「ジター錯視における運動印象の主観的持続時間」
- 「心理的な量刑基準の変動に関する実験的検討」
- 「文字の形態情報・音韻情報・意味情報が日本語の共感覚色に与える影響」
- 「顔と声の結びつけを規定する要因についての検討」
- 「外国語使用はメタ認知を歪めるか?—他者の評定推測の観点から—」
- 「なぜ人は政治的に左と右に分かれるのか—道徳基盤、ネガティビティ・バイアス、抑制機能に着目した心理学的検討—」
- 「眼球運動・頭部運動が色残像の持続時間に及ぼす影響—異なる座標系における身体運動情報の統一—」
- 「外国語副作用の大きさと英語テストとの相関」
- 「色彩嗜好の決定要因—色彩から連想される概念と、カテゴリ化の影響—」
- 「注意資源を奪う二重課題がベクションに及ぼす効果」
- 「社会所属集団の認識が犯罪者への応報的反応に与える影響についての検討」
- 「時間視における主観的持続時間の位置特異性」
- 「和音と色の間の感覚間協応の検討」

2015 年度

- 「事前信念の習得方法が人の因果関係判断に与える影響」
- 「刺激呈示位置の範囲が視覚的印付けに及ぼす影響」
- 「順応性時間短縮知覚における順応刺激とテスト刺激の空間特性」
- 「同実験パラダイムで注意的補足と視覚的印付けの効果を検証」
- 「運動印象の強度が主観的持続時間の伸長に与える影響」
- 「色残効における二次属性輪郭の枠効果」
- 「特徴への注意の有無と運動による時間過大視の関係」
- 「ランダムドットパターンの継時提示時の時間知覚変化」
- 「追跡眼球運動時の網膜上位相反転縞の運動方向知覚」
- 「盲点上の刺激が明るさ知覚に与える影響」
- 「鏡像認知の基準—何と比較して、左右反転・上下反転を認知するのか?—」
- 「写真色残効における座標系の効果」
- 「系列的な注意の移動が変化検出に及ぼす影響」
- 「外因性の聴覚的注意は視覚的記憶課題の成績を向上させるか」
- 「追跡眼球運動が見かけのコントラストに及ぼす効果」
- 「音声シーン整合性効果に及ぼす影響の検討」
- 「先行手がかりのカテゴリの違いによる復帰の抑制への影響」
- 「Context Collapse に対する気遣い・葛藤—性格特性との関連を踏まえて—」
- 「虚記憶とカテゴリ概念の活性化の個人差—自閉症スペクトラム傾向と公正世界信念との関連の検討—」
- 「2 次運動刺激に対する視野内・視野間仮現運動知覚」
- 「色残像における座標系の効果—眼球運動が陰性及び陽性残像の量的、質的強度に及ぼす影響の検討—」
- 「なぜ人は誰かのファンになるのか?—ファン心理の認知的基盤—」
- 「英語検定と外国語副作用」
- 「シングルトンへの注意捕捉が視覚的印付けに及ぼす影響」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

渡辺真澄「ぼけ勾配知覚の実験的検討」〈指導教員〉佐藤隆夫

李承玉「外国語副作用：言語情報処理と思考の干渉に関する実験的検討」〈指導教員〉高野陽太郎

熊倉恵梨香「多感覚特徴の共起による知覚学習の検討」〈指導教員〉横澤一彦

幡多彬史「ベクション生起に注意が与える影響について」〈指導教員〉佐藤隆夫

2015 年度

森山帆峰「視覚刺激の新規出現と輝度変化が注意の捕捉に及ぼす影響」〈指導教員〉村上郁也

川下翔平「奥行き手掛かりとしてのぼけの両義性」〈指導教員〉佐藤隆夫

森田磨里絵「曲線の知覚に関する実験的検討」〈指導教員〉佐藤隆夫

渡辺晃「外的情報の遮断による記憶表象の再体制化」〈指導教員〉高野陽太郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

高史明「在日コリアンに対するレイシズムの研究：現代的レイシズム理論に着目して」

〈主査〉立花政夫 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・北村英哉・杉森伸吉

金谷英俊「運動オブジェクト追跡に関与する視覚運動処理」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・横澤一彦・村上郁也・四本裕子

細川研知「身体運動を伴う手がかりからの奥行き知覚の研究」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・横澤一彦・村上郁也・四本裕子

雁木美衣「網膜の ON 型運動方向選択性細胞に関する研究」

〈主査〉立花政夫 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・岡良隆・高田昌彦

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

常岡充子「記憶と自律神経系反応の関係：新たな記憶検査開発に向けて」

〈主査〉高野陽太郎 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・村上郁也・大平英樹

正田真利恵「歩行運動と視覚的注意の関係に関する実験心理学的研究」

〈主査〉横澤一彦 〈副査〉佐藤隆夫・高野陽太郎・村上郁也・東郷史治

佐藤弘美「視覚情報処理における輝度極性の意義」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉横澤一彦・今水寛・村上郁也・本吉勇

中山遼平「視覚運動情報の顕著性における座標系の役割」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉横澤一彦・今水寛・村上郁也・本吉勇

林大輔「方位刺激のコントラスト検出に関する心理物理学的検討」

〈主査〉村上郁也 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・今水寛・本吉勇

(乙)

なし

09a 日本語日本文学（国語学）

1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続いていたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げることになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2014年度は、大学院生として5名の外国人留学生在が本専修課程に在籍し、また、海外の日本語研究者が3名、大学院外国人研究生として本研究室に在籍し、研究に従事している。2015年度は、大学院生として3名の外国人留学生在が本専修課程に在籍し、また、海外より6名、3名は学部特別聴講学生、2名は大学院外国人研究生、1名は大学院研究生として本研究室に在籍し、研究に従事している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～現在
井島 正博	教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	准教授	日本語史	2003年4月～現在

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「疑問文末についての研究—特に「～のか」に着目して—」

「授受を伴う動詞の恩恵性に関する考察」

他、特別演習を履修し、卒業した者、13名。

2015 年度

「若者語に関する考察」

他、特別演習を履修し、卒業した者、4名。

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

芋野達郎「順接接続助詞の通時的的研究」(指導教員) 井島正博

2015 年度

三浦さつき「形式名詞トコロによる接続表現の歴史的研究」(指導教員) 月本雅幸

伊藤芳樹「福島県相馬方言の研究—談話資料の収集と分析—」(指導教員) 肥爪周二

小野響太「史記「夏本紀・秦本紀」古点の国語学的研究」(指導教員) 月本雅幸

北崎勇帆「命令形式に由来する表現の通時的的研究」(指導教員) 井島正博

劉宝佳「機能動詞に関する記述的研究」(指導教員) 井島正博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲) (乙)

なし

2015 年度

(甲) (乙)

なし

09b 日本語日本文学（国文学）

1. 研究室活動の概要

国文学研究室は、学部の言語文化学科・日本語日本文学専修課程と大学院の日本文化研究専攻・日本語日本文学専門分野の国文学の教育研究を担当している。本研究室は、1877年（明治10）の東京大学発足時の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一らの先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963年（昭和38）に国語国文学専修課程となり、1975年（昭和50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994年（平成6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまでも保たれている。

現在、本研究室は教授5名・准教授1名・助教1名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカバーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。また2015年4月現在で、国文学研究室には大学院学生45名（内、外国人留学生11名）・学部学生42名が在籍し、その他、大学院外国人研究生3名、日本学術振興会特別研究員2名、外国人研究員1名を受け入れている。

本研究室は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012年度以来、本専修課程では「総合日本文学」の研究・教育という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本研究室は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出している。また、数多くの海外からの留学生をも、それぞれの母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるような研究者として育成し、学位を授与して来たが、「総合日本文学」は、そうした留学生たちや、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者のためということをとくに配慮した試みでもある。さらに、上記のような研究教育活動のほか、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている。

学会としては東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924年（大正13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として「東京大学国文学論集」をも毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

国文学研究室は、これまで多くの外国人研究員を受け入れ、あるいは教員が海外の学会の招待講演を引き受けるなどの活動を通して、国際交流に貢献してきたが、とくに2015年1月には、2013年にソウル大学校人文大学に新設された日本言語文明専攻の教員2名を招いて講演会を行い、3月には国文学研究室の教員6名がソウル大学校に赴いて講義や学生との交流を行った。また、2016年1月には、東京大学人文社会系研究科・文学部の新・日本学構想事業の一環として、コロンビア大学のハルオ・シラネ教授を招いて、英語による授業“Japanese Literature in World Context”を開講した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

長島 弘明	教授	日本近世文学
藤原 克己	教授	平安朝文学・和漢比較文学
渡部 泰明	教授	日本中世文学・和歌文学
安藤 宏	教授	日本近代文学
鉄野 昌弘	教授	日本古代文学
高木 和子	准教授	平安朝文学

(2) 助教の活動

神田 祥子

在職期間 2012年4月～2016年3月

研究領域 日本近代文学

主要業績

矢内賢二編『日本の芸術史 文学上演篇Ⅱ 近世から開化期の芸能と文学』、149-183頁、幻冬舎、2014.2

神田祥子『漱石「文学」の黎明』、全252頁、青簡舎、2015.1
矢内賢二編『明治、このフシギな時代』、80-124頁、新典社、2016.2

学外活動

女子美術大学非常勤講師（2012～2015年度）

(3) 内地研修員・外国人研究員

内地研修員

2014年度

なし

2015年度

なし

外国人研究員

2014年度

ニコラ・ミシェル・モラル（受入教員：安藤宏） スイス ジュネーブ大学講師 フランス外務省派遣
研究員

2015年度

ニコラ・ミシェル・モラル（受入教員：安藤宏） スイス ジュネーブ大学講師 フランス外務省派遣
研究員

日本学術振興会特別研究員

2014年度

佐藤温（受入教員：長島弘明） PD

田代一葉（受入教員：長島弘明） PD

高松亮太（受入教員：長島弘明） PD

2015年度

高松亮太（受入教員：長島弘明） PD

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「身体変化をモチーフとした芥川龍之介作品の比較研究」

「阿久悠論」

「『源氏物語』における女房の役割について」

「中上健次におけるうつほの問題」

「『女生徒』の作者をめぐって」

「『今昔物語集』本朝世俗部における武士」

「谷崎潤一郎『春琴抄』論 精神的支配関係を中心に」

「夏目漱石『門』における不在の子供について」

「江戸川乱歩『孤独の鬼』に関する諸考察」

「志賀直哉文学における葛藤とカタルシス」

「『出家』から読む源氏物語第二部」

「安部公房『箱男』論」

「とほすがたり研究」

「『沙石集』『雑談集』における無住自詠歌」

「散木奇歌集の研究」

「源氏物語における前妻と後妻の物語について」

「万葉集巻一における巻頭歌の意義」

「コノハナサクヤビメの研究」

「高市黒人の旅の歌」

2015 年度

- 「『今昔物語集』における病と怪異との関係」
- 「屋代本別冊『劔巻』研究」
- 「頭中将と柏木の源氏物語における血脈」
- 「芥川龍之介「秋」論」
- 「『三四郎』論—すれ違う男と女—」
- 「世阿弥の女性像について」
- 「牧野信一の幻想風景 表現に内在するまなざしの機能」
- 「『薄雪物語』研究」
- 「有島武郎『或る女』について」
- 「『東海道四谷怪談』の研究」
- 「江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」にみる近代青年の意識」
- 「源氏物語における落葉宮の存在意義について」
- 「玉鬘十帖論」
- 「『沙石集』の研究—学生談話をめぐって—」
- 「万葉集巻五から見る集団詠—梅花宴歌群を中心に—」
- 「鬼退治譚の研究—酒吞童子譚を中心として—」
- 「太宰治「女生徒」について」
- 「『仮面の告白』論」
- 「光源氏の老い」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

- 井内健太「源氏物語の罪について」〈指導教員〉藤原克己
- 出井孝明「源頼政論」〈指導教員〉渡部泰明
- 加野菜奈美「『とはずがたり』論」〈指導教員〉渡部泰明
- 福井拓也「初期久保田万太郎文学の研究」〈指導教員〉安藤宏
- 梁誠允「西鶴小説における奇談」〈指導教員〉長島弘明

2015 年度

- 郷津正「賀茂真淵の万葉学」〈指導教員〉長島弘明
- 鈴木仁義「山上憶良の研究」〈指導教員〉鉄野昌弘
- 芳我良介「源光行研究—その伝記と和歌—」〈指導教員〉渡部泰明
- 吉田夏美「谷崎潤一郎の戦後—『細雪』から『夢の浮橋』へ—」〈指導教員〉安藤宏
- 宋知現「源氏物語「若菜巻」論」〈指導教員〉高木和子
- 岡本光加里「『千五百番歌合』の研究」〈指導教員〉渡部泰明
- 北原圭一郎「『源氏物語』作中和歌の方法についての研究」〈指導教員〉高木和子
- 北藤稔道「万葉集に於ける「遊覧」歌の研究」〈指導教員〉鉄野昌弘
- 弘平谷隆太郎「小林秀雄論—「母なるもの」と「他者」をめぐって—」〈指導教員〉安藤宏
- 坂田和紀「神西清研究」〈指導教員〉安藤宏
- 中野顕正「天女能の文学的研究」〈指導教員〉渡部泰明
- 本多智香子「室生犀星「蜜のあはれ」論」〈指導教員〉安藤宏
- 山口一樹「『源氏物語』正篇の研究」〈指導教員〉高木和子
- 金慧珍「浅井了意の翻案方法—『伽婢子』を中心に—」〈指導教員〉長島弘明
- FERRE ANTONIN ALEXIS「日記文学と平安朝の記録文化」〈指導教員〉藤原克己

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

- 田口麻奈「鮎川信夫論」
〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤原克己・渡部泰明・鉄野昌弘・藤井貞和
- 野本瑠美「中世百首和歌の研究」
〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・高木和子・石川泰水

多田藏人「永井荷風研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉長島弘明・渡部泰明・阿部公彦・高木和子
片龍雨 PYUN YONGWOO「四世鶴屋南北研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉安藤宏・鉄野昌弘・古井戸秀夫・高木和子
高木周「中世日記文学の研究—阿仏尼から『とはずがたり』へ—」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・高木和子・三角洋一

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

小谷瑛輔「芥川龍之介研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉渡部泰明・高木和子・高橋龍夫・宮坂寛
戸塚学「堀辰雄研究—翻訳から創作へ—」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉長島弘明・阿部公彦・高木和子・渡部麻実
徐萍 XU PING「軍記物語の和漢比較研究—政治思想を視座に—」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・小島毅・佐伯真一
川上知里「今昔物語集研究」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・高木和子・伊東玉美

(乙)

なし

10 日本史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近來では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授4名、准教授2名、助教1名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊。6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996年創刊。現在19号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2015年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に6名、研究生に4名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 信 教授	日本古代史
野島（加藤）陽子 教授	日本近代政治史
大津 透 教授	日本古代史
鈴木 淳 教授	日本近代史
牧原 成征 准教授	日本近世史
高橋 典幸 准教授	日本中世史

(2) 助教の活動

竹ノ内 雅人

研究領域 日本近世史

主要業績 『江戸の神社と都市社会』（校倉書房）

「近世後期佃島の社会と住吉神社」（『年報都市史研究』14）

「神社と神職集団—江戸における神職の諸相—」（吉田伸之編『身分的周縁と近世社会6 寺社をささえる人びと』吉川弘文館）

「The Dissolution of Early-Modern Urban Society and the Activities of Shinto Priests in Edo」（『国際基督教大学学報3-A アジア文化研究』33）

「近世鳩ヶ嶺八幡宮の社会構造」（『飯田市歴史研究所年報』7）

「近世後期飯田町の人口動態と社会構造」（高澤紀恵他編『伝統都市を比較する 飯田とシャルルヴィル』山川出版社）

「南信地域における神職の組織編成と社会変容」（塚田孝・吉田伸之編『身分的周縁と地域社会』山川出版社）など

(3) 外国人研究員・内地研究員

(1) 人文社会系研究科研究員

2014年度 吉永 匡史

湯川 文彦

2015年度 湯川 文彦

(2) 特別研究員

なし

(3) 外国人研究員

2014年度 Bovbjerg, Christoffer

2015年度 Bom, Christopher

王 萌

王 美平

ミムラ・ジャニス

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「薩摩島津氏の支配地統治における上井覚兼の役割 —『上井覚兼日記』を中心に—」

「軍縮体制下における海軍の攻防 —二つのロンドン会議の狭間で—」

「国葬に関する一考察」

「古代の銅生産と律令国家 —地方銅生産の国家的掌握—」

「興亜院の活動とその「挫折」 —鈴木貞一のことばから—」

「中世島津氏の対琉球関係について」

「相模国一之宮村寄場組合について」

「国歌「君が代」について」

「陸奥・出羽における「受領官」の特質」

「律令制神祇官の成立過程と機能」

「不穩文書臨時取締法の成立における一考察」

「松浦党一揆の紛争処置に関する考察 —五島一揆の変質過程について—」

「幕末期における大庄屋の役割 —上総国埴生郡立木村高橋家御用留を例に—」

「中世後期近衛家と島津氏宗家・庶家との交流について」

「近世後期江戸内湾の浦利用 —上総国市原郡青柳村の浦利用ときさご札を題材に—」

「占領初期食糧の「人民管理」をめぐる運動と政治 —日本共産党と関東食糧民主協議会を中心に—」

「大極殿と律令国家の形成 —七世紀における王宮の展開—」

「島原・天草一揆後における熊本藩の天草富岡城在番の特質」

「大正期北樺太石油石炭業における企業と海軍の動向」

2015年度

「天明期甲州道中における中馬稼ぎ —天明五年中馬口銭一件を中心に—」

「東條英機の再検討 「アジア・太平洋戦争」日本軍守勢期に対する内在的理解」

「十七世紀萩藩における藩政運営と加判衆」

「都市事業と公園 —明治期大阪市の公園を例に—」

「日米交渉期の国内治安問題の分析」

「外交官 佐分利貞男の研究 —駐中国公使時代を中心に—」

「昭和戦前・戦中期の思想司法とプロレタリア作家の「転向」」

「明治五年大蔵省の琉球藩調査の実態」

「中世の先例意識と「古文書」」

「氏族制の統合原理」

「敦賀発電所にかけた期待とその結果 —日本原子力発電株式会社、敦賀市の行政、敦賀市民、敦賀半島の人々、それぞれの立場からの考察—」

「戦国期九条家領日根庄における年貢収取」
「一五世紀中後期の対馬と筑前博多 —朝鮮通交を手がかりに—」
「国民義勇戦闘隊を考える —義勇戦闘隊に至る沖縄の影響を中心に—」
「明治後期の労災扶助をめぐる官民の動向 —「労働者保険法草案」の中絶と日本傷害保険株式会社の登場を中心に—」
「大内領国における室町期の荘園について —筑前地域の検討とあわせて—」
「律令官僚制における文官と武官 —考選制度と武官における「仕奉」と「君恩」の関係から—」
「本願寺と加賀国の交通依頼」
「出版懇話会に関する一考察」
「沖縄返還時の米国民間航空権益の取扱いについて —外務省と運輸省航空局による日本側意向形成を中心に—」
「近世後期伊豆諸島の産物と幕府代官 —製糖業と伊豆国附島々産物会所を中心に—」
「大正二年司法部大改革に見る明治末・大正前期の司法観」
「一九三四年赤十字国際会議東京開催をめぐる日本赤十字社と政府」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

井上翔「律令国郡制と地方支配の実態的研究」〈指導教員〉佐藤信
佐藤美咲「平安時代の葬送にみる服喪と穢観念の展開」〈指導教員〉高橋典幸
鈴木智行「都市近郊農村と土地整理事業」〈指導教員〉鈴木淳
梅本肇「政党内閣崩壊後の政党と中央地方関係 —「半既成政党」国民同盟と熊本県会の動向を通じて—」
〈指導教員〉野島（加藤）陽子
吉田ますみ「第一次世界大戦後の国際海洋秩序と日本外交 —海運原則をめぐる—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
賀申杰「日露戦争前後の日清海軍の交流活動 —艦船購入と海軍留学生派遣を中心に—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子

2015年度

林奈緒子「京職による京中統治の実態と展開」〈指導教員〉佐藤信
青木太一「明治初年東京における救貧施設の形成と展開」〈指導教員〉牧原成征
海上貴彦「撰閣家の成立・展開と朝廷政治」〈指導教員〉高橋典幸
崎島達矢「府藩県三治制下の「府」と太政官政府関係 —大阪府を対象に—」〈指導教員〉鈴木淳
佐藤大悟「戊辰戦争後の越後長岡藩 —諸藩の連携と藩論—」〈指導教員〉鈴木淳
鈴木裕英「律令軍団制の特質と展開」〈指導教員〉佐藤信
土居嗣和「奈良時代における律令制大臣の展開」〈指導教員〉佐藤信
福田真人「幕末維新期の貨幣経済 —貨幣による「外庄」と政策的対応—」〈指導教員〉鈴木淳
福元啓介「近世後期における鹿児島藩の財政構造とその展開」〈指導教員〉牧原成征
AHN JAEIK「日米交渉と資源問題 —日米諒解案の作成過程を中心として—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

宮川麻紀「日本古代社会と流通経済」
〈主査〉佐藤信 〈副査〉 大津透・蓑輪顕量・鉄野昌弘・山口英男
吉井文美「中国在来秩序の改変と帝国日本の膨張——一九三一～一九四一年—」
〈主査〉野島（加藤）陽子 〈副査〉 鈴木淳・牧原成征・吉澤誠一郎・酒井哲哉
中西啓太「明治中後期地方行政の運営と展開」
〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島（加藤）陽子・牧原成征・奥田晴樹・高嶋修一

(乙)

なし

2015年度

(甲)

金蓮玉 KIM YEONOK「開国期幕府の西洋軍事技術導入過程—長崎「海軍」伝習の再検討を中心に—」
〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島（加藤）陽子・保谷徹・横山伊徳・藤田覚

立本紘之「昭和初期左翼運動における權威性確立過程の研究」

〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・牧原成征・酒井哲哉・外村大

岡本真「戦国期遣明船研究」

〈主査〉高橋典幸〈副査〉牧原成征・島田竜登・末柄豊・村井章介

千葉拓真「近世中後期における加賀藩前田家と朝幕藩関係」

〈主査〉牧原成征〈副査〉山口和夫・松方冬子・藤田寛・吉田伸之

(乙)

坂井孝一「曾我物語の史的研究」

〈主査〉高橋典幸〈副査〉佐藤信・渡部泰明・近藤成一・藤原良章

1 1 中国語中国文学

1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学の分離などを経て、1904年漢学科が支那哲学、支那文学に分かれた。途中一時期支那哲学支那文学科として合併された時期はあるものの、哲学科、文学科が独立の学科となった時点から数えても、今日まで100年を越す歴史をもっている。

研究領域は、中国語学と中国文学の2分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビ・ドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授3名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員1名が教育に参加している。学生数は、学部学生8名、大学院修士課程8名、博士課程18名、研究生8名、交換留学生2名で多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陸からの留学生23名、台湾からの留学生2名、合計25名にのぼっている。留学生の増加は、授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。また、海外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催するほか、学内での公開講演会等でも広く発信を行っている。最近の主要な催しに「こと・ところ・ことば」（第5回東京大学文学部公開講座、2014年6月14日）「現代東アジア文学史の国際共同研究」（国際シンポジウム2015年8月22日～2015年8月23日 於 山上会館）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、留学生を交えた共同研究の報告や、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2015年度第18号をUT Repositoryで公開している。（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#12-0>）

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

藤井省三教授（中国近代文学、台湾・香港文学、日中比較文学）
木村英樹教授（現代中国語文法論・意味論）
大西克也教授（中国古典文法、文字学）
齋藤希史教授（中国古典詩文）

(2) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

林敏潔：南京師範大学日語系教授

研究題目—魯迅と林芙美子、増田渉との交流、蕭紅・謝冰心の東京体験の調査研究。

研究期間—2013年12月20日～2014年12月20日

傅元峰：南京大学現代文学研究中心副教授

研究題目—中国現代詩歌の影響関係

研究期間—2013年12月20日～2014年12月20日

王姿雯：台南大学 兼任助理教授

研究題目—日本統治期日台文学交流史

研究期間—2014年6月23日～2014年9月22日

張文薰：台湾大学 副教授

研究題目—20世紀における流浪、旅行、留学と東アジア文学の研究

研究期間—2014年7月5日～2014年9月10日

王曉華：上海外国語大学講師
研究題目—言語類型学に基づくモダリティの日中(英)対照研究
研究期間—2014年9月1日～2015年8月31日

葉子：南京大学現代文学研究中心副教授
研究題目—アメリカ文芸誌『ニューヨーカー』と現代東アジア文学
研究期間—2015年4月1日～2016年5月5日

董冰華：長春理工大学文學院副教授
研究題目—《中原雅音》の再編集と復元
研究期間—2015年9月20日～2016年9月19日

内地研究員

野原将揮：日本学術振興会 特別研究員
研究題目—上古中国語音韻体系の共時的・通時的的研究～出土資料を中心に～
研究期間—2013年4月～2016年3月

夏海燕：日本学術振興会 特別研究員
研究題目—日本語動詞の意味拡張に見られる方向性
研究期間—2013年4月～2016年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「張愛玲研究」
- 「上古中国語における一人称代名詞「余（予）」の使用について」
- 「PM2.5汚染報道に見る『人民日報』と中国都市報の比較」
- 「「你說」とコミュニケーション上の戦略—「主観性」と「際立ち」の観点から—」

2015年度

- 「『孫子』の兵法—『六韜』との比較を通じて—」
- 「王禎和『玫瑰玫瑰我愛你』における娼妓」
- 「高倉健と中国映画」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- 松原功「福岡・亀井門下の女子漢詩文教育（付）少葉と雪首の贈答詩」（指導教員）大西克也
- 樽林雪子「老舍『四世同堂』日・英翻訳研究」（指導教員）藤井省三
- 陳佳「張愛玲の小説と映画化作品におけるイメージの比較研究—『傾城の恋』と『半生縁』をめぐって」（指導教員）藤井省三
- 林崑胤「台湾語の授与動詞の歴史変遷」（指導教員）大西克也

2015年度

- 蔡燕梅「清初杭州の文人ネットワークと『尺牘新語』」（指導教員）大木康

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- (甲)
 - 三野豊浩「雨の詩人 陸旂—その作品と生涯—」
〈主査〉藤井省三 〈副査〉大西克也・戸倉英美・内山精也・浅見洋二
 - 張佩茹 CHANG Pei-ju「現代中国語における視覚動詞の文法化」
〈主査〉木村英樹 〈副査〉大西克也・西村義樹・楊凱栄・小野秀樹

(乙)

なし

2015年度

(甲)

戸内俊介「上古中国語文法化研究序説——「于」「而」「其」の意味機能変化を例に——」

〈主査〉大西克也 〈副査〉木村英樹・楊凱栄・小野秀樹・松江崇

黒田眞美子「韋應物詩論—悼亡詩を中心として—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉齋藤希史・戸倉英美・赤井益久・和田英信

前田真砂美「現代中国語における「比較」と「程度」の考察——“还”、“更”、“比较”を中心に——」

〈主査〉木村英樹 〈副査〉大西克也・楊凱栄・小野秀樹・松江崇

(乙)

なし

1 2 東洋史学

1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2014～2015年度本専修課程の授業を担当したのは、教授1名・准教授3名・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけでなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるとともに、史学大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡協議会、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわるとともに、また個別には、中国社会文化学会、南アジア学会、社会経済史学会、アジア歴史地理情報学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係をもちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	水島 司 (南アジア史)	(1997年10月～現在)
准教授	佐川 英治 (中国古代史)	(2010年4月～現在)
准教授	吉澤 誠一郎 (中国近現代史)	(2001年4月～現在)
准教授	島田 竜登 (東南アジア史)	(2013年4月～現在)

(2) 助教の活動

助教 大塚 修

在職期間 2014年4月～現在

専門分野 西アジア史

主要業績

論文

大塚修、「前近代におけるペルシア語世界史書」、『歴史と地理：世界史の研究』、240、25-32頁、2014.8

大塚修、「イルハーン朝末期地方政権におけるペルシア語文芸活動の隆盛：ハザーラス朝君主ヌスラト・アッディーンの治世を事例として」、『オリエント』、58-1、40-56頁、2015.9

大塚修、「ハーフィズ・アブールの歴史編纂事業再考：『改訂版集史』を中心に」、『東洋文化研究所紀要』、168、245-289頁、2015.12

大塚修、『集史』第2巻「世界史」校訂の諸問題：モハンマド・ロウシヤンの校訂本に対する批判的検討を中心に」、『アジア・アフリカ言語文化研究』、91、41-61頁、2016.3

学会発表

国内、大塚修、「ハムド・アッラー・ムスタウフィーとイーラーン・ザミーン：「新出」史料『勝利の書続編』の記述を中心に」、日本中東学会第30回年次大会、東京国際大学、2014.5.11

国際、Osamu OTSUKA、「Abū al-Qāsim Qāshānī's *Zubdat al-Tawārīkh* and the Historiography of the Late Ilkhanid Period」、International Workshop: Persian and Chinese Historiography in the Mongol Empire、Hongo Satellite Office, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo、2015.4.8

- 国内、Osamu OTSUKA、「Visualising General History: Hamd Allāh Mustawfī's New Style of Historical Writing」、日本中東学会第31回年次大会、同志社大学、2015.5.17
- 国際、Osamu OTSUKA、「Hamd-Allāh Mustawfī and Īrān-zamīn: With a Special Reference to the Unexamined Source, the *Dhayl-i Zafar-nāma*」、The Seventh Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies、Mimar Sinan Fine Arts University, Istanbul、2015.9.9
- 国内、大塚修、「イルハーン朝君主の称号と王権：イラン概念研究の視点から」、平成27年度九州史学会大会、九州大学、2015.12.13
- 国内、大塚修、「現代の日本におけるイラン史研究の現状」、シンポジウム「現代の日本におけるイスラーム学とイラン学の現状」、イラン・イスラーム共和国大使館、2015.12.17
- 国内、大塚修、「中東世界をのぞいてみよう：現在の世界情勢から」、法政大学学生センター・課外教養プログラム、2016.1.15

他機関での講義等

- 非常勤講師、日本大学経済学部、「地域と文化D」、2014.4～2015.3、2015.10～2016.3
- 非常勤講師、日本大学経済学部、「比較宗教文化論」、2015.4～2015.9
- 非常勤講師、青山学院大学文学部、「東洋史原典講読I」、2015.4～2016.3
- 非常勤講師、法政大学文学部、「イスラーム世界論I」、2014.4～2014.9、2015.4～2015.9
- 非常勤講師、法政大学文学部、「イスラーム世界論II」、2014.10～2015.3、2015.10～2016.3
- 非常勤講師、法政大学文学部、「東洋中世史」、2015.4～2015.9
- 非常勤講師、法政大学文学部、「東洋史特講II」、2015.10～2016.3
- 非常勤講師、千葉大学文学部、「イスラーム地域史a」、2014.4～2014.9

(3) 外国人研究員・内地研究員

- エリック・シッケタンツ(ドイツ) 2015年4月～現在
- 朱佩禧(中国) 2015年5月～現在

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「ガンディーの対イスラーム観の変遷」
- 「平戸イギリス商館長リチャード・コックスと日本」
- 「酒税制度からみる中華民国期の酒」
- 「日本占領下フィリピンにおける宣伝工作—第十四軍宣伝班の活動とその評価—」
- 「被支配諸民族の対匈奴一斉反乱に関する考察—前70年代、後80年代の事例を参考として—」
- 「1970年のヨルダン内戦におけるヨルダン王国とフサイン国王—内戦終結に向けた国王の動きを中心に—」
- 「民国期における生命保険業の発展」
- 「台湾籍民の教育—職業から見る日本統治期の対籍民政策—」
- 「鉄鋼都市鞍山の都市計画と開発」
- 「19世紀エジプトの混合裁判所制度」
- 「近代中国における旅行観の変遷—『旅行雑誌』(1927-1954年)を中心に—」
- 「後漢蜀郡における郡太守と在地社会—成都東御街新出漢碑の検討—」
- 「日本軍によるシンガポール華僑虐殺」
- 「中国古代における「三」の象徴性と「天地人」思想のかかわり」

2015年度

- 「コプト語聖人伝に見るアラブの「王」と教会—『イサク伝』(700年前後)の事例—」
- 「ボンベイ綿工業の成立期における労働者—工場委員会の報告に見る法整備の変遷と背景—」
- 「『パサイ王国物語』研究—パサイ王国とイスラーム—」
- 「新女性・朴仁徳における親日行動の思想的背景—緑期連盟婦人部との関係を中心に—」
- 「1920年代マドラス市における人口動態—死亡の側面を中心に—」
- 「19世紀末ベンガルにおける飢饉と植民地的開発」
- 「1932年アラブ音楽会議—「アラブ音楽」の枠組みをめぐる議論とエジプトのアイデンティティ—」

「清華簡『楚居』より見直す楚王都の変遷—都はなぜ遷るのか—」

「康有為の西洋体験：亡命期の旅行記を手がかりに」

「朝鮮時代の難札について」

「8～10世紀の黄海海域—交易拠点の変遷とその歴史的背景—」

「ドゥッラーニー朝におけるギズイルパーシュ」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

野間稔「南京・国民政府期の債券を巡る問題—債券市場、債権整理—そして金利問題—」(指導教員) 吉澤誠一郎

板橋暁子「両晋交替をめぐる華北勢力の動向と東晋の正統性」(指導教員) 佐川英治

2015年度

田熊敬之「中国北朝期における西域系胡人官僚の研究」(指導教員) 佐川英治

嘉藤慎作「17世紀スーラト史再考—ムガル朝下の港市空間の構造と商人—」(指導教員) 水島司

高本尽「17世紀後半港市マスリパトナムにおけるイギリス東インド会社の商業活動」(指導教員) 水島司

藻谷悠介「ムハンマド・アリー占領期におけるアレゴ高等協議会の研究」(指導教員) 森本一夫

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

関智英「日中戦争時期、対日和平陣営における将来構想」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉野島(加藤)陽子・佐川英治・村田雄二郎・土屋光芳

芦沢知絵「近代中国における日本企業の労務管理—内外綿株式会社を事例として—」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉姫岡とし子・鈴木淳・黒田明伸・富澤芳亜

新居洋子「18世紀における中国とヨーロッパの思想交流—在華イエズス会士アミオの報告を中心に—」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉川原秀城・深澤克己・杉山清彦・岸本美緒

上野美矢子「フィリピン革命第2フェーズにおける領外活動から見た崩壊の過程—フィリピン、香港、スペイン、アメリカ、日本—」

〈主査〉古田元夫 〈副査〉水島司・井坂理穂・加納啓良・早瀬晋三・寺田勇文

辻明日香「コプト聖人伝に見る十四世紀エジプト社会」

〈主査〉大稔哲也 〈副査〉羽田正・深澤克己・森本一夫・松田俊道

曹貞恩 Jo Jeong-Eun「近代中国におけるプロテスタント医療宣教の展開—中国医療伝導協会を中心に(1886-1932)」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉勝田俊輔・黒田明伸・石川照子・飯島渉

(乙)

なし

2015年度

(甲)

梅村尚樹「宋代学校研究—地域社会における儀礼・祭祀空間としての視点から—」

〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉小島毅・佐川英治・近藤一成・岸本美緒

小澤一郎「火器史における「近代」とイラン：地域間武器移転の変容と特定地域の歴史的展開との連関の研究」

〈主査〉羽田正 〈副査〉吉澤誠一郎・保谷徹・森本一夫・近藤信彰

(乙)

なし

1 3 中国思想文化学

1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治10年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。平成7年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成21年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成26年度の教員は、教授2名、准教授1名、助教1名で、平成27年度は、教授2名、助教1名であり、他に非常勤講師を4～5名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成4年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助手1名体制にともない、平成8年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に平成26年度は計11名（博士課程4名、修士課程2名、研究生5名）、平成27年度は計11名（博士課程5名、修士課程2名、研究生4名）が在籍、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。平成27年度後期には1名が留学中であった。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選抜される事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年2～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会科学学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和48年～）が組織されて月例会を開いており、平成2年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

川原秀城 教授（2015年3月 定年退職）	専門分野 東アジア思想史・中国朝鮮科学史
小島 毅 教授	専門分野 儒教史・東アジア王権論
横手 裕 教授	専門分野 道教史・中国三教交渉史

(2) 助教の活動

小野泰教 助教	専門分野 中国近代思想史
---------	--------------

在職期間 2011年4月～2016年3月

主要業績

（論文）

小野泰教、「孫詒讓「墨子後語」の儒墨論争観」、『東洋史研究』、第73巻第3号、68-94頁、2014.12

呂頌長、小野泰教、「康有儀の山本憲に宛てた書簡(訳注・その三)」、『四天王寺大学紀要』、第60号、359-378頁、2015.9

呂頌長、小野泰教、「康有儀の山本憲に宛てた書簡(訳注・その四)」、『四天王寺大学紀要』、第61号、259-276頁、2016.3

（書評）

手代木有児、『清末中国の西洋体験と文明観』、汲古書院、『歴史学研究』、第923号、51-54頁、2014.10

(学会発表)

- 国内、小野泰教、「書評：岡本隆司・箱田恵子・青山治世著『出使日記の時代——清末の中国と外交』」、
中国社会科学学会ワークショップ「中国外交史研究の最前線」、東京大学、2014.3.27
- 国際、小野泰教、「清末民初「道統」観念的討論及其特色：以嚴復的韓愈觀為中心」、儒家道統与民主共和國際學術研討会、台湾師範大学、2015.9.1
- 国内、小野泰教、「清末中国の宣教師の西洋薬物学書籍についての思想史的考察」、「アジアの中の日本
古典籍——医学・理学・農学書を中心として——」第3回研究会、国文学研究資料館、2015.10.31
- 国内、小野泰教、「清末中国における儒教的民本主義と西洋認識——郭嵩燾を中心に」、シンポジウム
儒教的民本主義と国民国家形成、明治大学、2015.12.13

(予稿・会議録)

- 国際会議、小野泰教、「清末民初「道統」観念的討論及其特色：以嚴復的韓愈觀為中心」、2015.9.1
『儒家道統与民主共和國際學術研討会』、1-10 頁

(翻訳)

- 個人訳、Thomas Fröhlich、「"Confucian Democracy" and its Confucian Critics: Mou Zongsan and Tang Junyi on
the Limits of Confucianism」、小野泰教、『「儒教民主主義」とその儒教批判家——儒教の限界における
牟宗三と唐君毅——』、『中国——社会と文化』、第29号、219-251 頁、2014.7

(他機関での講義等)

- 非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語中級総合 I II」、2014.4~2015.3
- 非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語初級 102a 102b」、2014.4~2016.3
- 非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語中級 201a 201b」、2015.4~2016.3
- 非常勤講師、日本女子大学 人間社会学部、「中国語会話 I」、2014.4~2016.3
- 非常勤講師、日本女子大学 人間社会学部、「中国語 II 前期 後期 B」、2014.4~2016.3

(3) 外国人教員の活動

徐聖心 准教授 専門分野 先秦儒学、莊子思想、明末仏教史

在職期間 2014年4月~2015年9月

担当講義

2014年度

- 学部・中国思想文化学特殊講義「中国近世思想研究」(1)(2)(前期・後期、大学院共通)
- 学部・中国思想文化学演習「中国語文表現実践」(1)(2)(前期・後期)
- 大学院・特殊研究/アカデミックライティング「学術中国語文実践」(1)(2)(前期、後期)
- 大学院・特殊研究「中国近世思想研究」(1)(2)(前期・後期、学部共通)
- 大学院・演習「中国近世仏教文化史研究」(1)(2)(前期・後期)

2015年度

- 学部・中国思想文化学特殊講義「中国夢文化」(前期、大学院共通)
- 学部・中国思想文化学演習「中国語文表現実践」(前期)
- 大学院・特殊研究/アカデミックライティング「学術中国語文実践」(1)(前期)
- 大学院・特殊研究「中国夢文化」(前期、学部共通)
- 大学院・演習「中国近世仏教思想」(1)(前期)

(4) 外国人研究員・内地研究員

陳永福 (日本学術振興会外国人特別研究員)

2013年9月~2015年3月

高山大毅 (日本学術振興会特別研究員)

2014年4月~2015年3月

本橋裕美 (日本学術振興会特別研究員)

2014年4月~現在

畢雪飛 (中国浙江農林大学准教授)

2015年4月~2016年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

なし

2015年度

「抱朴子における古人の評価」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

小田恵美子「陸九淵の“人心”についての研究」〈指導教員〉小島毅

夏雨「漕運兵丁と羅教信仰についての研究」〈指導教員〉小島毅

2015年度

水野博太「服部宇之吉の思想形成とその展開—「孔子教」論を中心として—」〈指導教員〉小島毅

溝口梓里「近代日本の中国哲学史研究と宇野哲人—『支那哲学史講話』を中心に—」〈指導教員〉横手裕

頼思好「『新鐫仙媛紀事』研究—淵源から成書まで—」〈指導教員〉横手裕

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

平澤歩「漢代経学に於ける五行説の変遷」

〈主査〉川原秀城 〈副査〉横手裕・戸川芳郎・林克・池田秀三

田中有紀「朱載堉音楽理論の思想的研究」

〈主査〉川原秀城 〈副査〉小島毅・渡辺裕・中島隆博・中純子

(乙)

なし

2015年度

(甲)

商兆琦「明治時代の知識人と足尾鉍毒事件—「近代性」問題への思想史的接近」

〈主査〉小島毅 〈副査〉横手裕・中島隆博・黒住真・澤井啓一

(乙)

なし

1 4 インド語インド文学

1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では三千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8年（1996）度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられ、これにより、専門的なドラヴィタ系語学文学の研究に携ることが可能となった。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

高橋孝信（タミル語学文学）

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

非常勤講師

矢島道彦、宮本久義（2014年度）、横地優子（2015年度）

(2) 外国人研究員・内地研究員

朴紋成

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「Bhāradvāja - Piṭṛmedhasūtra 第一章訳注研究—古代インド葬送儀礼の儀礼次第一—」

2015年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

なし

2015年度

竹崎隆太郎「リグヴェーダにおける「心臓」の観念—詩作の観点から—」（指導教員）梶原三恵子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲) (乙)

なし

2015年度

(甲)

宮本城「タミル二大叙事詩の成立に関する研究」

〈主査〉高橋孝信 〈副査〉梶原三恵子・水野善文・宮本久義・矢島道彦

(乙)

なし

15 インド哲学仏教学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。以来、現インド語インド文学専修課程と密接な関係を保ちつつ、現在に至っている。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播してそれぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2015年度現在、教員は教授4名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野（南アジア・東南アジア・仏教コース）に対応し、その一部を構成する。ここでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門などと連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年3～5名ほどであり、学士入学者も1～2名ほどいる。学部卒業生の半分近くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学するが、一般企業に就職する者もいる。最近の傾向として、一般企業への就職が増えてきている。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくるものも稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としているから、結果的には、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通である。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に数回研究例会を開催している。ここでは、大学院の博士課程在学学生などによる研究発表、国際会議等で海外に出張した教員による帰朝報告、海外留学者の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、原則として年に1回、『インド哲学仏教学研究』が刊行され、好評を得ている。

本専修課程が関わるインド哲学研究ならびに仏教学は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。2014、2015年度には、韓国の全南大学校と大学院生の交流シンポジウムを開催し、2015年度には同じく韓国の金剛大学校と合同シンポジウムを開催した。また、多くの留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の諸学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 丸井 浩	専門分野	インド哲学	在職期間	1992年4月より現在に至る
教授 斎藤 明	専門分野	インド仏教	在職期間	2000年4月より2016年3月 定年退職
教授 下田 正弘	専門分野	インド仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る
教授 蓑輪 顕量	専門分野	日本仏教	在職期間	2010年4月より現在に至る

(2) 助教の活動

加藤 隆宏 助教 専門分野 インド哲学
在職期間 2012年4月～2016年3月
主要業績

(論文)

加藤隆宏、「古代インドにおける殺生」、『国士館哲学』、19、7-17頁、2015.3

Takahiro Kato、「Interpretation of the Bhagavadgita II.11」、『Journal of Indian and Buddhist Studies』、Vol. 64, no. 3、64-70頁、2016.3

(書評)

島岩、『『バーマティー』の文献学的研究』、『北陸宗教文化』、27号、61-65頁、2014.3

(学会発表)

国際、Takahiro Kato, 「What is prajñāvāda? An Analysis of the Bhagavadgītā II.11.」、International Sanskrit Conference in Dehradun, Dehradun, India, 2014.8.30

国際、Takahiro KATO, 「kanva and/or Madhyandina: Bhaskara's acceptance of the two recensions of the Brhadaranyaka-Upanisad」、XVIth World Sanskrit Conference、タイ・バンコク、2015.7.1

国内、加藤隆宏、「バガヴァッドギーターII.11 の解釈をめぐって」、日本印度学仏教学会第 66 回学術大会、高野山大学 (和歌山県)、2015.9.19

国際、Takahiro KATO, 「The Interpretation of mithyajnananimitta in the Pancapadika」、22nd International Congress of Vedanta, New Delhi (India)、2015.12.30

(研究報告書)

加藤隆宏、「三島海雲記念財団研究報告書」、52、160-162 頁、2015.11

(予稿・会議録)

国際会議、Takahiro Kato, 「What is prajñāvāda? An Analysis of the Bhagavadgītā II.11.」、International Sanskrit Conference in Dehradun, Dehradun, India, 2014.9.26

『Vāgāmbhṛī』、74 頁、2014.9

(受賞)

国内、加藤隆宏、平成 25 年度日本印度学仏教学会賞、日本印度学仏教学会、2014.8.30

(翻訳)

抄訳、Wilhelm Halbfass, "Karma und Wiedergeburt in indischen Denken, Kapitel 4"、加藤隆宏、『ヴィルヘルム・ハルプファス著『インド思想における業と再生』— 第 4 章「インド仏教における業— 行為者のない行為」和訳—』、『生田哲学』、15、96-137 頁、2014.11

(3) 外国人研究員・内地研究員

2014 年度： 王俊淇(中国) 金基準(韓国) 謝威徳(台湾)

2015 年度： 金基準(韓国)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014 年度

なし

2015 年度

「ヴェーダ文献における神と人との関係」

「良遍の思想における三性・三無性の変遷」

「被差別民に対する差別と救済の思想的研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

内田みどり「初期仏教に於ける自殺観—サンユッタ・ニカーヤの三経—ゴーディカ・ヴァッカリ・チャンナーを巡って」(指導教員) 下田正弘

野村勇貴「『正法眼蔵』「夢中説夢」巻を読み解く—道元における定慧と言葉を巡る研究」(指導教員) 蓑輪顕量

伊集院栞「Trailokyavijayamandalopayika の「マンダラ成就法」—Sarvajayodaya との比較から—」

(指導教員) 斎藤明

渡邊要一郎「『パダマーラー』を中心とした『サッダニーティ』の研究」(指導教員) 下田正弘

2015 年度

清水尚史「Pancaskandhakavibhasa の研究」(指導教員) 下田正弘

鄭盛旭「南伝大蔵経・パーリ語『如是語義疏』の基礎的な研究」(指導教員) 馬場紀寿

曾柔佳「『楞伽経』における二障」(指導教員) 下田正弘

NEWHALL THOMAS BRADFORD「道宣『四分律羯磨疏』に於ける戒體論とその思想史的背景」

(指導教員) 蓑輪顕量

楊潔「瑜伽行派における「五遍行」の研究—『瑜伽師地論』を中心として—」(指導教員) 斎藤明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

青野道彦「パーリ律文献における懲罰的羯磨の研究」

〈主査〉下田正弘 〈副査〉斎藤明・馬場紀寿・山極伸之・林隆嗣

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

友成有紀「インド論理学者が描くパーニニ文法学—『ニヤーヤマンジャリー』第六日課の研究—」

〈主査〉丸井浩 〈副査〉斎藤明・小林正人・小川英世・吉水清孝

中西俊英「法蔵における思想構造の総合的研究」

〈主査〉蓑輪顕量 〈副査〉斎藤明・下田正弘・馬淵昌也・石井公成

岩崎陽「ガンゲーシャの言語情報理論——言葉の「正しさ」をめぐって——」

〈主査〉丸井浩 〈副査〉斎藤明・下田正弘・和田壽弘・桂紹隆

新作慶明「『プラサンナパダー』第 18 章「我（アートマン）の考察」の研究」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉丸井浩・下田正弘・吉水千鶴子・米澤嘉康

崔境眞「『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ（認識手段確定論）』の刹那滅論証をめぐって—カダム派・サンブ僧院系諸注釈を中心に—」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉丸井浩・下田正弘・福田洋一・酒井真道

(乙)

なし

16 イスラム学

1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2014年度及び2015年度は教授1名、准教授1名がそれぞれ近代より前の古典期イスラムの法学や思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、オスマン史研究、現代アラブ政治、イラン思想、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。また2014年度には、英国より外国人特別研究員を迎え、初期法学の研究を進めた。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属する西アジア歴史社会専門分野と連携しつつ、さらには東洋文化研究所ならびに大学院総合文化研究科の教員2名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2～3名前後である。学部及び大学院の在籍数は、2014年度は12名、2015年度は11名である。他大学からの学士入学者もいる。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2014年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

2015年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

(2) 外国人研究員・内地研究員

外国人特別研究員 Paul Gledhill (2014年8月3日～12月2日)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「日本におけるモスクの地域的役割とその可能性」
「イスラム教における「天使」論」
「ニターク・フェスティバルから見るエジプト現代アートの諸相」

2015年度

「ジャッサースの法理論 マスラハ論とキヤース論の検討を中心に」
「イスラーム急進思想の源泉」
「ムスリム社会における幽霊観～現代中東地域における事例を中心に～」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

なし

2015 年度

相樂悠太「イブン・アラビー思想における「心」(qalb)と「変化」(taqallub)：両概念の結合現象について」

〈指導教員〉菊地達也

平野貴大「フラート・ブン・イブラーヒーム・クーフィーのタフスィールにおけるシーア派思想の考察」

〈指導教員〉鎌田繁

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲) (乙)

なし

2015 年度

(甲)

宋暎恩 SONG Young eun「ジャーミー (‘Abd al-Rahmān Jāmī) の信仰における存在一性論と修行論」

〈主査〉鎌田繁 〈副査〉柳橋博之・鶴岡賀雄・菊地達也・藤井守男

(乙)

なし

17 西洋古典学

1. 研究室活動の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語で書かれた文献全体を対象とする。のみならず古典古代世界の全容の把握をもめざす学問である。西洋社会を理解する上で、この学問の重要性はますます強調するまでもなく、欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問である。本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は助教を加えても2人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語/ラテン語・韻文/散文いずれをもおこなえるように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。2014～2015年度は、「クラシカル・セミナー」と称する研究会を、修士論文報告会などを含めて12回ほど開催し、世界的研究者の研究の最先端に触れるようにしている。さらに、2013年度からは「キャリア・セミナー」と称するセミナーを研究室主催で開催し、学部学生および院生のキャリア意識の向上に努めている。

研究室紀要（査読つき）を原則として年1回発行している。2013年12月に第8号、2015年12月に第9号を刊行した。

この他、一種の課外活動として、東京大学本部「体験活動」プログラムの資金援助を受け、2014年度、2015年度に、オクスフォード大学クライスト・チャーチを主たる宿泊地として、「古典学とコモンロー」入門と称する、サマープログラムを実施した。参加者は大学院生を含めると、2014年度、2015年度とも、約25名を数える。学生はこのほか、各自のテーマを滞在中に研究し、最終発表会にてプレゼンテーションを行った。この試みの手ごたえは十分大きいので、今後も継続の予定である。また、大学院生に関しては、東京大学スーパーグローバル事業の一つとして、オクスフォード大学との研究交流活動の一環として、JASSO（日本学生支援機構）より奨学金をえて、2014年度は2名（いずれも西洋古典学専攻）、2015年度は3名（1名は西洋古典学、2名は仏語・仏文学専攻）を先方に6か月留学させている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

葛西 康德 ギリシア・ローマ法とその普及、法廷弁論、ギリシア宗教、西洋古典学継受史

（教授）2011年度～

(2) 助教の活動

吉田 俊一郎

在職期間 2014年度～

研究領域 ラテン語散文、修辞学

主要業績

（論文）

吉田俊一郎、「大セネカの修辞学理論と模擬弁論の関係について」、『西洋古典学研究』、63、87-98頁、2015.3（書評）

吉田俊一郎、「Wolfram Ax, *Quintilians Grammatik (Inst. Orat. < I, 4-8)*. Pp. viii+425, Berlin/Boston, De Gruyter 2011」、『西洋古典学研究』、62、116-118頁、2014.3

（学会発表）

国内、吉田俊一郎、「大セネカの修辞学理論と模擬弁論の関係について」、日本西洋古典学会第65回大会、京都女子大学、2014.6.8

国際、Shunichiro Yoshida、「Political Crisis in the Rhetorical Works of the Early Roman Empire」、Fifth International Symposium on European Languages in East Asia、台湾大学、2014.10.25

国内、吉田俊一郎、「ローマ帝政初期の模擬弁論と歴史記述」、2015年度西洋史研究会大会、立教大学、2015.11.15

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「古代ギリシアにおける「経済活動」について」

2015年度

「ウェルギリウス『牧歌』第一歌における人物描写」

「Homeric Dialect について」

「リウィウス『ローマ建国以来の歴史』におけるヴァレリウス・アンティアス」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

水元彬人「プラトン『ノモイ』篇におけるエポデーの比喩：その医術とのつながりに関する一考察」

〈指導教員〉葛西康德

黄哲瑞「On the Characterization of Paris in the Iliad」〈指導教員〉葛西康德

2015年度

藤原理沙「古代ローマのキリスト教徒による死者祭儀」〈指導教員〉葛西康德

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲) (乙)

なし

2015年度

(甲)

吉川斉「「イソップ寓話」の成立と展開に関する一考察」

〈主査〉葛西康德 〈副査〉日向太郎・片山英男・高田康成・渡邊顕彦

(乙)

なし

18 フランス語フランス文学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、ひとり詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にもなっており、映画のシナリオや時事雑誌の記事など、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授4名、外国人教師(准教授)1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実際的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2015年度の大学院学生数は、修士課程13名、博士課程9名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格(Master II)を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。その一方、本研究科で課程博士論文を提出する学生も増加し、毎年2、3名が博士号を取得している。また専門的知識を生かし、修士課程修了後に新聞社、出版社等に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年10名程度で、2015年度の学部在学学生は17名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、他専修課程・他学部の学生に対しては「原典を読む」の枠内で講読授業を提供している。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院2コマ(「アカデミック・ライティング」を含む)、学部2コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリとリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール(高等師範学校)との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 月村辰雄(フランス中世文学)
中地義和(ランボー、フランス近代詩)
野崎 歆(ネルヴァル、フランス19世紀文学)
塚本昌則(ヴァレリー、フランス20世紀文学)

(2) 助教の活動

2014-5年度

新田昌英(ニッタマサヒデ)

略歴

2002年3月	東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修卒業
2004年3月	大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻仏語仏文学専門分野修士課程修了
2010年3月	大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得満期退学
2011年3月	大学院人文社会系研究科にて博士(文学)学位取得
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教

研究対象 フランス近代文学・近代哲学

主要業績

(論文) « Alain et Broussais », 『仏語仏文学研究』第47号、東京大学仏語仏文学研究会、2015、p.61-80.

- (学会発表) 日本フランス語フランス文学会 2014 年度秋季大会研究発表「応用心理学雑誌の寄稿者アラン」、
2014 年 10 月 25 日、広島大学
- (研究テーマ) 文部科学省研究費補助金、基盤研究(B)、分担研究者、「フランス近代作家の歴史意識」、2011～
2014
文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、分担研究者、「近代フランス文学における散文の研究」、
2013～2015
文部科学省科学研究費補助金、若手研究(B)、研究代表者、「近代フランスの感情研究」、2014～
2016
- (他機関での講義等) 非常勤講師、東京理科大学、「フランス語 I」、2014.4～2016.3
- (著書) 新田昌英『アランの情念論』慶應義塾大学出版会、2014.9、448p.

(3) 外国人教員の活動

マリアンヌ・シモン=及川 (Marianne SIMON-OIKAWA)

略 歴

- 1989 年 9 月 国立高等師範学校 (エコール・ノルマル・シュペリユール) およびパリ第 7 大学入学
1990 年 9 月 同大学にて仏文 (現代文学) 学士号、英文学士号取得
1991 年 9 月 同大学にて修士号取得 (現代文学)
1992 年 7 月 大学教育教授資格 (アグレガシオン) 取得
1993 年 9 月 パリ第 7 大学にて DEA (PhD) 取得 (現代文学)
1993 年 9 月—1995 年 8 月 東京大学研究生
1995 年 9 月—1998 年 9 月 リール大学講師 (現代文学)
1996 年 9 月 パリ第 7 大学にて日本語学士号取得
1997 年 9 月 同大学にて日本語修士号取得
1999 年 12 月 パリ第 7 大学にて文学博士号取得 (現代文学)
1999 年 4 月—2005 年 4 月 早稲田大学非常勤講師 (フランス文学)
2000 年 9 月—2005 年 9 月 慶應義塾大学訪問講師 (フランス文学)
2000 年 4 月—2008 年 8 月 日仏会館客員研究員
2006 年 10 月 東京大学准教授

研究対象 フランス文学と絵画、日仏両文化における視覚詩の伝統

主要業績

- (著書) 編著、『詩とイメージ——マラルメ以降のテキストとイメージ』、水声社、2015.6、246p.
共著、『ネイティブがよく使うフランス語会話表現ランキング』(飯田良子との共著)、語研、2015.10、
371p.
- (論文) マリアンヌ・シモン=及川「描写に従って——テオフィル・ゴーチエのルーヴル美術館」新田昌英訳、
『テオフィル・ゴーチエと 19 世紀芸術』澤田肇・吉村和明・ミカエル・デブレ [編]、上智大学
出版、2014、p.380-409.
- Marianne SIMON-OIKAWA, « Les hai-kais de Pierre Albert-Birot : du détour par l'ailleurs à la découverte de soi »,
dans Éric Benoit (dir.), *Transmission et transgression des formes poétiques régulières*, coll. « Modernités »,
n° 37, Université de Bordeaux, 2014, p. 221-226.
- Marianne SIMON-OIKAWA, « Au fil de la description : *Le Musée du Louvre* de Théophile Gautier », *Bulletin de la
Société des amis de Théophile Gautier*, n° 36 (« Théophile Gautier : l'invention médiatique de l'histoire
littéraire »), 2014, p. 207-220.
- Marianne SIMON-OIKAWA, « L'écriture dans le dessin », *Dossier de l'art*, n° 222, octobre 2014, p. 54-55.
- Marianne SIMON-OIKAWA, « Adam, ou l'homme des premières fois : *Les Mémoires d'Adam et les pages d'Ève*
de Pierre Albert-Birot », *Sarrazine*, n° 15 (« Une fois »), octobre 2015, p. 201-206.
- 「ピエール・アルベール=ピロー——詩集に書かれたイメージ」 畠山達訳、『詩とイメージ——マラル
メ以降のテキストとイメージ』 マリアンヌ・シモン=及川 [編]、水声社、2015、p.73-96.
- Marianne SIMON-OIKAWA, « Pierre Garnier et le Japon », dans *Pierre et Ilse Garnier : le monde en poésie*,
catalogue d'exposition à la Bibliothèque d'Amiens Métropole, décembre 2015, n.p. (6 pages).
- Marianne SIMON-OIKAWA, « Du lisible à l'invisible : les images en écriture au Japon », dans *Cacher / coder –
4000 ans d'écritures secrètes*, catalogue d'exposition au Musée Champollion / Les écritures du monde,
Figeac, 2015, p. 38-43.

(翻訳) Nakamura Keiichi, « Le haikai et Pierre Garnier » (中村恵一「俳諧とピエール・ガルニエ」), dans *Pierre et Ilse Garnier : le monde en poésie*, catalogue d'exposition à la Bibliothèque d'Amiens Métropole, décembre 2015, n.p. (1 page).

(学会発表) Marianne SIMON-OIKAWA, « De la Picardie au Japon : espaces de Pierre Garnier », Cercle Aliénor, Brasserie Lipp, Paris, 2015. 3. 14.

Marianne SIMON-OIKAWA, « Idéogrammes spatialistes – Pour une poétique du signe flottant », colloque international « Écritures V », Université Paris Diderot – Paris 7, 2015. 12. 11.

(4) 2014～2015 年度受け入れ外国人研究者

2014 年度

William Marx (パリ第10 大学教授)
Jacques Roubaud (詩人、作家、数学者、日本古典詩の専門家)
Elise Domenach (リヨン高等師範学校准教授)
Fabienne Dumontet (リヨン高等師範学校准教授)
Laurent Jenny (ジュネーヴ大学名誉教授)
Dominique Combe (パリ高等師範学校教授)

2015 年度

Fabien Arribert-Narce (青山学院大学准教授)
Jacqueline Chénieux-Gendron (フランス国立科学研究センター名誉主任研究員)
Antoine Compagnon (コレージュ・ド・フランス教授)
Patrizia Lombardo (ジュネーヴ大学教授)
Bérengère Parmentier (エクス・マルセイユ大学准教授)
Sophie Lesiewicz (ジャック・ドゥーセ文学図書館司書)
Bernard Vouilloux (パリ第4 大学教授)
J. M. G. Le Clézio (2008 年ノーベル文学賞受賞作家)
Jean-Nicolas Illouz (パリ第8 大学教授)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014 年度

「ユイスマンスとジュネ——『さかしま』と『花のノートルダム』——」
「ジョゼフ・ド・メーストルと「反」の思想」
「樹木の手段——フランシス・ボンジュの詩学」
「モンテーニュ『エッセー』における模倣と消化のトポス」
「ピエール・ルイス『アフロディテ』と“美”の観念」
「ブルースト『失われた時を求めて』を読む」
「バルザックの若者たち——特にラスティニャックとリュバンプレについて——」
「ブルトン研究」
「フアーブル『昆虫記』に関する研究」

2015 年度

「『ゴリオ爺さん』にみるバルザックの現実描写の考察——「二面性」論」
「ヴィジョンをつかむ——ユルスナール『世界の迷路』論」
「モーパッサン『イヴェット』における女性の fatalité について」
「ル・クレジオ『砂漠』におけるアイデンティティのあり方」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

秋元陽平「死者の対比列伝——シャトーブリアンの晩年と『ランセの生涯』」(指導教員) 中地義和
伊藤生子「友愛を求めて——アルベール・カミュと南米——」(指導教員) 月村辰雄
田村哲也「ジャン・ジュネ『恋する虜』における「放浪」と「接合」——喪失をめぐる別様の戦略」
(指導教員) 塚本昌則

2015 年度

野村麻梨「非常時と芸術 テオフィル・ゴーティエ『包囲下情景集』について」(指導教員)野崎敏

坂本一馬「『ブヴァールとペキュシェ』における「愚かさ」」(指導教員)野崎敏

山崎百合子「薄暮の詩学——『ランセの生涯』をめぐる主題論的読解の試み」(指導教員)野崎敏

隈元舞「フランス語の名詞化——意味と構文に関する一考察——」(指導教員)塚本昌則

安田百合絵「『対話』の賭金 ——自己のエクリチュールの困難さについて」(指導教員)中地義和

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

大木勲「ジョルジュ・バタイユによる民族誌学、考古学、神秘思想をめぐる考察とファトラジー翻訳——回収と改編、価値観の再検討」

〈主査〉塚本昌則 〈副査〉月村辰雄・中地義和・野崎敏・岩野卓司

岡本倫典「エジプトのランドマーク——ルネ・ゲノンの形而上学」

〈主査〉野崎敏 〈副査〉月村辰雄・中地義和・塚本昌則・鶴岡賀雄

(乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

福田桃子、*La Servante dans l'œuvre de Marcel Proust, approche intertextuelle* (パリ第4大学)

2015 年度

(甲) (乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

畠山香奈、*La faute dans la tragédie française du XVIIème siècle* (ボルドー・モンテーニュ大学)

前之園望、*André Breton et les Grands Transparents : la genèse d'un mythe* (リュミエール・リヨン第2大学)

19 南欧語南欧文学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、94年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業(学部・大学院共通)も年度により開講されてきた。また、2001年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2014～2015年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように4名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 教授 : 長神 悟 (イタリア語史・ロマンス語学)
教授 : 浦 一章 (イタリア13・14世紀文学)
准教授 : Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート) (イタリア15世紀文学)
助教 : 長野 徹 (イタリア近現代文学・イタリア児童文学)

(2) 助教の活動

- 長野 徹
在職期間 1997年10月～現在
研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学
主要業績
(論文)
「イタリアの民話と文学作品に見られる『蛇女』の表象」、『イタリア語イタリア文学』、Vol.7, pp.67-89, 2014.5
(翻訳)
個人訳、ロベルト・ピウミーニ、"La favola dell'orizzonte"、『逃げてゆく水平線』、東宣出版、2014.12
個人訳、ビビ・デュモン・タック、"Soldier bear"、『兵士になったクマ ヴォイテク』、汐文社、2015.8
個人訳、ディーノ・ブツァーティ、"Le storie dipinte"、『絵物語』、東宣出版、2016.3
(他機関での講義等)
非常勤講師、共立女子大学、「基礎イタリア語」、2014.4-2016.3

(3) 外国人教員の活動

- Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート)
在職期間 2011年4月～現在
研究領域 15世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容

主要業績

(著書)

辞典・事典、Lorenzo Amato, Katia Brunetto e Lena Dal Pozzo、『Dizionario Hoepli finlandese』、Hoepli、2015

(論文)

「Le arguzie dei curiali e la Roma dei papi nella prima metà del Quattrocento」、『Roma nel Rinascimento』、pp. 59-80、2014

「Appunti sulla tradizione delle rime di Giovan Battista Strozzi il vecchio: I manoscritti monografici」、『Medioevo e Rinascimento』、XXVIII/n.s.XXV、pp.149-183、2014

(他機関での講義等)

特別講演、Groupe d'Etudes sur les XVIe et XVIIe siècles et la Fondation Barbier-Mueller (Università di Ginevra)、

「Giovan Battista Strozzi The Elder (1504-1571) and the Poetic Madrigal in Cinquecento Italy」、2015.2

セミナー、Dipartimento di Italianistica, Università di Ginevra、「Giovan Battista Strozzi il Vecchio, dai Madrigali alle

Rime. Per una nuova interpretazione del corpus strozziano sulla base dei testimoni manoscritti」、2015.2

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「アルベルト・モラヴィアの作品における自動車の意義」

2015年度

「イタリア語の接続法の研究—フランス語との比較」

「ジャンニ・ロダーリ論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

佐原広基「マンゾーニの言語論について」〈指導教員〉長神悟

2015年度

赤川航紀「レオパルディにおける *grazia* の研究」〈指導教員〉浦一章

藤原聖大「《Il Caffè》にみられる文体と文の構造」〈指導教員〉長神悟

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

古田耕史「ジャコモ・レオパルディ研究——自然観と「無限」の詩学」

〈主査〉浦一章 〈副査〉長神悟・塚本昌則・宮田眞治・日向太郎

倉重克明「ジョヴァンニ・ヴェルガー語りの手法研究—」

〈主査〉浦一章 〈副査〉長神悟・金澤美知子・野崎敏・村松眞理子

(乙)

なし

2015年度

(甲) (乙)

なし

20 英語英米文学

1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品まで幅広い。現在、専任教員は教授2名、准教授3名、外国人客員教授1名、専任講師1名、助教1名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした“英語漬け”の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1~2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhDの学位を取得した者はすでに8名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を35名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	高橋 和久	TAKAHASHI, Kazuhisa	(イギリス文学、2014年度まで)
教授	今西 典子	IMANISHI, Noriko	(英語学)
教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学)
准教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
准教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
専任講師	WILLIAMS, Laurence		(イギリス文学)
助教	稲田 俊一郎	INADA, Shunichiro	(英語学、2014年度まで)
助教	岸 まどか	KISHI, Madoka	(アメリカ文学)

(2) 助教の活動

稲田 俊一郎

論文

“Notes on a Hidden Pronoun Analysis of Circumvention Effects under Sluicing,” *Linguistic Research: Working Papers in English Linguistics* 29, 123-131頁、2014.3

共著、稲田俊一郎・猪熊作巳著、「再帰的場所表現の獲得について」、『実践英文学』6、31-35頁、2015.2

共著、Shunichiro Inada, Sakumi Inokuma. "On the Acquisition of Recursive Locative PPs." *Linguistic Research: working papers in English linguistics* 30, 91-104, 2015.3

学会発表

「『構造の再帰性』に関する構文横断的獲得研究—子どもの日本語における所有句・場所句・関係節の再帰性」、共同発表、日本言語学会第151回大会、名古屋大学東山キャンパス、2015年11月28日

他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「基礎英語II」、2014.4~2015.3

非常勤講師、お茶の水女子大学、「基礎英語II」、2014.4~2015.3

非常勤講師、東京医科歯科大学、「英語講読」、2014.4~2015.3

非常勤講師、東京医科歯科大学、「医学英語演習II」、2014.4~2015.3

岸 まどか

論文

Madoka Kishi, “Topography of Anachronism: Mapping Utopian Potentiality of *Herland*.” *Renyxia* 5, 103-117, 2014

Madoka Kishi, “The Ecstasy of the Martyr’: Lesbianism, Sacrifice, and Morbidity in *The Bostonians*.” *The Henry James Review* 37.1 (2016), 100-116.

学会発表

国際、Madoka Kishi, “Beyond the Autonomy/Relationality Binary: *The Making of Americans*, Ecstasy, and Unmaking of an American.” Modernist Studies Association 16th Annual Conference, Omni William Penn Hotel, Pittsburg, USA, 2014.11.6

国内、岸まどか、「白さ、エロス、自殺：アメリカ進歩主義時代文学と生政治への抵抗」、東大英文学会総会、東京大学山上会館大会議室、2016.3.21

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark : 客員教授

編著書

British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone, co-edited with Tristanne Connolly, Plagrave Macmillan, 2015.

論文

“Basic English Revisited: I. A. Richards’s Legacy in the Japanese English Language Classroom.” (co-written with Masashi Suzuki), *Lit Matters: The Liberlit Journal of Teaching Literature* (2014)

講演・学会発表

国内、Opening Address, *Romantic Connections*, University of Tokyo, 2014.6.13-15

国内、“Le coeur fou Robinsonne a travers les romans: Crusoe's further further adventures in the French Robinsonnades.” *Robinson Crusoe in Asia*, University of Tsukuba, 2014.9.19-21

国内、“Women Who Rode Away: Bird’s *Unbeaten Tracks*, Davidson’s *Tracks*.” *Isabella Bird and the Poetics of Female Travel Writing*, University of Tokyo, 2015.6.26-27

国際、“How does Romanticism Translate? : Ossian and the Forging of National Identity.” *Re-Reading Romanticism*, Melbourne, 2015.7.23-25

Williams Laurence : 専任講師

論文

Laurence Williams, “The Oriental Tale.” *The Wiley-Blackwell Encyclopaedia of British Literature: 1660–1789*, ed. Jack Lynch and Gary Day, 2014.

Laurence Williams, “Navigating the Paths of Eastern Romance: The Arabian Nights in Eighteenth-Century English Descriptions of Constantinople.” *Eighteenth-Century Cultural Intermediaries*, ed. Vanessa Alayrac-Fielding and Ellen R. Welch. Paris: Champion, 277–94, 2015

- Laurence Williams, "Revising the Contact Zone: William Adams, Reception History, and the Opening of Japan, 1600–1860." *New Directions in Travel Writing Studies*, ed. Julia Kuehn and Paul Smethurst. Palgrave Macmillan, 297–312, 2015
- Laurence Williams, "Anglo-Chinese Caresses: Civility, Friendship, and Trade in English Representations of China, 1760–1800." *Journal for Eighteenth-Century Studies* 38, 277–96, 2015
- Laurence Williams, "Jonathan Swift and Kaempfer's History of Japan: The Origins of the Court and Empire of Japan (1727/8)." *Notes and Queries* 63, 79–82, 2016

書評

Review of Peter Kitson's *Forging Romantic China*, in *Studies of Romanticism* 40, 191–95, 2015

講演・学会発表

- 国内、Laurence Williams, "Inventing William Adams: From 'First Englishman in Japan' to 'British Samurai.'" "Research in Progress" Seminar, University of Tokyo, 2014.1
- 国内、Laurence Williams, "Why Study English Literature?: An Introduction to Liberal Arts Research." invited presenter at JSPS "Science Dialogue" program, National Noto Youth Friendship Centre, Ishikawa Prefecture, 2014.8
- 国内、Laurence Williams, "Chained Islands: Japan in English Political Thought of the Restoration and Early Eighteenth Century." *Japan in the Eyes of Others: Visions of Japanese Culture and Society Abroad*, Seikei University, 2015.5
- 国内、Laurence Williams, "Like the Ladies of Europe: Victorian Women Writers on the Lives of Japanese Women, 1840–80." *Isabella Bird and the Poetics of Female Travel Writing*, University of Tokyo, 2015.6
- 国内、Laurence Williams, Speaker in panel session on postgraduate career development, 7th annual Liberlit conference, Tokyo Woman's University, 2016.2
- 国内、Laurence Williams, "Beyond Gulliver: Japan in English Literature of the Long Eighteenth Century," University of Tokyo English Society Annual Conference, 2016.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014 年度

- The Same and Different Points between George Orwell's *1984* and Today's World Especially on Media
(ジョージ・オーウェル著『1984年』と現代社会との異同、特にメディアに関して)
- The Dialogues in the Criticisms of Oscar Wilde: Their Style and Function
(オスカー・ワイルドの批評における対話—そのスタイルと機能)
- Juliet's Role in *Romeo and Juliet*
(『ロミオとジュリエット』におけるジュリエットの役割)
- Gatsby's Unachievable Dream: Social Stratification in *The Great Gatsby*
(ギャツビーの叶えられない夢: 『グレート・ギャツビー』における社会階層)
- The Sense of Ending in *Bleak House*
(『荒涼館』における終わりの感覚)
- The Relation between the Speaker and the Listener in "Song of Myself"
(「ぼく自身のうた」における話し手と聞き手の関係性)
- A Study of Egoism and Its Contribution to the Public in Salinger's *Framy and Zooey*
(サリンジャーの『フラニーとズーイ』におけるエゴと公共への奉仕の研究)
- Dick Diver's Defeat and Self-consciousness in *Tender Is The Night*.
(『夜はやさし』におけるディック・ダイヴァーの敗北と自己意識)
- Inevitability in Gothic Romance
(ゴシックロマンスにおける不可避)
- A Young Lady's Growth in *Emma*: From False towards True Englishness
(『エマ』における若い婦人の成長—偽りから真のイングリッシュネスへ)
- A Study of Contemporary Vampire Movies: A Study of *Twilight*
(現代の吸血鬼映画研究)
- The Function of the Voice in W.B. Yeats's Poetry
(イエイツの詩における声の機能)

The Death and the Women in Hemingway's Nick Adams Stories

(ニック・アダムズ物語における女性と死)

Talking about Death: Metaphors and Point of View in Emily Dickinson's Poetry

(死について—エミリー・ディキンソンの詩作品にみられる比喩と視点)

The Father-Son Conflict in *The Great Gatsby*

(『グレート・ギャツビー』における父と息子の葛藤)

A Study of Iago's Last Lines and His Silence in *Othello*

(『オセロー』におけるイアゴの最後の台詞と沈黙の考究)

2015 年度

The Relationship between Marriage and Grotesque in *Winesburg, Ohio*

(『ワインズバーグ・オハイオ』における結婚の有無とグロテスクの関係性)

"This is my letter to the World": Letter Poems of Emily Dickinson

(「これは世界に宛てた私の手紙」—エミリー・ディキンソンの手紙詩)

The Function of the Taboos in George Orwell's *1984*

(『1984』におけるタブー性の役割)

E.M.Forster's Attempt to His New Theory: A Study of *Maurice*

(新しい小説観への E.M.フォースターの試み)

Joe Christmas's Southern Tragedy in *Light in August*

(『八月の光』におけるジョー・クリスマス南部悲劇)

The Transformation of the Characters in Mary Shelley's *Frankenstein: Things Missing from Paradise Lost*

(シュリーの『フランケンシュタイン』におけるキャラクターの変化—『失楽園』から失われたもの)

Fear toward Goblins: A Study of George MacDonald's *The Princess and the Goblin*

(『王女とゴブリン』における、ゴブリンによる未来と今の恐怖)

Is It O.K. to Be a Schlemihl? A study of Benny Prifare in *V.*

(シュレミールでいいの? 『V.』におけるベニー・プロフェインについて)

Self-discovery and Loneliness in Toni Morrison's *Sula*: Sula as Nel's Comrade and Double

(トニ・モリスン『スーラ』における自己発見と孤独—ネルの同志・ダブルとしてのスーラ)

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

鈴木孫和 Virginia Woolf's Experiments in Biography: A Study of The New Biography and *Orlando: A Biography*

(指導教員) 高橋和久

伊藤祐太 Ishmael's Irony and Ahab's Materiality: Subjectivity in *Moby-Dick* (指導教員) 諏訪部浩一

小田博宗 The Structures and Derivations of Temporal Adverbial Clauses in Japanese (指導教員) 渡邊明

騎馬秀太 Wordsworth's Mild Surprise: A Philosophical Inquiry from Hegelian Perspective (指導教員) 阿部公彦

日浦加穂 Healing the Unconsoled: Unspeakable Memories in Kazuo Ishiguro's Fiction (指導教員) 高橋和久

本田祐一 A Study of Graham Greene's *The Quiet American*: Fowler's Awakening (指導教員) 高橋和久

2015 年度

齋藤昌哉 On "Pictures from Brueghel": Williams the Viewer, Williams the Speaker (指導教員) 阿部公彦

馬場理絵 Charlotte Bronte's *Villette*: Feminine Desire and Writing in Heretic Narrative (指導教員) 阿部公彦

今関裕太 *Ulysses* and Writing Media (指導教員) 阿部公彦

小田島創志 Representation of Woman in Harold Pinter's Plays (指導教員) 大橋洋一

渡辺優理恵 Thomas Hardy and Sympathy: Narrative Perspective in *The Mayor of Casterbridge*, *Tess of D'Urbervilles* and *Jude the Obscure* (指導教員) 阿部公彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

兼武道子「Rhetoric as a Critique of Grammatology: Orality and Writing in Hugh Blair's Rhetorical Theory (グラマトロジー批判としての修辞学—ヒュー・ブレアの修辞学理論における声と文字)」

(主査) 高橋和久 (副査) 大橋洋一・阿部公彦・スティーヴン ヘドリー クラーク・富士川義之

中戸照恵「The Acquisition of the Body-part Noun Object Construction in English and Japanese: From the Viewpoints of Economy Principles and Parametric Variation in Nominal Phrases (身体部位名詞目的語構文の獲得について—経済性の原理と名詞句における言語間変異の観点から)」

〈主査〉今西典子 〈副査〉渡邊明・伊藤たかね・長谷川欣佑・佐野哲也

(乙)

なし

2015 年度

(甲) (乙)

なし

2 1 ドイツ語ドイツ文学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

(2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

[2014 年度]

「19 世紀のドイツ短編物語を読む」

「(語り)を読む」

「ヴェルター・ベンヤミンの認識論と歴史哲学」

[2015 年度]

「89 年以降のドイツ文学におけるクロノトポス (1)、(2)」

「フリードリヒ・シラー研究」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキアムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

(3) 研究室としての活動

研究論文誌として年 2 号発行している『詩・言語』は、2014 年度には 80 号・81 号が、2015 年度には 82 号・83 号が発行された。

科学研究費補助金関係では、「情動と技術の人間学的考察（ドイツ文学の場合）」（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）は、2013 年度から 3 年間の予定で交付を受け、2015 年で終了した。「パウル・ツェラーンの抒情詩 — 人間学と自然史のはざまに」（基盤研究（C）、研究代表者平野嘉彦名誉教授）は、2015 年度から 3 年間の予定で交付を受け、継続中である。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。2013 年度には、宮田眞治がドイツ文化ゼミナール報告論文集編集委員長をつとめた。さらに、宮田眞治と大宮勘一郎は 2013 年度からの理事職（任期 2 年）をつとめ、さらにまた、大宮勘一郎は 2015 年度より学会長の任にある。また宮田眞治は 2008 年度より日本シェリング協会理事をつとめている。

(4) 国際交流の状況

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2014 年度

Peter Simon Altmann 氏（作家）、自作朗読：Aus der Reise in Japan (2014 年 4 月 28 日)

Alexander Honold 教授 (Universität Basel)、講演：„Wilhelm Meisters theatralische Sendung“ und die Entwicklung des Literaturtheaters im späten 18. Jahrhundert (2014 年 6 月 10 日)

2015 年度

Gigi Adair 博士 (Freie Universität Berlin)：研究員として滞在（受入教員：宮田眞治）、研究題目：Transpacific: Middle European Observations of a New Center (1900-1945)、滞在期間：2015 年 4 月 1 日～7 月 31 日

講演：W. Somerset Maugham's China Works: Colonial Disorientation in a New Pacific (2015 年 7 月 9 日)

Elfi Vomberg 氏 (Universität Bayreuth)：JSPS 招聘研究員として滞在、研究題目：Wagnervereine heute、滞在期間：2015 年 10 月 1 日～10 月 31 日

講演：Wagnervereine heute (2015 年 10 月 13 日)

Kevin Vennemann 博士 (New York University)：研究員として滞在（受入教員：大宮勘一郎）、研究題目：Böckmann to Raymond, Conder to Taut and Gropius — the Early Western Gaze on Japanese Architecture、滞在期間：2016 年 1 月 1 日～6 月 25 日

大宮勘一郎：Freie Universität Berlin 訪問教授 (2015 年 7 月 24 日～8 月 22 日)

また大学院の学生の多くがドイツ、オーストリア、スイスへ留学している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授：松浦 純 中近世ドイツ語ドイツ文学 (2015年3月まで)

教授：重藤 実 ドイツ語学

教授：大宮勘一郎 近現代ドイツ文学

准教授：宮田 眞治 近現代ドイツ文学

准教授：Keppler-Tasaki Stefan 近現代ドイツ文学

(2) 外国人教員の活動

准教授 Keppler-Tasaki Stefan

在職期間 2012年10月1日～現在

主要業績

(著書)

編著、Hrsg. von Stefan Keppler-Tasaki, Wolf Gerhart Schmidt、『Zwischen Gattungsdisziplin und Gesamtkunstwerk Literarische Intermedialität 1815-1848』、DeGruyter、2015.3

編著、Ed. by Keppler-Tasaki Stefan, Mathias Herweg、『Das Mittelalter des Historismus. Formen und Funktion in Literatur und Kunst, Film und Technik. Rezeptionskulturen in Literatur und Mediengeschichte, Bd. 3』、Königshausen & Neumann, 2015.4

(論文)

「Schriftsteller in deutschen und internationalen Wochenschauen. Zu Filmauftritten von Brecht, Kästner, Zuckmayer und anderen.」、『Neue Beiträge zur Germanistik』、Band. 13、p. 33-48.、2014

「Thomas Manns Auftritte in deutschen und internationalen Wochenschauen. Zur Filmkarriere eines Schriftstellers.」、『Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte』、Jg. 88, Heft 4.、p. 551-574.、2014

「Propaganda für den Pazifikkrieg. Döblins Filmerzählung ‘Der Ausreißer’ / ‘The runaway’ .」、『Massen und Medien bei Alfred Döblin. Internationales Alfred-Döblin Kolloquium Berlin 2011.』、p. 363-409.、2014.2

「Crisis Discourse and Art Theory: Richard Wagner's Legacy in Films by Veith von Fürstenberg and Kevin Reynolds.」、『The Medieval Motion Picture: Filming the Popular Past.』、107-128 頁、2014.3

「Film als Zen’ . Doris Dörrie in Japan.」、『In: Filmkonzepte 35』、36、p. 42-55.、2014.9

「Panegyrik zwischen Tradition und Faschismus. Hans Heinrich Ehrler als Staatsdichter 1912-1951.」、『Das literarische Lob. Formen und Funktionen, Typen und Traditionen panegyrischer Texte. Ed. by Norbert Franz.』、p. 359-384.、2014.10

「“An einen Juden” - “An einen Deutschen” . Jüdische und deutsche Identität im Dialog zwischen Jacob Picard und Hans Heinrich Ehrler.」、『Von den Rändern zur Moderne. Festschrift für Peter Sprengel zum 65. Geburtstag.』、p.431-456.、2014.10

「Das Mittelalter des Historismus. Umriss einer Rezeptionskultur mit Rückblicken auf den Humanismus.」、『Das Mittelalter des Historismus. Formen und Funktionen in Literatur und Kunst, Film und Technik.』、p. 9-39.、2015

「Wochenschauen, Dokumentarfilme, Cameos. Europäische Schriftsteller vor Kamera und Mikrophon (1910-1960).」、『Germanisch-Romanische Monatsschrift』、Jg. 65, Heft 2.、p.165-184.、2015

「Opern-Debatte. Zum Verhältnis von Literatur und Libretto bei Wagner und seinen Zeitgenossen bis 1848.」、『Zwischen Gattungsdisziplin und Gesamtkunstwerk. Literarische Intermedialität 1815-1848.』、p. 505-534.頁、2015.3

「Filmskripte (1920-1941) und Berlin-Alexanderplatz (1931).」、『Döblin-Handbuch: Leben - Werk - Wirkung. 』、2016.3

「Schicksalsreise. Bericht und Bekenntnis.」、『Döblin-Handbuch: Leben - Werk - Wirkung.』、2016.3

「Von der “Festung” zum “Hub”. Der Umbau des japanischen Hochschulsystems.」、『Forschung & Lehre』、4/16(2016)、p. 312-314.、2016.4

(書評)

Thorsten Valk、『Der junge Goethe. Epoche - Werk - Wirkung.』、C.H.Beck、『Arbitrium』、32(2014)、p. 342-347.、2016 (学会発表)

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「„Wenn sich Abgrunds Geister regen ‘. Hans Heinrich Ehrler im Nationalsozialismus “」、„Wenn sich Abgrunds Geister regen ‘. Hans Heinrich Ehrler im Nationalsozialismus “、Deutschordensmuseum Bad Mergentheim, Germany、2014.3.12

国内、Stefan Keppler-Tasaki、「Japan-kritische und anti-japanische Propaganda in der deutschen Exilliteratur」、Pazifikismus. Die diskursive Konstruktion des Stillen Ozeans、Rikkyo University, Tokyo、2014.5.28

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「David Peace: An Introduction in his Work」、Asien-Treffen der Studienstiftung、Keio University, Tokyo、2014.11.28

国内、Stefan Keppler-Tasaki、「Transpacifica: Outline of a Research Project at the Freie Universität Berlin and the University of Tokyo」、Interdisciplinary Lecture Series、The University of Tokyo, Faculty of Letters、2015.7.9

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Der Pazifik in den Beziehungen zwischen Japan, China und den USA」、Poetiken des Pazifiks、Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Germany、2015.7.22

国内、Stefan Keppler-Tasaki、「Zauber und Zeit bei Thomas Mann」、37. Interuni-Seminar、Yamanakako, Japan、2015.8.5

国際、Stefan Keppler-Tasaki、「Transpacifica Projektvorstellung」、Mittagsforum der Friedrich Schlegel Graduiertenschule、Berlin, Germany、2015.11.3

(監修)

Hijiyama-Kirschner, Irmela / Keppler-Tasaki, Stefan / Küpper, Joachim、「Mishima Yukios „Zur Verteidigung unserer Kultur“ (Bunka boeiron) Ein japanischer Identitätsdiskurs im internationalen Kontext」、2014.9

Hijiyama-Kirschner, Irmela / Keppler-Tasaki, Stefan / Küpper, Joachim、「Poesiefilm. Lyrik im audiovisuellen Medium」、2014.10

Hijiyama-Kirschner, Irmela / Keppler-Tasaki, Stefan / Küpper, Joachim、「Die Vertextung der Welt Forschungsreisen als Literatur bei Georg Forster, Alexander von Humboldt und Adelbert von Chamisso」、2014.11

Hijiyama-Kirschner, Irmela / Keppler-Tasaki, Stefan / Küpper, Joachim、「Artful Immorality-Variants of Cynicism Machiavelli, Gracián, Diderot, Nietzsche」、2015.9

Hijiyama-Kirschner, Irmela / Keppler-Tasaki, Stefan / Küpper, Joachim、「Horazrezeption in der Renaissance Strategien der Horazkommentierung bei Cristoforo Landino und Denis Lambin」、2015.9

(マスコミ)

「Bildern und versklaven. “Die Filmtheorie Kracauers” , mit Prof. Dr. Stefan Keppler-Tasaki an der Universität Tokio,」、『Die Zeit, Nr. 31/2015, 』、2015.7.30

(受賞)

国際、Dr. Stefan Keppler-Tasaki、Einstein Visiting Fellowship、Einstein Foundation Berlin、2015.1.1

(4) 内地研修員・外国人研究員

外国人研究員

Elena Giannoulis 教授 (Freie Universität Berlin)、研究題目: Emotional Management in Japanese Literature and Culture (2016年3月1日～2016年4月3日)、〈世話教員〉大宮勘一郎

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「『ファウストゥス博士』におけるトーマス・マンの政治と文学」

「存在の言語と図像的な表現—ホフマンスタールの詩学とセザンヌの絵画」

「グリム童話における累積譚の特徴」

「トーマス・マン『ヨゼフとその兄弟たち』—人間の神話化、あるいは物語化」

「アンナ・ゼーガース『死者はいつまでも若い』における、ナチズムと Kommunismus、反ナチズムの相克—ベルリン周辺の一農村を中心に—」

「W.G.ゼーバルトの『アウステルリッツ』における写真の詩学」

2015年度

「強者の極致としての「超人」」

「ドイツ自然詩の系譜における Wolfgang Bächler」

「Werner Herzog の作品における動物のイメージの変遷の分析 “Auch Zwerge haben klein angefangen” “stroszek” “My son, My son, What Hare ye Done?” におけるニワトリのイメージを題材として」

(2) 修士論文執筆・題目一覧

2014年度

正月瑛「フランツ・カフカの「語り」について」〈指導教員〉大宮勘一郎

高田成平「ドイツ語否定詞の研究」〈指導教員〉重藤実

瀧下周平「non clara sed distincta—指示代名詞 jener の漠然性と明瞭性」〈指導教員〉重藤実

2015年度

木山翔太郎「トーマス・マンにおけるイロニー概念と感情のアナーキー」〈指導教員〉宮田眞治

菅谷優「決断」からの脱出 初期ベンヤミンの一モチーフについて」〈指導教員〉大宮勘一郎
須藤駿介「毒と短剣—レッシング『ミス・サラ・ Sampson』におけるサラの死について—」
〈指導教員〉宮田眞治

深澤一輝「方法としての「拡散」—S・クラカウアーにおけるその射程—」〈指導教員〉大宮勘一郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲) (乙)

なし

2015年度

(甲)

なし

(乙)

内村博信「歴史哲学としての〈批判—批評〉理論—初期ヴァルター・ベンヤミンの思想形成—」

〈主査〉大宮勘一郎 〈副査〉松浦純・宮田眞治・久保哲司・三宅晶子

2 2 スラヴ語スラヴ文学

1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年（昭和47年）、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし、日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

現在の教員数は教授2名である。ほかに他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、スラヴ語学、スラヴ語史、ロシア文学（詩、小説、演劇、批評）、また旧ユーゴ圏の言語文化、ポーランド、チェコ、ブルガリアなどスラヴ語スラヴ文学に関する研究・教育が行われている。今後、スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し、国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在、学部学生4名、大学院修士課程院生3名、博士課程院生8名が在籍している。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2014年度と2015年度にはそれぞれ第30号と第31号が刊行された。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉学成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のスラヴ学、ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、セルビアのベオグラード大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

金沢美知子	ロシア文学・ロシア文化
沼野充義	ロシア・ポーランド文学
三谷恵子	スラヴ語学

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「ドストエフスキー『貧しき人々』の形成と小説としての「よそおい」

2015年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

MAKHNEVADARIA「ウラジーミル・マヤコフスキーの長編詩『ズボンをはいた雲』の研究—その詩学と翻訳の問題—」（指導教員）沼野充義

2015年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

なし

(乙)

番場俊「ドストエフスキーと小説の問い」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉金澤美知子・浦雅春・桑野隆・望月哲男

2015 年度

(甲) (乙)

なし

2 3 現代文芸論

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に2007年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア・中東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊のペースで発行。2015年3月には第6号「特集 ロシア・中東欧」を発行した）。

非常勤講師による授業も、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。またイディッシュ語、リトアニア語、バスク語など、他では学ぶことが難しいマイナー言語の授業も積極的に開講していることが、現文の特徴になっている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3~4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はこれまでの実績を見ると、ロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、大学院生相互の国際的な交流はきわめて盛んである。

(3) 研究室としての活動・国際交流活動

現代文芸論研究室が中心となってスタートさせた科研費研究「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」（基盤A、平成25年度~29年度の予定）によって、旧ソ連・中東欧地域の文学・文化に新たな現代的視点からアプローチする共同研究プロジェクトに取り組んでいる。

研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。

2014年度：

連続映画上映会「シネマ・ポスト・ユーゴ2014 旧ユーゴスラヴィア諸国社会の周辺」（日時：2014年6月6日、6月13日、6月27日、主催：現代文芸論研究室、ユーゴ映画上映委員会、協力：リュブリャナ大学外国語としてのスロヴェニア語センター、スロヴェニア・フィルムセンター、後援：在日スロヴェニア共和国大使館、在日ボスニア・ヘルツェゴヴィナ大使館、在日セルビア共和国大使館、在日マケドニア共和国大使館）、特別講義「ポーランドのホロコースト記念の現在形」（2014年7月7日（月）、講師：加藤有子（名古屋外国語大学）、主催：現代文芸論研究室）、特別講義「トルストイの神—ユダヤ=キリスト教と東洋の伝統を背景にした後期トルストイの宗教哲学における神の概念—」（2014年7月18日（金）、講師：ヴラジミール・パペルヌイ博士（ハイファ大学（イスラエル）ヘブライ・比較文学科）、共催：スラヴ語スラヴ文学研究室・現代文芸論研究室）、特別講義+映画上映会「満州—衝突する記憶」（2014年7月30日（水）、講師：トーマス・ラーフゼン博士（トロント大学）、司会：亀田真澄（東京大学）、コメンテーター：沼野充義（東京大学）、主催：現代文芸論研究室）、朗読とトーク「ナタシャ・ゲルケ氏を迎えて 現代の寓話—体制転換後のポーランド語文学—」（2014年9月26日（金）、特別ゲスト：ナタシャ・ゲルケ（作家）、イントロダクション・司会：井上暁子（熊本大学）通訳：久山宏一（東京外国語大学） 主催：科研費「東欧文学における〈東〉のイメージに関する研究」（代表者 阿部賢一）、共催：科研費「越境と変容—グローバル化時代に

おけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」(代表者 沼野充義)、現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室)、講演会「今に生きるオクタビオ・パス」(2014年10月28日(火)、講師:アルマンド・ゴンサーレス＝トーレス(詩人・エッセイスト)、フリアン・ヘルベルト(詩人・小説家)、主催:現代文芸論研究室)、講演会「ガリツィアの文化状況をめぐって 歴史の劇場としての美術館—ウクライナ国立リヴィウ美術館にみる20世紀のガリツィア—」(2014年11月22日(土)、講師:ヴィタ・サク(ウクライナ国立リヴィウ美術館)、司会・イントロダクション:加藤有子(名古屋外国語大学)、主催 科研費若手研究(B)「大戦間期ガリツィアのポーランド系ユダヤ人作家、画家の芸術思想的系譜とモダニティ」(加藤有子・名古屋外国語大学) 共催:東京外国語大学総合文化研究所、科研費基盤(A)「ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究」(亀山郁夫代表・名古屋外国語大学)、特別講義「ヴァイナモイネン是谁なの—フィンランドの民族叙事詩『カレワラ(Kalevala)』解釈の変遷—」(2014年12月22日(月)、講師:石野裕子(常磐短期大学キャリア教養学科・准教授)、主催:現代文芸論研究室 共催:科研費「越境と変容—スラヴ・ユーラシア研究の新たなパラダイムを求めて」)

2015年度

シンポジウム「池澤夏樹=個人編集 日本文学全集 第13巻『樋口一葉 たけくらべ/夏目漱石/森鷗外』刊行記念 東京大学で一葉・漱石・鷗外を読む」(2015年2月22日(日)、講師:池澤夏樹(作家・詩人)、川上未映子(作家・詩人)、紅野謙介(日本大学)、沼野充義(東京大学)、カタジーナ・ソンネンベルク(ポーランド国立ヤギェロン大学文学部日文学科)、主催:現代文芸論研究室、共催:河出書房新社、「知られざるロシア映画 上映とトーク 第一次世界大戦と映画」(2015年3月24日(火)、講師:マクシム・パヴロフ(元モスクワ・映画博物館副館長、現国際エイゼンシュテイン・センター財団キュレーター)、コーディネーター・司会:楢岡求美(神戸大学)、演目:サイレント・アニメ『ベルギーの百合』スタレーヴィチ監督、サイレント映画『スペードのクイーン』プロタザーノフ監督※旧題『スペードの女王』(プーシキン原作)、共催:東京大学文学部現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室、国際交流基金 協力:神戸大学大学院国際文化学研究所 研究プロジェクト「映像におけるタブーと美の相克」)、特別講演「ボルヘスの記憶」(2015年6月18日(木) 講師:マリア・コダマ(ボルヘス財団代表) 主催:現代文芸論研究室)、映画上映「シネマ・ポスト・ユーゴ2015」(2015年6月19日(金)、解説・討論:亀田真澄(東京大学)、司会:平野共余子(明治学院大学)、演目:『三つの窓と首吊り』(2014年、イサ・チョシヤ監督)、主催:ユーゴ映画上映委員会、学校法人城西大学・中欧研究所、現代文芸論研究室、筑波大学人文社会国際比較研究機構、協力:リュブリャナ大学外国語としてのスロヴェニア語センター、スロヴェニア・フィルムセンター、コソヴォ映画センター、ミルチョ・マンチェフスキー、後援:在日スロヴェニア共和国大使館、在日マケドニア共和国大使館、在日コソヴォ共和国大使館、国際学会「第9回国際中欧・東欧研究協議会幕張世界大会」(2015年8月3日(月)~8月8日(土)、場所:(8月3日)幕張メッセ、(8月4日~8日)神田外語大学、主催:国際中欧・東欧研究協議会(ICCEES)、日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)、日本学術会議 ※現代文芸論研究室は組織委員会事務局として準備の中心的役割を果たした)、映画上映とシンポジウム「西成彦編『ディブブック/ブルグント公女イヴォナ』(未知谷)刊行記念『ディブブック』—記録映画上映とシンポジウム」(2016年2月6日(土)、講演者:ツヴィカ・セルペル(テル・アヴィヴ大学教授)、パネリスト:鴻英良(演劇批評家)、西成彦(立命館大学)、村井華代(共立女子大学)、赤尾光春(大阪大学)、司会:沼野充義(東京大学)、主催:東京大学文学部現代文芸論研究室、日本学術振興会(JSPS)・科学研究費・基盤研究(C)「比較植民地文学研究の新展開—「語圏」概念の有効性の検証」(研究代表者:西成彦))、シンポジウム「10代から出会う翻訳文学案内<新・世界文学入門>沼野教授と読む世界の日本、日本の世界 世界文学村と愉快的仲間たち」(2016年2月28日(日)、パネリスト:柳原孝敦(東京大学)、阿部賢一(立教大学)、亀田真澄(東京大学)、奈倉有里(東京大学大学院人文社会系研究科)、ライアン・モリソン(名古屋外国語大学)、ヴィヤチェスラフ・スロヴェイ、邵丹(東京大学大学院人文社会系研究科、以下同様)、鄭重、ウッセン・ボタゴズ、ソン・ヘジョン、エルジュベタ・コロナ、主催:現代文芸論研究室、協力:光文社)

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教授

教授:沼野充義(ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ)

准教授:柳原孝敦(ラテンアメリカ文学・芸術、広域スペイン語圏文学)

(2) 助教の活動

亀田真澄

在職期間 2014年4月～2017年3月

研究領域 ロシア東欧文化、表象文化論

主要業績

論文 Masumi Kameda “Yugoslav Reproductions of Heroes: Making National Icons through Photography” *Балканские чтения 13 «Балканский тезаурус: Начало»*, (M., Институт славяноведения РАН, C.242-248

国際学会(口頭報告) Masumi Kameda, “Soviet Cosmovision: First Live Broadcasts from Outer Space” ASEEEES, 47th Annual Convention 2015年11月

国際学会(口頭報告) Masumi Kameda, “Live Images of Cosmonauts: Soviet Television Broadcasts of Spaceflights, 1961-1965” The Ninth World Congress of ICCEES 2015年8月

国際学会(口頭報告) Masumi Kameda, “Nation-Building Cult in Photography: Iconography of Heroes in Soviet Union and Yugoslavia” Belgrade University 2015年3月

国際学会(口頭報告) Masumi Kameda, “Representation of the Folk in 1950s Yugoslav Propaganda: A Photo Series Issued by the Publishing House ‘Yugoslavia’” ASEEEES, 45th Annual Convention 2014年11月

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

ベアタ・クビャク＝ホ・チ (Beata Kubiak Ho-chi)、ワルシャワ大学准教授。日本文学。研究題目「日本文化・文学(特に現代女性作家)における動物のイメージ」滞在費用の負担: ワルシャワ大学高島記念基金、2014年9月

バルトシュ・T・ヴォイチェホフスキ (Bartosz T. Wojciechowski)、ヤギェロン大学助教授。言語学、日本語学。研究題目「日本人の言語行動に現れた民族精神——コミュニケーションの語用論の包括的記述」滞在費用の負担: 国際交流基金(日本研究フェローシップ)、2014年10月～2015年9月

カタジナ・ソンネンベルク (Katarzyna Sonnenberg)、ヤギェロン大学助教授。日本文学。2015年2月。研究題目「樋口一葉および高村光太郎研究」滞在費用の負担: 科研費基盤(A)25243002、2015年2月

ユン・セラ (Yoon Sacra)、蔚山(ウルサン)国立科学技術大学校助教授、ロシア文学。研究題目「ドストエフスキーの長編小説とその映画化」滞在費用の負担: 蔚山国立科学技術大学校(サバティカル)、2015年3月～2016年2月
ヤロスワフ・ペトロフ (Jaroslaw Pietrow) ワルシャワ大学准教授。言語学、日本語学。研究題目「シンタックスから見た日本語の形式名詞の問題」滞在費用の負担: ワルシャワ大学、2015年7月～8月

ロムアルド・フシチャ (Romuald Huszcza)、ワルシャワ大学教授。言語学、日本・朝鮮語学。研究題目「日本語における文法化の問題」滞在費用の負担: ワルシャワ大学、2015年7月～8月

許 若文 (Xu Ruowen)、北京大学大学院博士課程。比較文学、英米文学・日本文学。研究題目「大江健三郎における地形学および空間学」滞在費用の負担: 国際交流基金(日本研究フェロー)、2015年9月～2016年5月

エレナ・ヤヌリス (Elena Giannoulis)、ベルリン自由大学教授。日本文学・文化。研究題目「最近の日本文学における感傷性の新たな形」滞在費用の負担: ベルリン自由大学、2015年9月～10月

エヴァ・パワシュールトコフスカ (Ewa Palasz-Rutkowska)、ワルシャワ大学教授。日本近代史、日本・ポーランド関係。研究題目「20世紀の60年代から90年代にかけてのポーランド・日本関係史」ワルシャワ大学日文学科高島記念基金による来日、2015年9月～10月

ツヴィカ・セルペル (Zvika Serper)、テルアビブ大学芸術学部長・教授。日本演劇。研究題目「日本の三つの伝統演劇(能・狂言・歌舞伎)の動作における共通要素の発展」滞在費用の負担: イスラエル国立科学基金、2016年2月

人文社会系研究科研究員

竹内 恵子、研究課題「20世紀英語圏における亡命ロシア文学の諸相と展開」2010年4月～2015年3月

平野 恵美子、研究課題「革命前のロシア帝室劇場とソ連時代のバレエに関する研究」2011年10月～2016年3月

古宮 路子、研究課題「Yu.オレーシャと1920年代のロシア文学」2014年4月～2015年3月

日本学術振興会特別研究員

小久保 真理江 (PD)、研究課題「ファシズム政権下のイタリアにおけるアメリカ文化の受容と影響」2013年4月～2016年3月

田中 まさき(RPD)、研究課題「ソヴィエト文化における「大衆的なもの」と「ハイカルチャー」の境界」2014年1月～2016年12月

田中 壮泰 (PD)、研究課題「戦間期ポーランド東部国境地域の比較文学研究」2015年4月～2018年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「ヴィトルド・ゴンブローヴィッチの「フェルディドゥルケ」に表れる未成年の二面性について
- 「印象批評—文学における批評と価値について—」
- 「The World in the Eyes:A Study on Mervyn Peake's Titus Books (目の中の世界:マーヴィン・ピークの〈タイタス書〉研究)」
- 「『悪童日記』における「ぼくら」の語りと嘘
- 「世界の末子成功譚の比較と現在」
- 「映画の音を読む マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』の音響分析」
- 「「3.11」以降のフィクション」
- 「村上春樹の小説における迷宮の系譜」
- 「ナルシシズム、死、幸福—クンデラ『存在の耐えられない軽さ』におけるキッチュの考察」
- 「石井桃子の翻訳—「くまのプーさん」を中心に—」
- 「Bary Yourgrau と Kelly Link —従来の児童文学との比較から」
- 「On Mody-Dick Race, Politics and Eroticism (Mody-Dick について 人種、政治、性愛)」
- 「ミラン・クンデラ「存在の耐えがたい軽さ」の研究—作品世界に見る欲望の現象学—」

2015年度

- 「ドラマ『カラマーゾフの兄弟』に見る人物像」
- 「チェーホフ作品における環境破壊の捉え方」
- 「吉本ばななとアン・タイラーの家族観」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- 河岸唱平「「真理」をめぐる文学的实践:チャペック諸作品の通時的論考」(指導教員) 沼野充義
- 孫恵貞「循環する感覚の文学 多和田葉子における「ことば」と「声」」(指導教員) 沼野充義
- 福間恵「Where Gossip Turns into Art: On the Works of Alice Munro」(指導教員) 沼野充義
- 三宅由夏「〈伝的〉まなざしの交わる場所—ジャメイカ・キンケイド『川底に』論」(指導教員) 沼野充義
- USSEN BOTAGOZ「太宰治とアントン・チェーホフ:時代と国境を超えた繋がり」(指導教員) 沼野充義

2015年度

- 永森和子「探偵小説とモダニズム—谷崎潤一郎・芥川龍之介・佐藤春夫の作品分析」(指導教員) 沼野充義
- 稲富優起「巖谷小波の翻訳・翻案と「お伽噺」の成立」(指導教員) 沼野充義
- 窪木竜也「ラフカディオ・ハーン『怪談』における異種混交性」(指導教員) 沼野充義
- 左山晶大「Thinking with Footnotes An Examination of El Beso de la Mujer Arana」(指導教員) 柳原孝敦
- 須藤輝彦「ミラン・クンデラと偶然性—『存在の耐えられない軽さ』を読む—」(指導教員) 沼野充義
- 阿佐遼平「『婚礼』と“ポーランド人”の民族性~エスニックな感情の源泉と行方~」(指導教員) 沼野充義
- 木原慎子「ポーランド・ロマン主義における「バラードマニア」—浪漫性とバラードをめぐる議論を通して」(指導教員) 沼野充義
- 五月女颯「イリア・チャウチャワゼの「グルジア」」(指導教員) 沼野充義
- 杉浦清人「世界文学論と「ワールド・フィクション」—ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』を題材として—」(指導教員) 沼野充義

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

- (甲) (乙)
- なし

2015年度

- (甲) (乙)
- なし

2 4 西洋史学

1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は 1887 年に史学科として発足した後、1919 年に西洋史学科として独立、講座の増設や制度の改変を経て、現在の専修課程に至っている。おもにヨーロッパ史に関する研究および教育に従事している。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2014 年度には教授 4 名、准教授 2 名、助教 1 名、2015 年度には教授 3 名、准教授 2 名、助教 1 名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教員 2 名から、学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2014 年度、2015 年度は 3 名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ定数 25 名程度の進学者を迎え、在籍学生数は 2014 年度 72 名、2015 年度 58 名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程 3 名程度、修士課程 5 名程度の入進学者を迎えており、在籍者は 2014 年度 30 名、2015 年度 37 名である。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、さらに異文化接触や公共圏の問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。

また学会活動への参与も精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録 IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録 IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集協力を研究室として引き受けている。さらに各教員は、自ら海外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、海外の研究者と連携して、国内外で国際会議や講演会を定期的に開催し、その成果を邦語（翻訳）や欧語で公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

深澤克己	教授	近代フランス史（2015 年 3 月まで）
姫岡とし子	教授	近現代ドイツ史（2016 年 3 月まで）
高山博	教授	西洋中世史
橋場弦	教授	古代ギリシア史
勝田俊輔	准教授	近代アイルランド史・近代ブリテン世界史
池田嘉郎	准教授	近現代ロシア史

(2) 助教の活動

藤崎衛 1975 年 8 月 18 日生

在職期間 2012 年 10 月 1 日～2016 年 3 月 31 日

研究領域 西洋中世史

業績

（著書） 共著、加藤磨珠枝、藤崎衛、ほか、『教皇庁と美術』、竹林舎、2015.9

（論文） 藤崎衛、「中世カトリック世界の重層的アイデンティティ—12・13 世紀の教会会議言説の分析—」、『歴史学研究』、937、171-180 頁、2015.10

- (書評) Federico II: la condanna della memoria. Metamorfosi di un mito, 『Fulvio Delle Donne』、Viella, 『西洋中世研究』、6、224 頁、2014.12
- (学会発表) 国内、藤崎衛、「教皇使節と教皇のペルソナ」、第 64 回日本西洋史学会大会 シンポジウム「回路としての教皇座—13 世紀ヨーロッパにおける教皇の統治」、2014.6.1
- 国内、藤崎衛、「西欧中世のカミ・酒・ヒト」、第 38 回地中海学会大会 地中海トーキング「カミ・酒・ヒト」、2014.6.14
- 国際、Mamoru Fujisaki、「Pope Nicholas III and a Franciscan Mission of 1278 to the Il-Khan」、International Workshop: Medieval Papacy in Its Network: Europe Inside and Outside、2014.9.12
- 国内、藤崎衛、「中世カトリック世界の重層的アイデンティティ—12・13 世紀の教会会議言説の分析—」、2015 年度歴史学研究会大会合同部会「分裂と統合の場としての教会会議」、慶應義塾大学三田キャンパス、2015.5.24
- 国際、Mamoru Fujisaki、「The Curia and the Khan - A Franciscan Mission to the Il-khan Abaqa」、DFG Netzwerk Stilus curiae. Spielregeln der Konflikt- und Verhandlungsführung am Papsthof des Mittelalters (12.-15. Jahrhundert). Vierter Workshop、Ludwig-Maximilians-Universität München, München、2015.11.7
- (啓蒙) 藤崎衛、「世界史 Q&A 十分の一税について教えてください」、『歴史と地理 世界史の研究』、246、46-48 頁、2016.2
- (研究報告書) 藤崎衛、「中世教皇庁の行政組織編成に関する実証的研究」、2014.6
- (予稿・会議録) 国際会議、Mamoru Fujisaki、「Nicholas III and a Franciscan mission of 1278 to Il-Khan」、2014.9.12
- 『Preprints of International Workshop: Medieval Papacy in Its Network: Europe Inside and Outside』、19-42 頁、2015
- (監修) 藤崎衛、『第四ラテラノ公会議 (1215 年) 決議文翻訳』、2015.5
- (受賞) 国内、藤崎衛、Fujisaki Mamoru、地中海学会ヘレンド賞、Collegium Mediterranistarum Herend Prize、地中海学会、Collegium Mediterranistarum、2014.6.14
- (翻訳) 個人訳、「Liber sive Catastum Hospitalis et Societatis Recommendatorum Sacre Ymaginis Salvatoris ad Sancta Sanctorum」、藤崎衛、『1462 年ローマにおける救世主イコンの行列次第』、『西洋美術研究』、19、179-183 頁、三元社、2014.12
- 共訳、インノケンティウス 3 世、「Constitutiones Concilii quarti Lateranensis」、藤崎衛ほか 9 名、『第四ラテラノ公会議 (1215 年) 決議文翻訳』、『クリオ』、29、2015.5
- 共訳、マックス・ケルナー/クラウス・ヘルパース、「Die Päpstin Johanna: Biographie einer Legende」、藤崎衛/エリック・シッケタンツ、『女教皇ヨハンナー伝説の伝記 (バイオグラフィー)』、三元社、2015.9
- (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、藤崎衛、研究代表者、「都市ローマ及び教皇領支配の観点に基づく中世教皇庁研究」、2015～
- 文部科学省科学研究費補助金、藤崎衛、研究分担者、「盛期中世教皇庁の統治戦略とヨーロッパ像の転換」、2014～
- 三菱財団法人人文科学研究助成、藤崎衛、研究代表者、「宣教団派遣に見る中世ヨーロッパのアジア認識と対モンゴル交渉に関する研究」、2015～
- (他機関での講義等) 非常勤講師、立教大学、「歴史と資料」、2014.4～2014.9、2015.4～2016.3
- 非常勤講師、学習院大学、「ヨーロッパ世界」、2014.4～2015.3
- 非常勤講師、立正大学、「西洋史特講」、2014.4～2016.3
- 非常勤講師、埼玉大学、「西洋史概説」、2015.4～2016.3
- 非常勤講師、恵泉女学園大学、「ヨーロッパ文化特講」、2015.4～2015.9
- (学会) 国内、地中海学会、学会誌編集委員、2015.6～

(2) 外国人研究員・内地研究員

- 菊地重仁 (人文社会系研究科研究員、2013 年度～2014 年度)
- 芦部彰 (人文社会系研究科研究員、2015 年度)
- 大西克典 (人文社会系研究科研究員、2015 年度)
- 斉藤恵太 (人文社会系研究科研究員、2015 年度)
- 空由佳子 (人文社会系研究科研究員、2015 年度～)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014 年度

- 「ハブスブルク帝国におけるナショナリズム—言語境界地域におけるドイツ系学校協会の活動に着目して—」
- 「フィリップ 2 世期における統治構造の変質：王のバイイに注目して」
- 「19 世紀のイギリスにおける中央政府と地方地主階級の関係」
- 「近代イギリスのユダヤ人政策—シオニズムの中の反ユダヤ主義—」
- 「19—20 世紀転換期の黒人エリート層による南アフリカ自治構想」
- 「19 世紀 GREAT WESTERN 鉄道会社をめぐる諸問題」
- 「フランス宗教戦争期における「政治理性の自律化」について—ナント王令の成立過程および内容からの検討—」
- 「英国統治下におけるマルタ島の英国化とナショナリズム」
- 「17 世紀イギリスの海外進出とカリブの海賊バッカニアの関係に関する考察」
- 「1830 年代におけるマーチャント・バンキング—ベアリング商会の成長過程—」
- 「イギリス関税改革運動におけるキャンペーン活動と 1906 年選挙の帰結について」
- 「フランス第三共和政中のアリアンス・フランセーズ—「植民地党」的性格の変容を中心に—」
- 「19 世紀末から 20 世紀初頭における技術教育とイギリス経済衰退の関連」
- 「ヴァイヌル共和国と海軍—内部対立の問題を中心に—」
- 「オズワルド・モズリー及びイギリス・ファシスト連合に関する一考察」
- 「第二次世界大戦開戦直前のイギリスの対ソ連外交—1939 年春から夏の英ソ交渉とその破綻を中心に—」
- 「帝政末期のロシアにおける民族教育政策と臣民統合：ヴォルガ・ウラル地域における異族人教育と 80 年代の潮流転換」
- 「指導者としてのフィリッポス 2 世とアレクサンドロス大王との比較」
- 「青年トルコ革命をめぐるドイツ帝国とオスマン帝国の軍事関係」
- 「18 世紀ロンドンのコーヒーハウスにおけるシビリシティの成熟について」
- 「内戦期のロシアにおけるコサック解体」
- 「紀元前 5 世紀頃におけるメトイコイの三段櫓船奉仕について」
- 「イギリス帝国の植民地ナショナリズム—第一次世界大戦からバルフォア報告まで—」
- 「重装歩兵の階層についての論争」
- 「フランスの 1905 年政教分離法成立をめぐる諸問題」
- 「宥和政策への評価に対する考察」
- 「19 世紀イギリスにおけるジェントルマンとチャリティについて」
- 「近代イングランドにおける社交生活と娯楽」
- 「ナチス指導者原理とその表出」
- 「12 世紀トリーアにおける都市共同体形成」
- 「19 世紀パリのブルジョワ的都市空間の生成」
- 「19 世紀末カナダにおける植民地ナショナリズムについて—1897 年のヴィクトリア女王即位 60 周年祭から—」

2015 年度

- 「ブリテン諸島における宗教的アイデンティティ—」
- 「18 世紀イギリスにおける選挙制度へのエドモンド・バークの姿勢に関する考察」
- 「フリードリヒ 2 世の十字軍」
- 「13、14 世紀の修道院における写本文化」
- 「19 世紀アイルランド国民学校制度に期待された教育効果」
- 「19 世紀後半から独立までのポーランド人と教育：秘密教育と民族意識」
- 「ミッドランドにおけるラダイト運動の原因と性格」
- 「19 世紀後半のリヴァプールにおけるアイルランド人移民と聖職者の関わり」
- 「ウクライナ・ナショナリズムと国家の問題、1890-1918」
- 「19 世紀後半から 20 世紀前半におけるアメリカの産学連携」
- 「18 世紀イングランドにおける階層構造—中産層の消費を中心に—」
- 「19 世紀後半から 20 世紀前半におけるイギリスの社会浄化運動に関する一考察」
- 「古典期から初期ヘレニズム期のアテナイにおける「高位顕彰」の変遷について」

「ドイツ外洋艦隊の失敗要因」
「帝政ロシア末期におけるフィンランド大公国の「第一次ロシア化」の背景」
「古典期アテナイの農業奴隷について」
「19世紀中葉のイギリスにおける庶民の投資行動」
「東ドイツナショナル・アイデンティティ形成におけるプロイセン像」
「第一次世界大戦時の教養市民の活動」
「ドイツ 1848・49年革命における統一と民族の問題—ドイツ人・ポーランド人・デンマーク人—」
「19世紀ロンドンにおけるリヴァリ・カンパニーと自治体改革について」
「ノルマン朝・初期プランタジネット朝イングランド（1066 - 1199）における王位継承課程の諸問題」
「10世紀ビザンツ史料におけるブルガリア王シメオン1世の位置づけ」
「戦後のソ連社会と「脱スターリン化」」
「ルネサンス期アリストテレス主義とヴェネツィア共和国」
「18世紀中葉の西インド植民地における疑似ジェントルマンの社会的地位の向上と政治的役割について」
「12世紀ラングドック地方におけるカタリ派」
「1845年賭博禁止法に関する一考察」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

大島幸之介「フランス革命期の〈反革命〉—ラ・ロシュジャ克蘭夫人『回想録』に見るカトリック王党軍のイデオロギー」〈指導教員〉深澤克己
 櫻田宗紀「枢機卿グイドの教皇特使活動」〈指導教員〉高山博
 楠田悠貴「ルイ16世裁判再考—先例としてのチャールズ1世裁判をめぐる—」〈指導教員〉深澤克己
 窪信一「ヘシュカズム論争期におけるビザンツ知識人のヘレニズム 変容と批判」〈指導教員〉高山博
 紺谷由紀「法文史料にみる後期ローマ帝国の去勢者—ユスティニアヌス1世治世の法典編纂事業をめぐる諸考察—」〈指導教員〉高山博

2015年度

足立恭平「初期属州アジアにおけるギリシア諸都市の変容」〈指導教員〉橋場弦
 小風尚樹「1860年代中国海域における国際協力体制の再検討—英国の海賊鎮圧の理念と活動を中心に—」〈指導教員〉勝田俊輔
 佐野大起「テオドロス・メトキテスの登用の経緯を巡る諸問題の検討—アンドロニコス2世治世における宮廷人事とその政治的背景—」〈指導教員〉高山博
 柴田隆功「オットー大帝期における文書発給と規範性の認識」〈指導教員〉高山博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲) (乙)
 なし

2015年度

(甲)
 芦部彰「1950年代ドイツ連邦共和国におけるキリスト教民主同盟（CDU）の住宅政策：カトリシズムの影響を中心に」
 〈主査〉姫岡とし子 〈副査〉武川正吾・勝田俊輔・池田嘉郎・北村昌史

(乙)
 池上俊一「公共善の彼方に—後期中世シエナの社会—」
 〈主査〉高山博 〈副査〉佐藤信・橋場弦・相澤隆・勝田俊輔

25 社会学

1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は、社会学が「世態学」という名で初めて講じられた1878（明治11）年に遡る。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治26）年帝國大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和36）年には3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984年には4講座となった。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では行動文化学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。

2015年度の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、都市、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約50名、また学士入学でも学生を受け入れている。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的な基礎訓練とともに領域横断的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近は金融やメーカーに就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員になったり研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者も定着してきた。院生総数は60名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては、日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献している。また、ソウル大学社会学部と2年に1回国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行している。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。大学院生も、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロギス』を毎年編集・発行している。

ポスドクや外国人研究員として、フルブライト財団や日本学術振興会の選考をへて本研究室で一定期間を研究滞在する場合も増えてきている（これまで、アメリカからの来訪者が比較的多い）。本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1～2年過ごしたあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生も在籍している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

松本三和夫

専門分野 科学社会学・知識社会学

在職期間 1996年4月～現在

武川正吾

専門分野 社会政策

在職期間 1993年4月～現在

佐藤健二

専門分野 歴史社会学

在職期間 1994年10月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006年4月～現在

赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006年4月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究

在職期間 2011年4月～現在

祐成保志

専門分野 コミュニティの社会学

在職期間 2012年4月～現在

(2) 助教の活動

小山 裕

在職期間 2014年4月～2015年3月

研究領域 理論社会学

主要業績

(論文) 小山裕、「ニクラス・ルーマンの政治思想」、『思想』、1089、82-102頁、2015.1

小山浩、『市民的自由主義の復権』、勁草書房、2015.11

三浦倫平

在職期間 2015年4月～現在

研究領域 地域社会学、都市社会学

主要業績

(著書) 『「共生」の都市社会学』、新曜社、2016.3.

(論文) 「環境行政訴訟が地域社会にもたらす可能性と課題」、都市住宅学、91号、2015.

都市空間における「共約不可能な公共性」の形成過程、地域社会学学会会報22号、2010.

(教育実績)

2011年度 立教大学非常勤講師

2010年度～2012年度 明治大学非常勤講師

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

Scott Knowles (2015年度)

日本学術振興会特別研究員 (PD)

野島那津子 (2016年度)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

「ネット炎上における匿名集団に関する一考察」

「共食についての考察」

「香川県丸亀町商店街にみる地方商店街の再興」

「原発広域避難と被災自治体の復興—富岡町を事例に」

「公衆はいかにして科学技術を意味づけるか」

「建設産業における技能承継問題」
「現代日本における結婚の変容—配偶者選択の個人化に着目して—」
「教育からみる「外国人親をもつ子ども」の現状と課題—国際学力調査マイクロデータの比較分析を通してみる日本—」
「日本における同性間パートナーシップ承認の可能性—結婚の歴史的展開とパートナーシップを問い直すまなざしより」
「転勤に着目した女性の継続就業に関する実証研究」
「嫌われ者のオスブレイ-MV-22 オスブレイ配備反対運動に関する考察」
「明治大正期における学生寮の研究」
「日本の生命保険業界の海外展開の展望とその社会的意義」
「日本における外国人と日本人の間に生まれた子供の表象」
「『震災後文学』の社会学」
「帰国子女のアイデンティティ変容」
「環境倫理をめぐる議論の歴史的環境への拡張」
「都市部の待機児童問題解消に向けて～保育サービス利用者減少の視点から～」
「東日本大震災にみる音楽の力」
「日本社会における吹奏楽」
「日本の高等教育—これからの財源を考える」
「テクノロジーが音楽制作者に与える影響」
「千葉ニュータウン開発を語ることの困難—地域社会学的接近の試み—」
「全国中学生人権作文コンテスト入賞作品の傾向に関する一考察～なぜ全国中学生人権作文コンテスト入賞作品は思いやりにあふれているのか～」
「がん闘病記の社会学」
「大学生の「おごり」の分析」
「スポーツの社会的存在意義」
「細野晴臣の音楽活動の分析」
「法律から見る日本の「家族」観の特徴とその変化—アメリカ、アジアとの比較を通して—」
「日本国憲法からみる第二次安倍政権の政策」
「オークションの社会的分析」
「太陽光発電への偏重をもたらした社会的要因」
「日本におけるダークツーリズムを通して観光を考える」
「"Fan Studies"/「ファン研究」再考」
「日本における外国人生徒の教育のあり方について—東京都の公立高校に着目して—」
「最近のオネエブームにおける「オネエ」たちは何を表す存在であるのか」
「アマチュア芸術活動の学び—市民合唱団への継続的参加を事例として」
「メディア時代の都市における人々と文化の多層性—『オタクの聖地』秋葉原の事例から—」
「マーケティングの諸相におけるポストモダニティの様相と展開」
「大学生の日本企業に対するイメージ—アジア学生調査の二次分析を通して—」
「ダンススタジオ運営からみるビジネスとしてのストリートダンス」
「感情労働のもたらすポジティブな影響の可能性」
「地下鉄マナーポスターの諸相」
「肉体鍛錬論—ボディビルの本質」
「地域ブランドと生産者 加賀野菜の事例」
「日本企業の進出と労使関係—2000年以降のマレーシアを中心に—」
「同性婚、セクシュアルマイノリティの権利をめぐる論争～日米比較を通じて」
「戦後日本のファッションデザイナーという職業の形成過程」
「アイドル歌手とそのファンとの関係性に関する展望」
「福井の地域ブランディングは何故成功しないのか」
「若年層の離職からみる職業選択」
「「シェア」を軸とした場づくりと個人の変化—シェアハウス、コワーキングを例に—」

「若者の新しい公共性の可能性を探る」
「職業の選択」
「ソーシャル・キャピタル論におけるマイクロ・マクロ・リンクの検討」
「サーカスの文化社会学」
「日本コカ・コーラ社の広告における言葉の変化」
「同性愛者のカミングアウト」
「日本のクラウドファンディングにおいて信用力は重要か」
「メディアが形作るコミュニケーション—技術の発展の中で変化したもの—」
「現代の広告に見る社会意識の変化」
「埼玉県南地域コミュニティ空間分析研究—パーソントリップ調査を用いて—」

2015年度

「「百合文化」のジェンダー分析」
「日本における外国人受け入れに対する意識」
「「福祉国家」日本における排外主義—福祉の両義性と移民排除の様相—」
「広場のひろば—公園・広場と公共性に関する考察—」
「日本の書籍環境の実態分析」
「職住関係をめぐる知と計画—高度成長期における東京圏に着目して—」
「近代真宗・戦争・日本主義」
「日本語ファンクの社会学的研究」
「SNSにおけるコミュニケーション」
「ペットの家族化をめぐる社会学」
「ケア労働の脱女性化に関する考察」
「外集団他者に対する向社会的行為を支える認知処理の研究」
「グローバリズム資本主義時代の倫理と社会構想—自由と公正、冗長性と有限性—」
「行政による文化産業支援について」
「公共広告活動におけるインターネット媒体の可能性」
「メディアは都市に何をもちたすか『住みたい街No.1』吉祥寺』の有する意味」
「高速鉄道が切り裂く地域社会」
「スタジアムでのスポーツ観戦における観客の経験」
「現代の若者の政治への関わり方」
「「男の料理」考—男性が料理することを巡る諸相の分析—」
「ビートルズ活動前後における音楽産業の変容」
「少女漫画における女性の性役割」
「近代日本におけるイスラーム認識」
「宗教的回心についての—研究—仏教浄土真宗の門徒を事例に—」
「美容整形に対する許容度の日韓比較」
「東京における地形的条件と社会的階級分布の関連について—「山の手」「下町」の歴史変遷から—」
「中心市街地活性化における芸術の可能性—大分県別府市の事例から—」
「「自虐」に見る現代の若者像」
「現代の結婚におけるパートナー選択と関係継続のあり方」
「豊かさ追求の今—地方自治体による豊かさ指標作成の取り組みを通して—」
「二国間災害募金システムから見るセルビアと日本の交流」
「Iターン者の活躍とそれを可能にする条件—地域においてIターンの持つ可能性—」
「女性にとっての結婚へのプレッシャー」
「障害を持つ女性のライフコースに関する研究—就労と結婚に着目して—」
「村落社会学研究の展開」
「女性向けアダルト動画の文化社会学—視線と真理をめぐって—」
「戦争におけるメディアの役割—平和のためのジャーナリズムとは—」
「流行歌の社会学」
「撮影対象としての経験と自己」

「職場におけるインフォーマル コミュニケーション—飲みニケーションの効用—」

「「メンヘラ」の意味と社会的位置づけ—伝統的呼称との比較から—」

「長時間労働に関する実証研究」

「学習塾アルバイトの社会学的研究—個別指導の事例の分析—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

平山はづき「集会的消費の社会学」(指導教員) 祐成保志

馬渡玲玖「ヘルベルト・マルクーゼにおける批判的社会理論の構想と展開」(指導教員) 出口剛司

KIM CHANSU「2000年代韓国社会における進歩政党の位置づけ—民主労働党に対する保守メディアの表現方法の変化をつうじて—」(指導教員) 佐藤健二

ZHENG DANYANG「中国都市部における高齢者介護の人材育成に関する研究—日本企業 M 社による研修事業を事例として—」(指導教員) 武川正吾

李盈慧「中国社会の個人化—個人化と個人主義という視点から—」(指導教員) 武川正吾

2015年度

清水亮「軍隊の地域社会における受容の社会学的研究」(指導教員) 佐藤健二

高艸賢「A.シュッツにおける生成の社会理論—孤独な自我と社会的世界の論理の一貫性に着目して—」

(指導教員) 出口剛司

永島圭一郎「結婚への移行に潜む社会的格差の研究—未婚のメカニズムを探る—」(指導教員) 白波瀬佐和子

野澤明人「ルーマンの社会学における偶発性定式概念の意義—問題と解決の論理によせて—」(指導教員) 出口剛司

長谷川倫子「家事労働の外部化—家事代行サービスに注目して—」(指導教員) 白波瀬佐和子

泰山亮太「キャリア形成プロセスにおける格差の男女比較研究—無業経験に着目して—」(指導教員) 白波瀬佐和子

森健「パーソンズの功利主義批判と主意主義構成の過程—マーシャルの「人間の研究」における功利主義批判の踏襲—」(指導教員) 出口剛司

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014年度

(甲)

福井康貴「近現代日本の大卒労働市場に関する社会学的研究—選抜メカニズムに着目して—」

(主査) 白波瀬佐和子 (副査) 佐藤健二・赤川学・佐藤俊樹・盛山和夫

三浦倫平「「共生」の都市社会学—理論的実践の構築に焦点をあてて—」

(主査) 佐藤健二 (副査) 武川正吾・赤川学・祐成保志・町村敬志

富永京子「社会運動のサブカルチャー化—「2008年G8サミット抗議行動」での経験に焦点を当てて—」

(主査) 佐藤健二 (副査) 松本三和夫・赤川学・出口剛司・大畑裕嗣

(乙)

なし

2015年度

(甲)

武岡暢「新宿歌舞伎町の社会学的研究—都市地域社会の把握に関する方法的考察」

(主査) 佐藤健二 (副査) 武川正吾・白波瀬佐和子・祐成保志・町村敬志

羅一等「普及過程におけるネットワーク動力学の研究—インフルエンシャル仮説の理論的・経験的検討—」

(主査) 白波瀬佐和子 (副査) 赤川学・盛山和夫・佐藤嘉倫・金井雅之

(乙)

なし

26 社会心理学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の規定因を実証的に研究する経験科学であり、社会的状況における個人の行動や認知、集団・組織行動、文化と心理の関係など、幅広い研究テーマを扱う。

当社会心理学研究室は、1974年4月に創設（同年に文学部の専修課程、1976年4月に大学院社会科学研究科の専攻として設置）された比較的新しい研究室である。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学専門分野として、教授2名、准教授1名、助教1名で運営されている。それぞれの教員が個別にラボを運営しつつ、協力しあって学部生・大学院生の教育に従事している。

各々のラボでは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げて、旧来の社会心理学を超えた人間知の構築を目指している。いずれのラボにおいても、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることが特徴的である。教員は共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催しているほか、学内においては互いに連携して、2ヶ月に1度ほどのペースで国内外の研究者を招いて社会心理学コロキウムを開催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究に関する詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ (<http://www.utokyo-socpsy.com/>) およびリンク先の各教員ラボのホームページに公開されている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的で開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表や、専門学術誌や学術書等への掲載というかたちで公表されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、心理学、社会心理学および関連する行動科学諸領域の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会、アジア社会心理学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。また教授2名は、日本学術会議（第一部）の会員、連携会員を務めている。

(4) 国際交流の状況

上述の通り、各教員が種々の国際共同研究プロジェクトに参加しており、複数の学問領域にまたがる国際交流も盛んである。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

山口勲 教授

在職期間 1987年10月～2015年3月

専門分野 社会心理学

亀田達也 教授

在職期間 2014年10月～現在

専門分野 社会心理学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 准教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

(2) 助教の活動

綿村英一郎

在職期間 2014年4月～現在

専門分野 社会心理学

主要業績

- (論文) 石崎千景・荒川歩・菅原郁夫・北村英哉・四宮啓・綿村英一郎、『裁判員への説得技法：法廷で人の心を動かす心理学』を超えて、『法と心理』、2015.11
- 渡辺晃・分部利紘・綿村英一郎・高野 陽太郎、『記憶の固定化が系列学習により形成された表象にもたらす変化』、『認知心理学研究』、2015.2
- Wakebe, T., Hidaka, S., & Watamura, E. 『Resource-independent negative effects of foreign language on analogical problem solving』、『Psychological Reports』、2015.2
- Watamura, E., Wakebe, T., Fujio, M., Itoh, Y., & Karasawa, K., 『The Automatic Activation of Retributive Motive When Determining Punishment』、『Psychological Studies』、2014.6
- 綿村英一郎・分部利紘・佐伯昌彦、『量刑分布グラフによるアンカリング効果についての実験的検証』、『社会心理学研究』、2014.8
- Watamura, E., Wakebe, T., & Karasawa, K., 『The Influence of Improper Information on Japanese Lay Judges' Determination of Punishment』、『Asian Journal of Criminology』、2014.9
- 安田裕子・林久美子・佐伯昌彦・山崎優子・福井厚・綿村英一郎、『犯罪被害者をとりまく問題—臨床心理学、法社会学、法心理学からの検討—』、『法と心理』、2014.10
- 佐伯昌彦・松尾加代・浅井暢子・綿村英一郎・村山綾・笹倉香奈・裁判員経験者、『裁判員裁判における審理・評議の在り方を巡る心理学的研究の意義』、『法と心理』、2014.10
- (書評) 荒川歩、『裁判員』の形成、その心理学的解明』、『法と心理』、2014.10

(3) 外国人研究員・内地研究員

- ・Joonha Park (Ph.D., University of Melbourne) 2011年9月～2013年8月
- ・橋本博文 (博士(文学), 北海道大学) 2012年4月～2014年3月
- ・田戸岡好香 (博士(社会学博士), 一橋大学) 2015年4月～現在
- ・Nathan Berg (Associate Professor, Department of Economics, University of Otago) 2016年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2014年度

- 「興味関心と意見の一致不一致が第三者効果に与える影響」
- 「社会経済的地位が私刑支持にもたらす効果」
- 「コントロール方略の満足度と自己効力感との関係」
- 「大学生のキャリア選択の納得度に対して、大学時代の『異質な他者』との関係構築がもたらす効果」
- 「被呈示者の反応が自己呈示者の自尊感情に及ぼす影響の検討」
- 「進路設計の自己効力が経済格差に対する問題意識に与える影響について—どこまでが自己責任なのか—」
- 「規範の緩厳が集団における内輪ユーモアに与える影響について」
- 「街にたいする愛着とそれが導く街中での行動—地方出身女子大学生の地元と吉祥寺への意識の比較を通して—」
- 「ライン上のコミュニケーションにおけるスタンプの役割についての実証研究」
- 「なぜ目撃証言は歪むのか：事後再認に言語的情報がもたらす効果の検討」
- 「自己奉仕バイアス：日本における特色」
- 「新卒学生のUJIターン就職志向について—大学生のUJIターン選択における心理的プロセス—質的研究を通して—」
- 「個人と集団の価値観の一致が自尊心および集団アイデンティティに与える影響」
- 「SNS依存につながる性格特性および依存状態の認識—改善方法—」
- 「合議は集合知を生むか—ChoiceとEstimateの違いが集団決定の精度に及ぼす影響—」
- 「出身地へのUターンを促す要因についての研究—Uターンする時期の比較を通して—」
- 「ゼロサムゲームにおける「心の理論」に応じた戦略の調整」

「臓器提供に対する態度に、人間らしさの知覚と利益情報が与える影響についての検討」
「包括/分析的思考に基づく日米の広告の文化差について」
「勢力感と裁判官の示す量刑基準が量刑判断に与える影響とその過程の検討」
「どのように集団を認知・評価しているかが、集団アイデンティティに与える影響について」
「Hope is Not Always a Good thing : The Effect of Hope and Regret on Decision Process and Quality 希望が必ずしも良いこととは限らない～意思決定の過程と質における希望と後悔の効果」

2015 年度

「「する後悔」と「しない後悔」—行動選択を規定する文化規範と社会経済的地位の影響について—」
「外国人との共通性と集団アイデンティティが外国人に対する社会的距離に与える影響」
「道徳の暗黙理論はなぜ存在するのか～適応的な特性判断の観点から～」
「カテゴリー認知の違いが韓国人に対する日本人の態度に与える影響について」
「同調傾向が創造性に与える影響の文化間差異の検討—ブレインストーミングにおける社会的促進効果の日米比較を通して—」
「目標志向性と集団内における能力の認知が目標へのコミットメントに及ぼす影響」
「国民の死刑制度に対する意識調査」
「相互協調的行動の是非に関する共有信念が関係流動性の異なる集団内の個人の行動決定に及ぼす影響の検討」
「努力アピールが他者からの評価に与える影響—暗黙理論に着目して—」
「自己志向的完全主義が自己制御の発揮に及ぼす影響」
「暗黙理論が他者からのメッセージに対する“反発”に及ぼす影響」
「集合知の発生条件を探る—相互作用による反応関数の収束—」
「置かれた立場と被害者参加人の発言が量刑判断に及ぼす効果の検討」
「裁判員裁判制度へのイメージの尺度化」
「引越しがもたらす文化的自己観の変化と地域愛着への影響」
「透明性の錯覚」
「脅威のシステム正当化に対する影響：脅威の利用機会の有無の効果の検討」
「上下関係規範と集団内地位が気遣い行動における認知判断傾向に及ぼす影響」
「自尊心および文化的自己観が他者の明確性に及ぼす影響」
「選択による選好の変化—自由選択パラダイムにおける選択の自由と強制の検討—」
「機会平等と結果平等の志向とその要因」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

大橋卓真「日本において、ソーシャル・サポートの授受を抑制する負のフィードバック構造」(指導教員) 山口勲
櫻井良祐「既達成の目標によるセルフ・ライセンシング：自我枯渇時における自己制御過程に着目して」
(指導教員) 唐沢かおり

2015 年度

武井恵亮「モラル・ライセンシングの生起条件の検討：先行道徳行動の自発性認知とモラル・アイデンティティによる検討」(指導教員) 唐沢かおり
相田直樹「暗黙理論が努力戦略に及ぼす影響」(指導教員) 村本由紀子
館野洋輔「親密な二者関係における透明性の錯覚—関係維持および関係満足度の観点から—」(指導教員)
村本由紀子
岩谷舟真「評判予測と規範遵守行動の関係：関係流動性に着目して」(指導教員) 村本由紀子
川尻知弥「地域活動の参加意欲を促進する諸要因に関する検討」(指導教員) 村本由紀子
齋藤美松「向社会行動は、内集団の枠をどう越えるか—認知処理過程の検討—」(指導教員) 亀田達也
二木望「心理的本質主義がジェンダーシステム正当化に及ぼす影響：集団間地位及び社会経済的地位による効果の検討」(指導教員) 唐沢かおり
松本龍児「自由意志信念が報復的攻撃に与える影響：自由意志の主体に着目して」(指導教員) 唐沢かおり

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

澤海崇文「対人場面におけるコントロール方略についての実証的研究」

〈主査〉山口勸 〈副査〉唐沢かおり・亀田達也・村本由紀子・相川充
福沢愛「悲観性の二側面と達成動機との関連について—比較文化的視点から—」

〈主査〉山口勸 〈副査〉唐沢かおり・亀田達也・村本由紀子・繁榎江里
翟一達 ZHAI YIDA「中国国民の民主主義への態度と政府への信頼に関する研究」

〈主査〉山口勸 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・前田幸男・池田謙一

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

高木大資「The crime prevention mechanisms of neighborhood social capital and social reactions to crime: A social psychological approach with multilevel and spatial analytic techniques (地域の社会関係資本による犯罪予防メカニズムおよび犯罪への社会的反応: マルチレベル・空間分析手法による社会心理学的アプローチ)」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉山口勸・村本由紀子・池田謙一・浦光博
橋本剛明「社会的侵害場面の非当事者による寛容判断の検討—勢力が果たす役割に着目して—」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉山口勸・村本由紀子・村田光二・浦光博

(乙)

なし

27 文化資源学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2000年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の2つのコースから成る。

2コースに再編されたのは2015年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学(文書学・文献学)で構成されていた。後2者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文系・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」(身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど)をともなって生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」(resource は泉に臨むという意味)とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

9人の担当教員(文化資源学=木下直之教授、古井戸秀夫教授、月村辰雄教授(フランス語フランス文学と兼任)、渡辺裕教授(美学芸術学と兼任)、佐藤健二教授(社会学と兼任)、大西克也教授(中国語中国文学と兼任)、文化経営学=中村雄祐教授、小林真理准教授、松田陽准教授(さらに、イローナ・パウシュ客員准教授、助教=野村悠里)の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美学芸術学、美術史学、博物館学、音楽学、演劇学、芸能史学、社会学、フランス語・フランス文学、中国語・中国文学、政策科学、法学、歴史学、国際協力論、開発研究、考古学、文書学などと多彩である。さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から併任教授を、文化庁等から非常勤講師を招いている。

(2) 大学院専攻・コースとしての活動

2014年度の修士課程入学者は11人(うち社会人学生が5人)、博士課程入学者が3人(うち社会人学生が2人)、2015年度の修士課程入学者は8人(うち社会人学生が3人)、博士課程入学者が3人(うち社会人学生が2人)であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあつては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いかけるフォーラムを、毎年開催してきた。2014年度のテーマは「らくがき ―そこにかくということ―」、2015年度は「キャラクター考―『刀剣男士』の魅せるもの―」であった。これらを含め、すべての回の開催記録が研究室ホームページに掲載されている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など

2002年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2014年6月に第12号、2015年6月に第13号を刊行した。2015年度の会員数は318人である。

(4) 国際交流の状況

2014年度修士課程に1名(台湾人)、2014年度博士課程に1名(中国人)、2015年度修士課程に1名(韓国人)、2015年度博士課程に1名(ブラジル人)、の外国人留学生を受け入れた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

木下 直之(文化資源学)
古井戸 秀夫(文化資源学)
渡辺 裕(文化資源学)
月村 辰雄(文化資源学)
佐藤 健二(文化資源学)
大西 克也(文化資源学)
中村 雄祐(文化経営学)
小林 真理(文化経営学)
松田 陽(文化経営学)

(2) 助教の活動

吉澤 保

在職期間：2011年4月～2015年3月

研究領域：フランス近代思想史

主要業績：「ドゥルーズの個体化——ライブニッツを中心に——」、2012年、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学研究』第45号

「ルソーとジュネーブ」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、324-325頁

「聾啞者教育と盲人教育」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、326-327頁

『千のプラトール』における「歴史」哲学、2015年3月、『津田塾大学紀要』第47号、pp.217-239.

野村 悠里

在職期間：2015年4月～現在

研究領域：装幀美術史、修復保存

主要業績：「ルネサンス期のルリキュール：ド・トゥ(Jacques-Auguste de Thou, 1553-1617)の紋章本」、2015年、日仏図書館情報学会『日仏図書館情報研究』、第40号

(3) 外国人教員の活動

ウィリアム・ハワード・コールドレイク：2011年10月～2014年9月

研究領域：日本美術と建築の歴史

主要業績：

(学会発表)

国内、第68回学習院大学史料館講座「御門(ミカド)と日本の門建築」2012年9月15日

国外、“The Way of the Carpenter: Tools and Japanese Architecture”, Special Japan Forum Lecture for 40th Anniversary of the Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University, 7 February, 2014, accompanying the exhibition “The Thinking Hand: Tools and Traditions of the Japanese Carpenter.”

(論文)

“Architectural Antiquarianism, Japanese Models, and the Construction of a Modern Empire at the 1873 Vienna and 1910 Japan-British Exhibitions,” in Elizabeth Lillehoj (ed.), *Archaism and Antiquarianism in Korean and Japanese Art*, Chicago, Center for the Art of East Asia, University of Chicago, Art Media Resources, Inc., 2013, pp. 210-27.

(担当講義)

Photography and Japan's Participation at the International Exhibitions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the Paris Expositions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the American International Expositions (文化資源学演習) 院のみ

Japan and the British International Exhibitions (文化資源学演習) 院のみ

文化資源としての日本建築 (文化資源学特殊講義) 学部共通

文化資源としての日本の住まい（文化資源学特殊講義）学部共通

豊臣・徳川の霊廟。文化資源としての建築（文化資源学特殊講義）学部共通

バウシュ・イローナ：2014年10月～

研究領域：日本考古学（特に縄文時代）、ヨーロッパにおける日本考古／民俗コレクションの歴史

主要業績：

（学会発表）

文化資源学会「考古学と現代社会：縄文の魅力」、東京大学、2015年12月05日

『博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究』國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ 2015、「オランダにおけるシーボルトのコレクションの日本考古学遺物について（Introducing the archaeological artefacts in the Siebold Collection）」國學院大學、2015年12月13日

『お茶の水女子大学 女性のグローバルな活躍のためのワークショップ』「As you Like it! How my research interests shaped my career」、お茶の水女子大学、2015年12月18日

（担当講義）

Japanese Material Culture in Europe: Archaeological and Ethnographic Collections (1 & 2) [2015]

考古学と現代社会：縄文の物語

考古学と現代社会：古代の物語

文学部セインズベリーWG2015 サマープログラム特別講義 ”Japanese archaeology, modern society and identity: a Jomon case study” (2015/8/13)

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

文化経営学専門分野

植田憲司「明治期における肖像写真の受容に関する研究」（指導教員）木下直之

志田康宏「高橋由一研究—その「展覧閣」構想と天絵学舎の活動をめぐって—」（指導教員）木下直之

DE SOUZA PERSICI MARCOS「ブラジル文化政策と文化多様性：ルーラ政権の果たした役割」（指導教員）

小林真理

石田さくや「キャラクター・コンテンツビジネスと自治体政策の関係性について—福島県須賀川市と「ウルトラマン」に注目して—」（指導教員）小林真理

藏田愛子「明治期の植物画に関する研究—小石川植物園の画工・渡部鉄太郎の足跡—」（指導教員）木下直之

高田あゆみ「文化政策推進のための仕組みと担い手—「小金井アートフル・アクション！」を事例として—」（指導教員）小林真理

（指導教員）小林真理

松本郁子「東洋英和女学院におけるカナダ婦人宣教師派遣の終了とその背景」（指導教員）小林真理

2015年度

文化経営学専門分野

岡村万里絵「アートフェアからみる日本のコマーシャル・ギャラリーの展開について」（指導教員）小林真理

新井佐絵「渡辺省亭編集『美術世界』の研究」（指導教員）木下直之

坂口英伸「近代日本におけるセメント美術に関する研究」（指導教員）木下直之

中尾恵梨子「図書館情報学と博物館学の教科書比較」（指導教員）中村雄祐

水田詩絵里「地方自治体の文化政策における合意形成に関する研究：山口情報芸術センターに見るメディアアート導入の試みから」（指導教員）小林真理

形態資料学専門分野

櫛谷夏帆「太古を見せる ウィリアム・バックランドと視覚資料」（指導教員）渡辺裕

笠原真理子「マノンの表象～オペラ演出の視点から～」(指導教員) 古井戸秀夫

野田真菜「しかげ本にみる造形の歴史—日本の西洋受容と表現の変遷を中心に—」（指導教員）渡辺裕

文書学専門分野

森田康夫「戦国・織豊期撰家書簡の研究—陽明文庫蔵「近衛前久筆仮名書状」の書札札について」（指導教員）月村辰雄

（指導教員）月村辰雄

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

形態資料学専門分野

鈴木聖子「科学」としての日本音楽研究：田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築」

〈主査〉渡辺裕 〈副査〉古井戸秀夫・佐藤健二・小林真理・寺内直子

沈池娟 SHIM JI YEON「島村抱月と「新しい女性」像—松井須磨子と近代演劇」

〈主査〉古井戸秀夫 〈副査〉木下直之・月村辰雄・渡辺裕・神山彰

文書学専門分野

野村悠里「17、18 世紀フランスにおける製本術研究」

〈主査〉月村辰雄 〈副査〉木下直之・大西克也・中村雄祐・太田泰人

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

文化経営学専門分野

土屋正臣「市民参加型調査・収集・展示の文化資源学的考察—野尻湖発掘を事例として—」

〈主査〉小林真理 〈副査〉木下直之・佐藤健二・中村雄祐・佐々木亨

形態資料学専門分野

鄭仁善 CHUNG INSUN「日韓におけるインディペンデント映画の配給構造の形成に関する研究—政策、産業、映画運動の側面から—」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉渡辺裕・中村雄祐・小林真理・丹羽美之

(乙)

なし

28 韓国朝鮮文化

1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本では初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

(1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、考古学1名、文化人類学1名、言語学1名、哲学1名の、合計5名の教員で構成される。また、外国人客員教授1名が在籍している。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。ただし、2007年度以前に入・進学した学生は旧3コースのいずれかに所属している。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い、東洋史学、西洋史学、考古学、社会学、言語学、中国思想文化学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

(3) 研究室としての活動

1. 東京大学コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2014年度は5回、2015年度は2回開催した。

2. 講演記録の刊行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録（2014年度）』（2015年3月）、『同（2015年度）』（2016年3月）を刊行した。

3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』第14号（2015年3月）、第15号（2016年3月）を刊行した。

(4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）と交流協定を締結している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

韓国朝鮮歴史文化コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史
教授	Albert Charles Muller	韓国仏教・人文情報学

韓国朝鮮言語社会コース

教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
特任准教授	黄善燁	韓国朝鮮語学（2014年度）
特任准教授	李亨眞	韓国現代文学（2015年度）

(2) 助教の活動

金光来 (2013年4月1日から現在) 朝鮮思想史

主要業績

(著書) 共著、金光来、『朝鮮朝後期の社会と思想』、勉誠出版、2015.2

(論文) 金光来、「星湖李翼の学問的背景(1) 一家系と生涯と著述一」、『韓国朝鮮文化研究』第14号、2015.3

金光来、「星湖李翼の為学の方(1) 一不苟新・不苟留・不苟棄の三原則」、『中国哲学研究』第28号、2015.6

金光来、「星湖李翼の学問的背景(2) 一道統意識と家学伝統の二重構造一」、『韓国朝鮮文化研究』第15号、2016.3

(学会発表) 国内、金光来、「四端七情論と靈魂論」、CPAG 若手ワークショップ「普遍をめぐる問い——18～20世紀東アジアから考える」、2015.2.7

国際、金光来、「慎後聃のカトリック教理書批判」、韓国儒教学会創立30周年記念国際学術大会、韓国・ソウル・成均館大学校、2016.5.20

(3) 外国人教員の活動

黄善燁

在任期間：2014年4月～2015年2月

研究領域：韓国朝鮮語学

担当講義：韓国朝鮮語運用法(2)、韓国朝鮮語文法研究(3)、韓国朝鮮文化交流演習

李亨眞

在任期間：2015年4月1日から現在

研究領域：韓国現代文学

担当講義：韓国朝鮮語運用法(2)、韓国朝鮮文学研究、韓国朝鮮文化交流演習

(4) 外国人研究員・内地研究員

学術振興会特別研究員

小寺智津子

研究期間 2014年4月1日から現在

研究題目 ガラス製品から見た弥生・古墳時代の社会と汎アジア的国際社会交流の考古学的研究

外国人研究員

金泰勳

研究期間 2014年4月～2015年2月

研究題目 18・19世紀の日韓関係研究

沈永煥

研究期間 2015年4月～2015年9月

研究題目 高麗文書と日本養老令文書との比較を通じた東アジア古代・中世統治システムの比較分析

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2014年度

韓国朝鮮歴史文化コース

藤田友秀「米軍政期南朝鮮／韓国の地域青年運動研究—朝鮮民族青年団仁川の事例を中心に—」

〈指導教員〉六反田豊

大沼巧「大韓帝国期における徴税構造の変化と朝鮮社会—海税を中心に—」〈指導教員〉六反田豊

SMIRNOV PAVEL「高麗前期における翰林院官について—その運用実態と高麗官僚制度における位置づけ—」

〈指導教員〉六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

沈澤琪「韓国人留学生と中国人留学生の留學生活と家族の戦略」〈指導教員〉本田洋

2015年度

韓国朝鮮歴史文化コース

岡中優子「新羅における女王即位の背景をめぐる一考察」〈指導教員〉六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

金静「韓国における朝鮮族労働移住者の生活様相と其の変化—遼寧省 A 市出身者の事例を中心に—」(指導教員)

本田洋

王馳豊「韓国語連結語尾「-다가」及び過去形「-있」を伴う「있다가」の機能と用法に関する研究—コーパスを利用して—」(指導教員) 福井玲

金美「16 世紀中期朝鮮語のアクセント研究—『禪家龜鑑』、『誠初心學人文・發心修行章・野雲自警序』、『小學諺解』を中心に—」(指導教員) 福井玲

朱林彬「韓国語語彙史研究—小倉進平の方言調査に基づいて—」(指導教員) 福井玲

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2014 年度

(甲)

韓国朝鮮歴史社会コース

辻大和「一七世紀前半における朝鮮の対明清貿易政策」

(主査) 六反田豊 (副査) 早乙女雅博・吉澤誠一郎・吉田光男・糟谷憲一

韓国朝鮮歴史文化コース

金東熙 KIM DONGHEE「栗谷李珣思想研究—その TrilogY 思想—」

(主査) 川原秀城 (副査) 福井玲・小島毅・アルバート チャールズ ミュラー・中純夫

韓国朝鮮言語社会コース

高木丈也「日本語と朝鮮語の談話における形式と機能の関係—中途終了発話文の出現を中心に—」

(主査) 福井玲 (副査) 本田洋・生越直樹・ダニエル ロング・趙義成

辻野裕紀「朝鮮語〈n 挿入〉攷—音韻論と形態論—」

(主査) 福井玲 (副査) 本田洋・生越直樹・岸田文隆・ジョン ホイットマン

(乙)

なし

2015 年度

(甲)

韓国朝鮮言語思想コース

金光来 KIM KWANGRAE「星湖心学形成の研究—堅守と自得の折衷そして西学」

(主査) 川原秀城 (副査) 早乙女雅博・六反田豊・権純哲・中純夫

韓国朝鮮言語社会コース

全恵子 CHUN HAEJA「現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-の研究—その機能と多義構造—」

(主査) 福井玲 (副査) 本田洋・生越直樹・岸田文隆・南潤珍

(乙)

なし

29 次世代人文学開発センター

1. センター活動の概要

昭和41年に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附設施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により平成17年から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。次の3部門から構成されている。

a. 先端構想部門（〈文化交流〉、〈東アジア海域交流〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象とする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。平成17年よりセンター主任として小佐野重利教授のほか、小島毅教授が兼任教員となり、平成26年には向井留美子教授が着任した。また、平成21年からの5年間は佐藤慎一教授が特任教授を務めた。平成25年度から、センター主任は小島教授に交代となった。本部門には、小島教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成17年度から平成21年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。センター紀要として、引き続き『文化交流研究』第27号（平成26年）と同第28号（平成27年）を刊行した。また、平成18年度より研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を兼ねて開始した文化交流茶話会を平成26年度、27年度も継続し、第36回から第39回まで実施した。

b. 創成部門（〈死生学〉、〈人文情報学拠点〉）

平成17年に島薮進教授（宗教学宗教学）を兼任教員として設置された。その前段階は平成14年度に21世紀COE研究拠点プログラムの一つとして採用され、5年間23人の教員が事業推進担当者となって進めてきた「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」のプログラムである。平成19年度に本部門に寄付講座として設置された上廣死生学講座と、また平成19年度から5年間15人の教員が事業推進担当者となって進めてきた21世紀COE研究拠点プログラム「死生学の展開と組織化」と連携して、死生学の将来的な発展に向けて体制を整えていく役割を果たし、死生学・応用倫理センターの発足にともなってその使命を終えた。かわって、平成24年度からは、それまで萌芽部門に置かれていた〈データベース拠点・大蔵経〉が拡大改組して〈人文情報学拠点〉となり、インド哲学・仏教学から下田正弘教授が本センターに配置換えとなったほか、チャールズ・ミュラー特任教授（平成25年11月からは教授）も創成部門に移った。教育面では「人文情報学概論」および「人文情報学特殊講義」を開講するとともに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を提供している。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に大きな役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造的に連携し、文字資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼任教員としては、長島弘明教授（日本文学）、武川正吾教授（社会学）、小林正人准教授（言語学）、高岸輝准教授（美術史学）、高橋典幸准教授（日本史学）、中村雄祐教授（文化資源学）の6名がおり、下田教授・ミュラー教授とともにこれらの事業を推進している。

c. 萌芽部門（〈演劇学〉、〈データベース拠点・大蔵経〉、〈イスラーム地域研究〉、〈現代インド研究〉）

〈演劇学〉は、平成18年に演劇学・舞踊学の確立を目的として専任教員の古井秀夫教授により開設された。哲学（美学）・文学（国文学）・歴史学（日本史）を中心に展開されてきた研究の成果を基盤に、演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのようにして構想するか、ということ課題としている。教育面では、大学院人文社会系研究科文化資源学専攻において講座を持ち、学生の教育指導を行うほか、学部の授業として「藝能学特殊講義」を開講している。研究面では、日本の演劇・舞踊が形態資料・文字資料としていかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、ということの究明を志している。〈データベース拠点・大蔵経〉は、平成19年に設置され、下田正弘教授が兼任してチャールズ・ミュラー特任教授とともに事業を推進していたが、上述のように、平成24年から〈人文情報学拠点〉として創成部門に移った。〈イスラーム地域研究〉は、大学共同利用法人人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定により、平成18年6月にイスラーム地域研究を総合的に推進するための共同研究拠点として創設された。当初は小松久男教授、つづいて大稔哲也准教授を兼任教員として、早稲田大学、上智大学、財団法人東洋文庫などに設置された研究拠点とともにイスラーム地域研究ネットワークを形成しつつ、平成23年度からは「イスラームの

思想と政治：比較と連関」をテーマとする共同研究に取り組み、内外の研究者（センター流動教員として他部局・他大学教授4名、センター客員教員として外国人研究者1名）を受け入れ、共同研究を行うとともに、日本学術振興会特別研究員などの若手研究者を本センター研究員として受け入れてきた。このプロジェクトは平成27年度をもって終了した。〈現代インド地域研究〉は水島司教授（東洋史）を兼任教員としている。平成22年4月より、人間文化研究機構「現代インド地域研究」推進事業の一環として、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、国立民族学博物館、龍谷大学の6大学に設置された拠点の一つとして、現代インドに関するネットワーク型の共同研究を推進している。本事業は現代インドの動態を全体的にとらえるとともに、将来を展望できるような学術的な視角と方法論を確立し、国内はもちろん国際的な連携研究も行う組織体制と学術環境を整えることを目的としている。東京大学拠点は、経済発展と環境変動という側面から、現在生じている様々なイシューの解決法を探り出し、将来への知を蓄積することを試みている。そのために、インドの経済と環境に関する基本的な資料や文献を収集・蓄積し、データベースを構築する作業を進め、それらをもとに、インド経済・環境の長期的な動向分析を行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼任および特任教員）

- 先端構想部門
 - 小佐野重利教授（文化交流）
 - 小島毅教授（東アジア海域交流）
 - 向井留実子教授（日本語教育）
- 創成部門
 - 下田正弘教授
 - Albert Charles Muller 教授
 - 長島弘明教授
 - 武川正吾教授
 - 中村雄祐教授
 - 小林正人准教授
 - 高岸輝准教授
 - 高橋典幸准教授
- 萌芽部門
 - 古井戸秀夫教授（演劇学）
 - 松村一登教授
 - 水島司教授（現代インド地域研究）

(2) 助教の活動

國木田 大

在職期間 2015年4月～

研究領域 北東アジア考古学

主要業績

（論文）

Ian Buvit, Masami Izuhō, Karisa Terry, Yorinao Shitaoka, Tsutomu Soda, Dai Kunikita, 「Late Pleistocene geology and Paleolithic archaeology of the Simaki site, Hokkaido, Japan」、『Geoarchaeology』、29、221-237 頁、2014.1

Takao Sato, Fedora Khenzykhenova, Alexandra Simakova, Guzel Danukalova, Eugeniya Morosova, Kunio Yoshida, Dai Kunikita, Hirofumi Kato, Kenji Suzuki, Ekaterina Lipnina, German Medvedev, Nikolai Martynovich, 「Paleoenvironment of the Fore-Baikal region in the Karginian interstadial: Results of the interdisciplinary studies of the Bol'shoj Naryn site」、『Quaternary International』、333、146-155 頁、2014.1

國木田大・シェフコムード・吉田邦夫・松崎浩之、「¹⁴C年代測定と炭素・窒素同位体分析」、『環日本海北回廊の考古学的研究（I）—ヤミフタ遺跡発掘調査報告書—』、東京大学常呂実習施設研究報告第11集、73-81 頁、2014.3

- Dai Kunikita, Igor Ya. Shevkomud, Kunio Yoshida, Hiroyuki Matsuzaki, 「Radiocarbon dating of charred remains on pottery and analyzing food habits of the Osipovka culture, Russian Far East」, 『An archaeological study on prehistoric cultural interaction in the Northern Circum Sea Japan Area(1): Yamikhta site excavation report』, 108-113 頁, 2014.3
- Dai Kunikita, Sergei P. Nesterov, Kunio Yoshida, Hiroyuki Matsuzaki, Shizuo Onuki, 「Radiocarbon dates of charred remains on pottery of the Gromatukha site」, 『An archaeological study on prehistoric cultural interaction in the Northern Circum Sea Japan Area(1): Yamikhta site excavation report』, 114-116 頁, 2014.3
- 出穂雅実・森先一貴・山田哲・國木田大・A.N.ポポフ・Yu.A.ミキーン・B.V.ラジン・佐藤宏之, 「ロシア沿海地方ハサン地区グヴォズデヴォ 5 遺跡の発掘調査」, 『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(II)』, 東京大学常呂実習施設研究報告第 12 集, 172-185 頁, 2014.3
- イアン, ブーヴィット・出穂雅実・國木田大・夏木大吾・山田哲・佐藤宏之, 「吉井沢遺跡における地考古学的調査研究」, 『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(III) — 吉井沢遺跡の研究 —』, 東京大学常呂実習施設研究報告第 13 集, 195-201 頁, 2014.3
- 國木田大・吉田邦夫・松崎浩之, 「吉井沢遺跡出土資料の ^{14}C 年代測定」, 『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(III) — 吉井沢遺跡の研究 —』, 東京大学常呂実習施設研究報告第 13 集, 244-247 頁, 2014.3
- 小熊博史・國木田大, 「岩野原遺跡後期集落出土のクッキー状炭化物の検討」, 『長岡市立科学博物館研究報告』, 49, 37-46 頁, 2014.3
- 福田正宏・グリシェンコ V.・ワシレフスキー A.・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・森先一貴・佐藤宏之・モジヤエフ A.・パシェンツェフ P.・ペレグドフ A.・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲夫, 「サハリン新石器時代前期スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査報告」, 『東京大学考古学研究室研究紀要』, 29, 121-146 頁, 2015.3
- 設楽博己・佐々木由香・國木田大・米田穰・山崎孔平・大森貴之, 「福岡県八女市岩崎出土の炭化米」, 『東京大学考古学研究室研究紀要』, 29, 147-156 頁, 2015.3
- 國木田大, 「湧別市川遺跡の放射性炭素年代測定と炭素・窒素同位体, C/N 比分析」, 『日本列島北辺域における新石器縄文化のプロセスに関する考古学的研究』, 78-84 頁, 2015.3
- 福田正宏・熊木俊朗・國木田大・大貫静夫, 「トコロ 14 類土器とトコロ 13 類土器の再検討」, 『日本列島北辺域における新石器縄文化のプロセスに関する考古学的研究』, 132-149 頁, 2015.3
- 國木田大・松崎浩之, 「2013 年オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」, 『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動』, Vol.1, 78-80 頁, 2016.3
- 國木田大, 「大島 2 遺跡出土炭化材試料の放射性炭素年代測定および土器附着炭化物の炭素・窒素同位体分析」, 『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動—大島 2 遺跡の研究(1)—』, 東京大学常呂実習施設研究報告第 14 集, 90-99 頁, 2016.3
- (解説)
- 國木田大, 「縄文クッキーの材料」, 『大おにぎり展 出土資料からみた穀物の歴史』, 14 頁, 2014.10
- 國木田大, 「土器の発明と縄文クッキーを探る」, 『歴博』, 187, 15-19 頁, 2014.11
- 國木田大, 「シベリア・極東ロシアの遺跡を掘る」, 『フィールドの見方』, 76-92 頁, 2015.6
- 國木田大, 「沖ノ原遺跡のクッキー状炭化物」, 『津南学』, 4, 296-301 頁, 2015.9
- 國木田大, 「年代を測る-放射性炭素年代測定法」, 『沖縄の旧石器人と人類の起源』, 30 頁, 2016.1
- (学会発表)
- 国内, 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・國木田大・大城逸朗, 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査(2009~2013 年度)」, 日本考古学協会第 80 回総会, 東京, 2014.5.18
- 国内, 白杵勲・國木田大, 「北海道における縄文時代年代研究と貝塚の年代測定」, 日本考古学協会 2014 年度大会, 北海道, 2014.10.12
- 国内, 山崎真治・國木田大, 「沖縄先史文化と縄文文化との「遭遇」」, 第 68 回日本人類学会大会, 静岡, 2014.11.2
- 国際, FUKUDAM, KUNIKITAD, 「The Early Jomon settlement of the East Hokkaido -New insights from the fieldworks and the radiocarbon dating-」, Prehistoric cultural exchange between Sakhalin and Hokkaido, Yuzhno-Sakhalinsk, Russia, 2015.1.16
- 国内, 國木田大, 「先史時代における環日本海北部地域の文化交流と社会変容」, 公開講演会 先史時代における日本海域交流, 東京, 2015.1.31
- 国内, 加藤真二・國木田大・高倉純・森川実・芝康次郎・長沼正樹・尾田識好, 「華北土器出現期に関する考察」, 第 16 回北アジア調査研究報告会, 東京, 2015.2.22

- 国内、福田正宏・グリシェンコ,V・ワシレフスキー,A・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・ペレグドフ,A・内田和典・森先一貴・役重みゆき・夏木大吾・山下優介、「サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査(2014年度)」、第16回北アジア調査研究報告会、東京、2015.2.22
- 国内、國木田大、「極東地域東北部における縄文草創期から早期の年代的な位置づけ」、日本考古学協会第81回総会、東京、2015.5.24
- 国内、國木田大・松崎浩之・阿部昭典、「器種・サイズによる縄文土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比の差異」、日本文化財科学会第32回大会、東京、2015.7.11
- 国内、國木田大・松崎浩之・山原敏朗・石川朗、「北海道東部における縄文時代早期の年代測定と食性分析」、日本文化財科学会第32回大会、東京、2015.7.11
- 国際、MORISAKI K, KUNIKITA D, 「Relation between lithic technology and environment in Early Neolithic Northernmost Japan」、XIX INQUA Congress、Nagoya, Japan、2015.7.29
- 国際、MIYAJI T, SHODA S, WATANABE T, KUNIKITA D, VOSTRERSOV Y, 「Daily-resolution reconstruction of middle Holocene climate using bivalve *Phacosoma japonicum* at Vostok Bay, Far East Russia」、XIX INQUA Congress、Nagoya, Japan、2015.8.1
- 国際、Dai Kunikita, Alexander N. Popov, Boris V. Lasin, Kazuki Morisaki, Hiroyuki Matsuzaki, 「Dating and stable isotope analysis of charred residues from Neolithic sites in the Russian Far East」、22st International Radiocarbon Conference、Senegal, Dakar、2015.11.16
- 国内、福田正宏・Grishchenko V.A.・大貫静夫・Vasilevskii A.A.・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・Gorshkov M.V.・Shipovalov A.M.・Gabrilchuk M.A.・森先一貴・内田和典・夏木大吾・Shevkomud I.Ya.、「環日本海北回廊の考古学的研究—到達点と今後の課題—」、日本シベリア学会第1回大会、北海道、2015.11.22
- 国内、國木田大、「土器の発明と縄文クッキーを科学分析で探る」、八戸市是川縄文館考古学講座、青森、2016.1.16
- 国内、内田和典・S.P.Nesterov・A.V.Tabarev・國木田大・森先一貴、「アムール西部新石器文化編年の再検討」、第17回北アジア調査研究報告会、石川、2016.2.27
- 国内、國木田大・ポポフ A.N.・ラシン B.V.・森先一貴・松崎浩之、「ロシア極東新石器時代遺跡における土器付着炭化物の¹⁴C年代」、第18回AMSシンポジウム、東京、2016.3.4
- (研究報告書)
- 國木田大・松崎浩之、「秋田県北秋田市石倉岱遺跡 2012年度発掘調査報告書 國學院大學文学部考古学実習報告第49集」、111-118頁、2014.3
- 國木田大・松崎浩之、「ロシア沿海地方の初期金属器時代」、73-74頁、2014.3
- 國木田大・松崎浩之、「長畑遺跡発掘調査報告書—月布川流域における縄文時代遺跡の研究 3—」、49-50頁、79-87頁、2014.3
- 山崎真治・黒住耐二・國木田大、「慶良間諸島の遺跡」、103-106頁、2016.3
- 國木田大、「東京都調布市史跡下布田遺跡第2・3・7・8地点」、124-127頁、2016.3
- (予稿・会議録)
- 国内会議、國木田大、「石刃鏃石器群の年代」、科学研究費助成事業 『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会、東京、2014.2.15
- 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明—「石刃鏃文化」に関する新たな調査研究—』、25-34頁
- 国内会議、白杵勲・國木田大、「北海道における縄文時代年代研究と貝塚の年代測定」、2014.10.12
- 『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集』、233-240頁

30 死生学・応用倫理センター

1. センター活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として平成23年4月に設けられた。それに伴い「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（会田特任准教授、池澤教授、一ノ瀬教授、小島教授、榊原教授、佐藤健二教授、清水特任教授、下田教授、白波瀬教授、堀江准教授）により行われる。所属教員は会田特任准教授、清水特任教授、堀江准教授（以上専任）、池澤教授、榊原教授（以上兼任）である。

死生学・応用倫理センターの活動は、以下の四つを柱とする。

- ① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これらは今までグローバルCOEの活動として行われてきたが、今後もそれを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元モデルケースとなるであろう。
- ② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の開設：文学部は既に「応用倫理教育プログラム」として応用倫理教育を展開してきたが、それを学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。
- ③ 国際シンポジウム・研究集会：21世紀COE、グローバルCOEを通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができており、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。
- ④ 次世代を担う若手研究者の育成：COEプログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためグローバルCOEの機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

以下、この四つについて活動報告を行う。

① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育

これは「上廣死生学・応用倫理講座」の担当であり、平成26年度には4月と8月には《医療・介護従事者のための死生学》セミナーを東京大学において開催したほか、臨床倫理セミナーを5月（仙台）、8月（札幌）、9月（磯波）、10月（金沢）、1月（大阪、愛媛）、2月（大隅）に計七回開催した。また、臨床死生学・倫理学研究会を計十一回開催した。

平成25年度には「医療・介護従事者のための死生学」は5月に春期講座を、8月に夏期セミナーを開講した。「臨床倫理セミナー」は5月（札幌）、7月（仙台）、9月（愛媛、金沢）、12月（札幌）、1月（大阪）に計七回行った。また、「臨床死生学・倫理学研究会」を計十回開催した。

なお、リカレント教育は上廣死生学・応用倫理講座が担当であるので、詳細はそちらの頁を参照されたい。

② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」

「死生学・応用倫理教育プログラム」は平成24年4月から新たに開設したもので、東京大学の部局横断型教育プログラムの一つであるだけでなく、後期教養科目にも指定されている。平成24年度の開設科目は28科目（うち死生学・応用倫理センターで直接開講するのは19）、平成25年度には33（センター開講が21）、平成26年度には28（センター開講が21）、平成27年度には31（センター開講が22）あった。平成26、27年度に開設した「死生学・応用倫理教育プログラム」授業科目は以下の通りである。

平成26年度

死生学概論（死生学の射程） 清水哲郎ほか

応用倫理概論（応用倫理入門） 池澤優ほか

死生学演習Ⅰ（臨床死生学・倫理学の諸問題） 清水哲郎・会田薫子

死生学演習Ⅱ（『継続する絆』を読む） 堀江宗正

死生学演習Ⅲ（死生学基礎文献講読） 池澤優

死生学演習Ⅳ(1)（生命倫理の現在(1)） 会田薫子

死生学演習Ⅳ(2)（生命倫理の現在(2)） 会田薫子

応用倫理演習Ⅰ（戦後日本社会と生命倫理） 小松美彦

応用倫理演習Ⅱ（ポスト3.11のモラル再考—自然災害からの復興と放射能問題の帰趨） 一ノ瀬正樹

応用倫理演習Ⅳ（リスク社会論を考える） 堀江宗正

死生学特殊講義（死生学の射程(続)） 清水哲郎・会田薫子
 死生学特殊講義（臨床死生学原論） 清水哲郎
 死生学特殊講義（質的研究法） 会田薫子
 死生学特殊講義（死生のケアの現象学） 榊原哲也
 死生学特殊講義（現代日本人の死生観を問う） 堀江宗正
 応用倫理特殊講義（臨床倫理学原論） 清水哲郎
 応用倫理特殊講義（ポスト3.11の環境倫理再論） 鬼頭秀一
 応用倫理特殊講義（自然の時間、人間の時間） 内山節
 応用倫理特殊講義（ニューロエシックス） 虫明茂
 特別講義医事法 樋口範雄・児玉安司【法学部】
 家族看護学 上別府圭子・佐藤伊織・福澤利江子【医学部】
 生・権力論と教育 金森修【教育学部】
 西洋教育史概説 川本隆史【教育学部】
 生命倫理 正木春彦ほか【農学部】
 技術倫理 正木春彦ほか【農学部】
 応用倫理学概論 廣野喜幸【教養学部】
 特殊講義 文化の社会科学 市野川容孝【教養学部】
 科学技術社会論特論Ⅰ 松本真由美【教養学部】

平成27年度

死生学概論（死生学の射程） 清水哲郎ほか
 応用倫理概論（応用倫理入門） 池澤優ほか
 死生学演習Ⅰ（臨床死生学・倫理学の諸問題） 清水哲郎・会田薫子
 死生学演習Ⅱ（『死別について—悲嘆の文化』を読む） 堀江宗正
 死生学演習Ⅲ（死生学基礎文献講読） 池澤優
 死生学演習Ⅳ(1)（生命倫理の現在(1)） 会田薫子
 死生学演習Ⅳ(2)（生命倫理の現在(2)） 会田薫子
 応用倫理演習Ⅰ（生命倫理の超克へ） 小松美彦
 応用倫理演習Ⅱ（P.シンガーの生命倫理研究） 一ノ瀬正樹
 応用倫理演習Ⅳ（世代間倫理は可能か） 堀江宗正
 死生学特殊講義（死生学の射程(続)） 清水哲郎・会田薫子
 死生学特殊講義（臨床死生学原論） 清水哲郎
 死生学特殊講義（質的研究法） 会田薫子
 死生学特殊講義（ケアの現象学の展開） 榊原哲也
 死生学特殊講義（死生学の理論） 堀江宗正
 死生学特殊講義（事例から読み解く生きづらさ） 大塚類
 応用倫理特殊講義（臨床倫理学原論） 清水哲郎
 応用倫理特殊講義（中国宗教と環境倫理） 池澤優
 応用倫理特殊講義（終末論的思考と希望の倫理） 堀江宗正
 応用倫理特殊講義（生命と環境の倫理） 桑子敏雄
 応用倫理特殊講義（現象学的な質的研究の方法論と実践） 村上靖彦
 特別講義医事法 樋口範雄・児玉安司・米村滋人【法学部】
 家族看護学 上別府圭子・佐藤伊織【医学部】
 生・権力論と教育 金森修【教育学部】
 西洋教育史概説 川本隆史【教育学部】
 生命倫理 正木春彦ほか【農学部】
 技術倫理 正木春彦ほか【農学部】
 応用倫理学概論 石原孝二【教養学部】
 特殊講義 文化の社会科学 市野川容孝【教養学部】
 科学技術リテラシー論Ⅱ 松本真由美【教養学部】

③ 国際シンポジウム・研究集会

平成26年は、9月4日にジュリアン・サヴァレスキョ教授公開講演会「生命に働きかける道徳的エンハンスメントを理解する」を、11月19日にトニー・ウォルター教授公開講演会「死と臨終、東と西と」を、12月20日に国際シンポジウム「東アジアの死生学へ」、2月8日にシンポジウム「エンドオブライフ・ケア—最期のプロセスの臨床倫理」を開催した。なお、国際シンポジウムは韓国の代表的死生学研究機関である翰林大学校死生学研究所との共催であり、その内容は以下の通りである。

趣旨説明 池澤 優「文化的差異の視点から死生学を考える」

発表1 裴 寛紋「韓国における死生学研究の現況と課題」

発表2 清水 哲郎「日本における臨床死生学と臨床倫理学の交叉」

質疑応答

発表3 李 窓益「セウォル号沈没事故と死の表象の疫学—韓国社会において死ぬということの意味」

発表4 松本 俊彦「日本における若者の自殺関連事象—身体改造とインターネットとの関連」

発表5 呉 進鐸「自殺者の死の認識に関する分析—自殺者の遺書を中心に」

平成25年度は、8月29日にトム・ダグラス氏公開講演会「Neurocorrectives: An Ethical Assessment of Direct Brain Interventions in Criminal Rehabilitation」を、2月7日にシンポジウム「救急医療のエンドオブライフ・ケア—法と倫理と臨床現場」、3月12日に国際シンポジウム「アジアの発展の諸矛盾と死生学の探究」を韓国で開催した。なお、国際シンポジウムは24年度からの続きであり、翰林大学校死生学研究所で開催された。

④次世代を担う若手研究者の育成

死生学・応用倫理の未来を担う若手研究者を育成するために、平成26年度は特任研究員5名（うち二人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用し、平成27年度は4名（うち二人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用した。

特任研究員はセンターの諸活動の中核を担うだけでなく、センター機関誌である『死生学・応用倫理研究』に研究成果を積極的に発表することが期待されている。『死生学・応用倫理研究』は、グローバルCOE「死生学」の機関誌として発行してきた『死生学研究』を改名して継続刊行しているものであり、平成26年度で20号を、平成27年度には21号を刊行した。

また、上廣死生学・応用倫理講座では高齢患者と家族の意思決定のためのガイドブック『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族の選択のために』（清水哲郎・会田薫子著、医学と看護社、2013）を刊行し、死生学の成果を実践の現場に提供することに務めている。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田 薫子、池澤 優（センター長）、榊原 哲也、清水 哲郎、堀江 宗正

(2) 特任研究員

圓増 文、勝沼 聡、Erik Schicketanz、宮村 悠介（以上、平成27年3月まで）

大島 智靖

田村 未希、山本 栄美子（以上、平成27年4月から）、金 律里（平成27年8月から）

(3) 事務補佐員

安野 裕美

3 1 北海文化研究常呂実習施設

1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約2万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連続と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カンワヤナラの林の中に2,500を超える堅穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は1955年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967年からは助手1名が文学部考古学研究室から派遣され、1973年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、准教授・助教各1名、有期雇用職員（管理人等）2名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。ほかに、2014年度からは文学部夏期特別プログラムの後半部分が常呂実習施設で開講され、東大の学部学生と海外の学生が遺跡発掘体験などのプログラムを通して交流している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は14冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、2014年度～2015年度にかけてもロシア連邦のアムール下流域やサハリンにおいて、現地の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら発掘調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した14冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたのものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元堅穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに2000年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2015年度までに19回を教えている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

(2) 助教の活動

國木田 大 KUNIKITA, Dai
在職期間 2010年4月～2015年3月
研究領域 北東アジア考古学
主要業績 29 次世代人文学開発センター 参照

夏木 大吾
在職期間 2015年4月～
研究領域 先史考古学
主要業績
(論文)

夏木大吾、「玄蕃所遺跡における石器群の考察」、『東京大学構内遺跡調査研究年報』、9、161-164頁、2015.5

夏木大吾、「北海道の晩氷期—細石刃・遊動—」、『季刊考古学』、132、雄山閣、59-62頁、2015.7

(予稿・会議録)

国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「北見市 大島2遺跡」、北海道考古学会2015年度遺跡調査報告会、札幌、2015.12.12

『2015年度遺跡調査報告会資料集』、63-70頁、2015.12

国内会議、夏木大吾・山田・中村雄紀・廣松滉一・吉留頌平・尾田識好・佐藤宏之・熊木俊朗・小澤太一・木之内忍・ツイデノバ、ナタリア、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果(第9次)」、第17回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2016.2.27

『第17回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、2-5頁、2016.6

国際会議、Kazuki Morisaki and Daigo Natsuki、「Human behavioral change and the appearance of Incipient Jomon pottery」、XIX INQUA NAGOYA、名古屋国際会議場、2015.7.28

『XIX INQUA CONGRESS; Quaternary Perspectives on Climate Change, Natural Hazards and Civilization』、50頁、2015.7.26

国際会議、Daigo Natsuki and Hiroyuki Sato、「Invisible hearths and restoring human behavior: High resolution archaeological analysis at Yoshiizawa site of northern Japan」、The 20th(2) International Symposium Suyanggae and Her Neighbours in Korea、韓国忠北大学、2015.11.3

『XIX INQUA CONGRESS; Quaternary Perspectives on Climate Change, Natural Hazards and Civilization』、50頁、2015.11.1

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

1. 寄付講座活動の概要

本講座は、公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付講座「上廣死生学講座」として平成19年度から第1期5年間の活動を行ったのち、平成24年度から「上廣死生学・応用倫理講座」として寄付講座第2期の活動を行っている。第1期は、次世代人文学開発センターに属し、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動を行ったが、第2期は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の活動を継いで平成23年度に発足した「死生学・応用倫理センター」に属して、死生学の臨床にかかわる面および応用倫理の一領域である臨床倫理を中心に活動を進めている。本講座は特任教授1名、特任准教授1名に加えて平成26・27年度は上廣倫理財団からの追加寄付により2名の特任研究員を雇用することができた。また、本講座の統括責任者は神原教授であり、また本講座の上部組織である死生学・応用倫理センターのセンター長は池澤教授である。この2名に加えて、同センター堀江准教授に、特にリカレント教育等について協力していただき、活動を進めている。本講座第2期5年間の目的については次のように規定している。

本講座は、東京大学死生学・応用倫理センターの中にあつて、

- (a) 臨床現場を中心とする人間の生活の場において、物語られるいのちを生きつづめる人々の生活に即した死生学と現実の諸問題に即した倫理的あり方を実践的に研究し、研究成果の社会への還元が現実の人々の人生をより豊かにすることに貢献し、またその還元する活動が同時に研究活動でもあるような実践的学問を展開し、かつ、
- (b) 研究成果を社会に還元する活動としての「リカレント教育」を行い、研究を背景にした部局横断型「死生学・応用倫理プログラム」の一翼を担うこと

を目的とする。

この目的に応じて、本講座の活動は、1)実践的研究活動、2)学部・大学院教育、および3)社会貢献（リカレント教育その他、実践的研究と連動するものから成っている。これらに関する平成26-27年度の実績概要は次のとおりである。

1) 実践的研究活動

臨床倫理プロジェクト（臨床死生学を含む）として、臨床現場における実践的研究を推進し、臨床倫理検討システムの明確化と研修用カリキュラム化をすすめた（科研費基盤Aを23～26年度、および27～30年度得て行っている）。研究会用テキスト『臨床倫理エッセンシャルズ』は何回か改訂して最新版は「2016年春版」になっている。また、入門のためのより分かり易いウェブ・バージョンも、平成26年度末にアップし、その後継続的に改訂を続けている。臨床倫理セミナーは平成26年度には、仙台（1回）、大阪（2グループ、計2回）、札幌（2グループ、計2回）、砺波（1回）、金沢（2グループ、計2回）、愛媛（1回）、鹿屋（1回）、広島（1回）、佐久（1回）と、東京大学本郷キャンパスで開催したもの（後述の春季セミナー）を含めると、計13回開催し、延べ約2000名の参加者を得た。平成27年度には、従来の開催グループによるもの（札幌2回、仙台1回、愛媛1回、金沢1回、大阪1回、佐久1回）に加え、富山（射水市）、久留米にもセミナー開催を支えるグループができ、セミナーを計10回開催し、延べ約1700名の参加者を得た。このうち4か所（札幌、大阪、愛媛、広島）は回を重ねており、入門編の講義と並行してリピーター向けのアドバンストコースの講義をするようになった。このようにして育った医療従事者が医療現場で臨床倫理の営みを実践することによって日本の医療の質が向上するという見込みが、現実的になってきている。加えて、医療現場で臨床倫理の営みを活性化する役割を担うファシリテーター養成研修会もこの二年間は毎年札幌と大阪で実施した。

高齢者ケアの分野では、人工的水分・栄養補給に関する本人・家族の意思決定を支援する「意思決定プロセスノート」をモデルにして、高齢者の人工透析の導入に関する意思決定を支援するプロセスノートを、現場の専門家のグループを支援して作成し、27年度に書籍として刊行するにいたった。

また、RISTEXの経費による研究開発事業（平成24年度後半～27年度前半）は、高齢者および高齢期に近づいている人々のための、高齢期を通してのケアについて予め心積りをしておく営みを支援する『心積りノート』第1版を刊行し、紙媒体の他eBookにしてウェブ上で公開している。

以上の高齢者ケアに関する活動の共通の基礎として、ACP（アドバンスト・プランニング/ケア計画事前策定プロセス）の考え方および老いて衰えていくあり方（フレイル/frailty）の理解についての研究と発信を進めた。

若手研究者による他のトピック（子宮内膜症の治療）についてのプロセスノート作りも順調に進んでいる。

以上については、相当部分を次のウェブ上に成果を公開している（「臨床倫理プロジェクト」で検索）。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/index-j.html>

☆臨床倫理セミナー開催実績 () 内は参加者数

東京 2014年4月20日(130)	下記 春季セミナー参照
仙台 2014年5月10日(90)	東北大学大学院医学系研究科 緩和ケア看護学研究室と共催
大阪 2014年7月27日(70)	公益社団法人日本医療社会福祉協会主催に協賛
札幌 2014年8月24日(169)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
砺波 2014年9月28日(45)	RISTEX 受託研究の一環としてナラティブホームと協働で実施
金沢 2014年10月4日(80)	北陸がんプロ養成(石川県立看護大学)を後援
金沢 2014年10月5日(200)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
大阪 2015年1月10・11日(560)	臨床倫理事例研究会主催に協力
松山(愛媛) 2015年1月24日(265)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
札幌 2015年1月31日(50)	東札幌病院臨床倫理委員会と共催
鹿屋(大隅) 2015年2月15日(60)	県民健康プラザ・鹿屋医療センター主催に共催
広島 2015年2月22日(182)	中国地区臨床倫理事例研究会に協力
佐久 2015年3月14日(80)	佐久総合病院主催のセミナーに協力
大阪 2015年5月9日(140)	上記 春季セミナー参照
札幌 2015年5月31日(110)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
仙台 2015年7月4日(90)	東北大学大学院医学系研究科 緩和ケア看護学研究室と共催
松山(愛媛) 2015年9月13日(211)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
金沢 2015年9月19日(270)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
射水(富山) 2015年11月21日(60)	白ヤギ在宅クリニック、富山福祉短大等の合同主催に共催
久留米(福岡) 2015年12月13日(114)	ちくご緩和研究会主催、久留米病院看護部実行を後援
札幌 2015年12月20日(120)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
大阪 2016年1月9・10日(500)	関西臨床倫理研究会主催に協力
佐久(長野) 2016年3月5日(100)	佐久総合病院主催のセミナーに協力

2) 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」への参加

引き続き学部横断型の教育プログラムに貢献する授業を数多く提供し、また、コア授業の一つである「死生学概論」については本講座スタッフが企画・運営を担当した。

平成26年度・27年度

清水・会田他 死生学概論〔死生学の射程〕	夏学期 木曜日 2限
池澤他 応用倫理概論(会田は1回担当)	夏学期 金曜日 3限
清水・会田 死生学特殊講義〔死生学の射程(続)〕	冬学期 木曜日 2限
清水・会田 死生学演習Ⅰ〔臨床死生学・倫理学の諸問題〕	通年 水曜日 5限 不定期
清水 応用倫理特殊講義〔臨床倫理学原論〕	夏学期 水曜日 3限
清水 死生学特殊講義〔臨床死生学原論〕	冬学期 水曜日 3限
会田 死生学演習Ⅳ(1)〔生命倫理の現在(1)〕	夏学期 火曜日 2限(H26)/5限(H27)
会田 死生学演習Ⅳ(2)〔生命倫理の現在(2)〕	冬学期 火曜日 2限(H26)/5限(H27)
会田 死生学特殊講義〔質的研究法〕	夏学期 火曜日 4限

3) 社会貢献

リカレント教育「医療・介護従事者のための死生学」として年間2回のセミナー、本講座が主催ないし協力する特別開催の行事(海外の研究者等講演会4回、冬季シンポジウム)、各地で行う臨床倫理セミナーとファシリテーター養成研修(上述)、各種「臨床死生学・倫理学研究会」等の研究会を催して、研究成果の社会還元を努めた。また、講座特任教員清水と会田は招待講演等の依頼が多くあるが、講師として話す内容は研究成果を核とするものに他ならない。

このうち、冬季セミナーも兼ねたシンポジウムは、平成26年度(参加者約500名)は、人生の最終段階における困難な問題に対する臨床倫理的アプローチを、いくつかの臨床領域の専門家を招いて、検討した。また、平成27年度(参加者約300名)は、救急医療に焦点をあてて前年度のシンポジウムに引き続いてエンドオブライフ・ケアの臨床倫理をテーマとして開催した。いずれも参加者は熱心に講演およびディスカッションに聴き入り、ディスカッションも充実したものとなった。参加者数をみるだけでも、本講座の冬季シンポジウムが一般市民および医療・ケア関係者に支持され、期待されていることが明らかである。

☆リカレント教育セミナー☆

◇ 春季セミナー 臨床倫理—考え方と事例検討

2014年4月20日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 山上会館

1. 講義 [入門コース]

会田薫子「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」

清水哲郎「臨床倫理検討シートの使い方&問題の整理・分析・対応」

[アドバンストコース]

清水哲郎「臨床倫理エッセンシャルズ トピック」

会田薫子「高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法の考え方」

2. 事例検討 [事例の説明・質疑—グループワーク—全体討議]

事例提供者 姫野秀朗(藤沢市民病院) / 戸田悦子(砂川市立病院附属看護専門学校)

3. 講演 石垣靖子(北海道医療大学)「人として遇すること(尊重すること)」

◇ 夏季セミナー(基礎コース 初心者向け)

2014年8月3日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス法文二号館一番大教室

1. 死生学コア 池澤優「死生学とは何か—過去に学び、現在に向き合い、未来を展望する」
2. 死生学トピック 堀江宗正「霊といのち—日本人における死後観の相克」
3. 臨床死生学コア1 清水哲郎「臨床死生学の現在」
4. 臨床死生学コア2 会田薫子「本人の意思を尊重するための取り組み—ACPの考え方」
5. 臨床死生学トピック 榊原哲也「ケアの現象学—急性疾患と慢性疾患をめぐって」

◇ 冬季セミナー 2015年2月8日開催のシンポジウム(次項参照)を充当した。

◇ 春季セミナー 臨床倫理セミナー@大阪

2015年5月9日(土) 午前・午後 天満研修センター(大阪市) 参加者 約140名

1. 講義 清水「臨床倫理:考え方と検討の実際」
2. 事例検討(事例紹介・質疑/グループワーク・全体会)
3. 講義 会田「フレイルの知見を高齢者医療に活かす」

・大阪在住の医師たちがリードするグループのセミナー企画に応じて、臨床倫理プロジェクト主催で開催したものの

◇ 夏季セミナー(基礎コース 初心者向け)

2015年8月1日(日) 午前・午後 東京大学 伊藤国際学術研究センター伊藤ホール 参加者 253名

1. 臨床死生学コア 清水哲郎「エンドオブライフ・ケアの死生学」
2. 臨床死生学トピック 会田薫子「フレイルの知見を臨床に活かす—高齢者医療とケアの新たな視点」
3. 死生学コア 池澤優「死生学と死生観—《死者性》の視点から」
4. 死生学トピック 堀江宗正「死に関する表現—日本語と外国語の語彙の比較から」
5. 臨床死生学トピック 榊原哲也「患者をトータルに見るとはどのようなことか—現象学的視点から」

・当初 会場は人文社会系研究科一番大教室を予定していたが、参加申し込み受付開始から数時間で定員オーバーとなったため、急遽会場を変更した。

◇ 冬季セミナー 2016年2月7日開催 シンポジウム(次項参照)を充当。

☆シンポジウム☆

◇ シンポジウム「エンドオブライフ・ケア—最期のプロセスの臨床倫理—」

・日時:2015年2月8日(日)13時~17時

・会場:東京大学本郷キャンパス 伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール

・主催:東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」(科学研究費基盤(A)によるもの)

シンポジスト

清水哲郎(東京大学)「end-of-life careの臨床倫理」

林章敏(聖路加国際病院)「希死念慮への対応としての持続的鎮静に関する考察」

三浦靖彦(東京慈恵会医科大学附属柏病院)「慢性腎臓病患者のエンドオブライフ・ケア」

荻野美恵子(北里大学東病院)「筋委縮性側索硬化症」

座長 会田薫子(東京大学)

講演 石垣靖子(北海道医療大学)「人として遇するということ」

◇ シンポジウム「救急医療のエンドオブライフ・ケア—法と倫理と臨床現場—」

・日時:2016年2月7日(日)13時~17時

- ・会場：東京大学本郷キャンパス 伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール
- ・主催：東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」

シンポジスト

有賀徹	昭和大学病院長・救急医学講座教授
樋口範雄	東京大学大学院法学政治学研究科教授
清水哲郎	東京大学大学院人文社会系研究科特任教授
荒木尚	日本医科大学救急医学講座講師
森朋有	黒松内町国民健康保険病院医師
座長 会田薫子	東京大学大学院人文社会系研究科特任准教授

☆公開講演☆

◇ジュリアン・サヴァレスキュ(Julian Savulescu)教授 公開講演会

- ・講演テーマ：「生命に働きかける道徳的エンハンスメントを理解する」

Understanding Moral Bioenhancement: A Philosophical Approach to Objections

- ・2014年9月4日(木曜日) 午後4時～7時 山上会館大会議室

同教授はオックスフォード大学上廣応用倫理センター教授。上廣倫理財団の企画で来日中に当方が主催して行った。

◇トニー・ウォルター(Tony Walter)教授 公開講演会

- ・講演テーマ：「死と臨終、東と西と」 Death and Dying in the East and the West

- ・2014年11月19日(水曜日) 午後7時～9時、法文2号館 2番大教室

同教授は、バース大学死と社会センターのセンター長。上廣倫理財団の研究助成を受けた他大学の招へいにより来日した折に、本講座が主催して本学でも講演をしていただいたもの。

◇トム・ダグラス(Tom Douglas)氏 公開講演会

- ・講演テーマ：Neurocorrectives: An Ethical Assessment of Direct Brain Interventions in Criminal Rehabilitation

- ・2015年8月29日(土) 午後4時～6時、本郷キャンパス 法文1号館215教室

同氏は、オックスフォード大学 上廣応用倫理センター上級研究員。

◇シャボットあかね氏 公開講演会

- ・講演テーマ：「オランダの安楽死の現在」

- ・2016年2月11日(木曜日・祝日) 午後4時～6時、本郷キャンパス 法文2号館 1番大教室

同氏は、日本生まれ、結婚後オランダ在住40年。ベテランの通訳、コーディネーター。同国の安楽死事情に詳しい。

☆臨床死生学・倫理学研究会

[2014年度]

1. 4月16日(水)「日本人の死生観をどうとらえるか——量的調査を踏まえて」堀江宗正(東京大学死生学・応用倫理センター 准教授)
2. 5月7日(水)「Advance Care Planning の考え方」会田薫子(東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座 特任准教授)
『心積もりノート』の試み」清水哲郎(東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座 特任教授)
3. 5月28日(水)『子宮内膜症版意思決定プロセスノート』——作成と背景—— 圓増文(東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座特任研究員)、日笠晴香(日本学術振興会 特別研究員)
4. 6月11日(水)「ナラティブエシックスと倫理コンサルテーション」金城隆展(琉球大学医学部附属病院地域医療部 特命職員 倫理コンサルタント)
5. 7月2日(水)「人生を振り返り記述する作業を通じて終末期医療の希望を書き残す『ライフデザインノート』の開発～実践的介入研究からの示唆～」島田千穂(東京都健康長寿医療センター研究所)
6. 7月16日(水)「自殺(自死)者、年間3万人の時代を考える」早瀬圭一(ノンフィクション作家・毎日新聞社客員編集委員)
7. 10月1日(水)「人生、最終章のケアについて考える——ある事例のプロセスをもとに」竹澤春枝(在宅ケアについて考える会 代表)
8. 10月22日(水)「緩和ケアにおける“スピリチュアルな転回”——欧州におけるホスピス・緩和ケアの展開をめぐって」竹之内裕文(静岡大学農学部 教授)
9. 11月12日(水)「C・ソンドースと用語『トータル・ペイン』の生成——緩和ケアの倫理のために」宮村悠介(東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座 特任研究員)

10. 12月10日(水)「終末期における患者の権利——フランスとベルギーの比較から——」本田まり(芝浦工業大学工学部共通学群人文社会科目 准教授 法学・生命倫理)
11. 1月14日(水)「死別の心理～基礎知識と心理学研究(故人との絆の継続、終末期における思いの言語化をテーマに)～」中里和弘(東京都健康長寿医療センター研究所 研究員)

[2015年度]

1. 4月15日(水)「医療における安全管理の役割」中島勸(東京大学大学院医学系研究科救急医学講座准教授(東京大学医学部附属病院救命救急センター センター長))
2. 5月13日(水)「精神障がい者から家族が受ける暴力の実態—閉ざされた家」蔭山正子(東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 助教)
3. 6月3日(水)「合意形成手法を取り入れた倫理教育プログラムの開発」吉武久美子(東京工科大学医療保健学部看護学科 准教授)
4. 6月24日(水)「イタリアにおける看取りの現状—ローマにおける質的調査から」福島智子(松本大学人間健康学部健康栄養学科 准教授)
5. 7月15日(水)「『いのち』の個性性・『つながり』の間柄を考える—倫理学者(ピーター・シンガーと和辻哲郎)の比較を中心に」山本栄美子(東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座 特任研究員)
6. 9月16日(水)「動物の地位をめぐる言説—有益な他者、家族、平等ないのち」梶原葉月(立教大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程・Pet Lovers Meeting 代表)
7. 10月7日(水)「脳科学研究の倫理を再考する」中澤栄輔(東京大学医学部健康総合科学科保健管理学教室 助教)
8. 11月4日(水)「急性期病院での終末期医療の実際：臨床医の経験から」森朋有(黒松内町国民健康保険病院非常勤医師・東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療倫理学分野博士課程)
9. 11月25日(水)「小児の脳死診断と諸問題について—日本・カナダの比較から」荒木尚(日本医科大学救急医学講師)
10. 12月16日(水)「共苦の可能性と不可能性について」早川正祐(三重県立看護大学 准教授)

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

清水 哲郎	特任教授	哲学、臨床倫理学・臨床死生学、西欧中世思想
会田 薫子	特任准教授	臨床倫理学、医療倫理学、臨床死生学、医療社会学

(2) 特任研究員

圓増 文	特任研究員(～平成26年度)	哲学、医療倫理
宮村 悠介	特任研究員(～平成26年度)	哲学(倫理学)
山本 栄美子	特任研究員(平成27年度～)	宗教学、倫理思想
田村 未希	特任研究員(平成27年度～)	哲学(現象学)

(3) 事務補佐員

安野 裕美

3 3 集英社 高度教養寄付講座

1. 寄附講座活動の概要

「集英社高度教養寄付講座」は、本郷キャンパスおよび柏フューチャーセンターにおいて学部後期課程と大学院生を対象とした後期教養および高度教育授業を展開し、成績評価やアンケート等を通してその効果を検証しながら、分野を超えた「教養としての人文学」の新しい形のあり方を研究するために、3年間の期間にて設置された。

それぞれ文学部一般講義（大学院共通科目）と新領域創成科学研究科特別講義として、後期教養講義および高度教養講義を展開するとともに、文学部において各タームに公開講演会1回を開催している。また、柏フューチャーセンターでもS1とA2タームの講義の最終回に柏商工会議所と連携して公開講演会を開催した。

2015年度の活動の概要

人文社会系研究科・文学部で開講（学部・大学院共通科目）

授 業 科 目	担当教員		開講ターム	単位数	曜 時
	職 名	氏 名			
英語で書かれた現代小説を訳す/読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜2限
現代英語圏小説入門	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜4限
ヨーロッパ文化論(1)	特任准教授	河村 英和	S1+S2	2	木曜5限
ヨーロッパ文化論(2)	特任准教授	河村 英和	A1+A2	2	木曜5限
ヴァージニア・ウルフ「ダロウェイ夫人」を読む	本部特任教授	高橋 和久	S1+S2	2	金曜3限

新領域創成科学研究科共通科目として開講

授 業 科 目	担当教員		開講ターム	単位数	曜 時
	職 名	氏 名			
新領域創成科学特別講義Ⅰ（「美術の見方、考え方」）	教授 准教授	小佐野 重利 高岸 輝	S1	2	土曜集中
新領域創成科学特別講義Ⅱ（「東アジア地域の文化交流」）	教授	小島 毅	S2	2	毎週土曜
新領域創成科学特別講義Ⅲ（「観光と建築の文化史」）	特任准教授	河村 英和	A1	2	毎週土曜
新領域創成科学特別講義Ⅳ（「人文知としての心理学」）	元教授	立花 政夫	A2	2	毎週土曜

公開講演会（本郷キャンパス）

- 第1回 2015年5月10日 『読む・書く・学ぶ』
小野正嗣（作家・立教大学准教授）
- 第2回 2015年7月4日 2015年の源氏物語
マイケル・エメリック（UCLA 准教授）、角田光代（作家）、藤原克己（本学文学部教授）
- 第3回 2015年10月3日 春画とはなんだろう
木下直之（本学文学部教授）
- 第4回 2015年11月21日 アカデミズムとパフォーマンスのあいだで
管啓次郎（明治大学教授）、岩切正一郎（国際基督教大学教授）
ゲスト 小島ケイタニーラブ（シンガーソングライター）、那須佐代子（女優）
古川日出男（小説家）

公開講演会（柏フューチャーセンター）

- S1ターム 2015年5月23日 レオナルド・ダ・ヴィンチー稀代の素描家にして思索家—
小佐野重利（本学文学部教授）
- A1ターム 2015年12月19日 逃避行動—目は脳に何を伝えるか?—
立花政夫（本学文学部元教授）

2. 構成員

(1) 教員(専任、兼担および特任教員)

柴田元幸 特任教授
河村英和 特任准教授

(2) 助教の活動

西川賀樹 第I部 5-(4)-B 情報メディア室 参照

3 4 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、平成7年4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成5年度より部分的に試行されてはきたが、平成7年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートすることになったのである。

発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられた。そして、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3~4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められてきた。なお2000年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

このプロジェクトは、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

平成11年度からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた「情報と文化：文化資源と人文社会学」は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかにも、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成14年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、下記の「生命をめぐる科学と倫理」において主眼的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトが、新しい研究領域の開拓と同時に、学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになっていったことは特筆すべき事態であったと言える。3.11に関する議論は、平成24年、25年と、継続的に行われ、多分野交流の特筆が大いに発揮される内容となった。また、東京大学草創期の授業を再現する試みも多分野交流演習として行われ、本演習の果たす役割の拡大が着々と図られている。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年に数回ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

平成26年度（2014年度）・平成27年度（2015年度）に開講されたプロジェクトは以下の通り。

平成26年度（2014年度）

東京大学草創期の授業再現（葛西康徳・小島毅）
リズムの諸問題2 リズムと芸術（鈴木泉）

平成27年度（2015年度）

東京大学草創期の授業再現2（葛西康徳）
リズムの諸問題3 リズムと科学（鈴木泉）

35 朝日講座

朝日講座は、朝日新聞社の寄付によって2011年度から文学部において開講されている学部横断型の授業である。2011年度からの5年間は「知の冒険——もっともっと考えたい、世界は謎に満ちている」をタイトルとして、全学部共通科目のさきがけとしての機能を果たしてきた。そして2016年度からはタイトルを「知の調和——世界をみつめる 未来を創る」に改め、朝日講座第Ⅱ期としてさらに5年間の延長が決定している。

朝日講座では、文学部教員が授業内容の企画構想とコーディネートをを行い、文学部教務係が履修登録などの事務を取り扱う。また、東京大学大学総合教育研究センター（以下大総センター）に朝日新聞社寄付研究部門が設置され、講座運営を担当する専任の教員がおかしている。歴任者はいずれも人文社会系研究科の出身で、2011年度～2013年度は富澤かな特任助教（宗教学）、2014年度～2015年度は白岩祐子特任助教（社会心理学）が務めた。毎回の授業では、多様な学問分野からの講師を招き、学生が主体的に議論に取り組むという新しい試みを取り入れてきた。2013年度からは、履修者が担当の回に分かれて事前に予習をしたうえで授業に臨み、グループワークのリーダーを務めるアクティブラーニングの形式を採用している。専門分野を異にする学生間での議論や学びが実現されていることに加えて、TAが予習や議論の補助に入るなど、大きな役割を果たしていることも、この朝日講座の特長といえる。

このように朝日講座は文学部科目でありながら、全学部後期課程の履修と、大学院生の振替履修を対象とし、文理の枠組みを超えた広い視点を養うことをめざしてきた。

2014年度は、吉澤誠一郎准教授が担当し、「共に生きるための知恵」というテーマを設けた。「共生」の困難さや「共生」を実現するための試みや考え方を多様な分野からの視点を取り入れつつ議論した。

2015年度は、渡辺裕裕教授が担当し、テーマを「媒介/メディアのつくる世界」とした。いわゆるマスメディアに限らず、我々の世界をさまざまに形づくったりつないだりする役割を果たすメディアのあり方についての議論と考察を深めた。（各年度の講義情報は文末を参照。）

このように、全学的な教育改革に資する新たな授業の形を提示することが朝日講座の最大の目的であるが、同時にその教育成果を広く社会に還元、共有することも重視している。Webサイト（<http://www.u-tokyo-asahikouza.jp/>）及びツイッター（東京大学朝日講座 @Asahi_Koza）を活用して講義情報を発信し、また毎年多数の講義を公開講義として一般からの聴講者を受け入れている。さらに、2012年度からは試行的に希望する高等学校にリアルタイム配信を行うなど、開かれた形態の授業を模索している。高校への配信にあたっては、遠隔講義システム「UTOP」を利用することで、保存・再利用の危険なく講師映像と講義資料画像を送信することが可能となっている。担当者間で把握している限りでは、単位を認定する通常講義の学外への同時配信は本学初の試みである。正規履修者の学びを阻害することのないよう配慮しつつ、2014年度は11校、2015年度は9校への配信を行った。また、授業の内容については映像記録を残し、著作権処理と編集を加えた講義資料と映像をUTokyoOCW（<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>）上で順次インターネット公開している。撮影・配信業務は、大総センターの特任助教および技術専門職員が担当し、TAが補助を行っている。

以上のように、朝日講座は、実験的・試行的な要素を多く含む新しい授業であると言える。学部三年生以上の学生にとって意義のある教養教育として、一定の役割を果たすように努力してきたと同時に、東京大学の教育を世間一般に公開するための窓口としての役割を担っている。学生に質の良い授業と学びの機会を提供すると同時に、その内容を一般聴講者や高校生にも公開していくために、いっそうの工夫と模索が求められているとも言えるだろう。

各年度の講義（2014年度～2015年度）

2014年度 テーマ：「共に生きるための知恵」

- 第1回 10月6日 吉澤誠一郎（東京大学文学部 中国近代史）
「共生の夢と困難さ」
- 第2回 10月20日 白波瀬佐和子（東京大学文学部 社会学）【公開講義】
「格差社会における共生のあり方」
- 第3回 10月27日 大村敦志（東京大学法学部 民法）
「近代日本が『民法』と出会うとき」
- 第4回 11月10日 奈良一秀（東京大学新領域創成科学研究科 微生物生態学）
「自然界にあふれる生物間共生」
- 第5回 11月17日 佐藤仁（東京大学東洋文化研究所 資源論）
「環境統治の時代—自然をめぐる国家と社会の共存」

- 第6回 12月1日 [拡大回・宗教の共存、宗教との共生] 【公開講義】
藤原聖子（東京大学文学部 宗教学）
「宗教をめぐる共生の現在—“異文化理解”的発想の陥穽」
大稔哲也（早稲田大学 中東社会史）
「エジプトを生きてきたムスリムとキリスト教徒」
- 第7回 12月8日 佐藤宏之（東京大学文学部 考古学）
「祖先の遺跡”は誰のものか？—文化財の保護と活用」
- 第8回 12月15日 [拡大回・人の輪に入るロボット] 【公開講義】
大武美保子（千葉大学 知能機械学）
「日常会話の場に加わって人の賢さを引き出す」
三宅なほみ（東京大学大学総合教育研究センター 学習科学）
「教室で話し合いながら学ぶ子どもたちの仲間になる」
- 第9回 1月19日 上田俊英（朝日新聞社 編集委員） 【公開講義】
「科学—その不確かさと、どうつきあうか」
- 第10回 1月26日 小泉秀樹（東京大学工学部 まちづくり）
「多主体協働共生のまちづくり」
- 第11回 2月2日 森肇志（東京大学法学部 国際法）
「国際社会における共生の法」

2015年度 テーマ：「媒介／メディアのつくる世界」

- 第1回 9月14日 渡辺裕（東京大学文学部 美学芸術学・文化資源学） 【公開講義】
「”作品”とは？”演奏”とは？：”デジタル・リマスター”の時代の音とメディア」
- 第2回 9月21日 熊谷晋一郎（東京大学先端科学技術研究センター 当事者研究） 【公開講義】
「メディアとしての身体が顕在化するとき：痛みと自閉スペクトラム症を例に」
- 第3回 9月28日 野崎敏（東京大学文学部 仏語仏文学） 【公開講義】
「メディアの相互作用：文学と映画をめぐる」
- 第4回 10月5日 松井彰彦（東京大学経済学部 貨幣経済学） 【公開講義】
「媒介者としての貨幣・言語・慣習：経済学からのメッセージ」
- 第5回 10月12日 鈴木淳（東京大学文学部 日本史学） 【公開講義】
「戸長というメディア：文明開化の伝え方」
- 第6回 10月19日 岡ノ谷一夫（東京大学教養学部 生物心理学・神経行動学） 【公開講義】
「コミュニケーションの進化と心の発生」
- 第7回 10月26日 村本由紀子（東京大学文学部 社会心理学） 【公開講義】
「社会的感性の造形：“自己と他者”という問題をめぐって」
- 第8回 11月2日 武藤香織（東京大学医科学研究所 社会学・研究倫理） 【公開講義】
「医学・生命科学研究とわたしたち」
- 第9回 11月9日 高野明彦（国立情報学研究所 連想情報学） 【公開講義】
「知識の蔵のつなぎ方：情報の蓄積を発想力に換えられるか」
- 第10回 11月16日 福井健策（弁護士 著作権法） 【公開講義】
「変容する、著作権と知の創造／流通／共有」
- 第11回 11月23日 高岸輝（東京大学文学部 美術史学）
「生成されるランドスケープ：風景画と地理感覚・世界観の相剋」
- 第12回 11月30日 佐藤健二（東京大学文学部 社会学） 【公開講義】
「Mobile-Phone時代と他者認識の変容：メディアとしてのことば」
- 第13回 12月7日 上丸洋一（朝日新聞 編集委員） 【公開講義】
吉見俊哉（東京大学情報学環 社会学・文化研究）
「新聞報道にとっての”歴史的事実”と公正性」